

第50回日独スポーツ 同時交流大会



BERICHT DES 50.JAPANISCH-DEUTSCHEN SPORTJUGEND SIMULTANAUSTAUSCHES

NO! スポハラ

スポーツ・ハラスメント（暴力、暴言、ハラスメントなど）に、
みんなが『NO！』と言う社会を目指して

『スポハラ（スポーツ・ハラスメント）』とは？

「スポハラ（スポーツ・ハラスメント）」とは、スポーツの現場において、「暴力」、「暴言」、
「ハラスメント」、「差別」など“安全・安心にスポーツを楽しむことを害する行為”のことです。

指導者と指導を受ける者との関係のみならず、スポーツの現場における関係者の誰によっても、
また誰に対してであっても、スポハラは起こります。



Japanese
Olympic
Committee



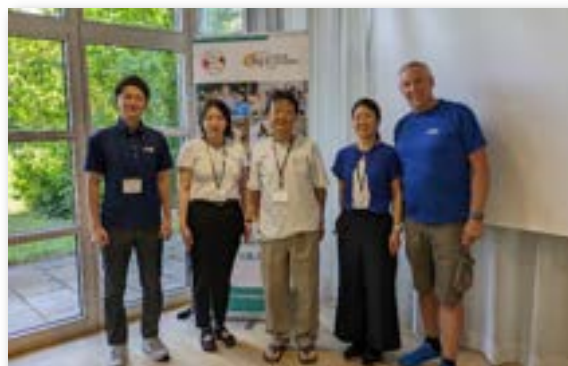
日本スポーツ少年団HP⇒



この活動は、スポーツ振興くじ助成金を受けて実施しています



第 50 回日独スポーツ少年団同時交流日本団







…………… 第 50 回日独スポーツ少年団同時交流報告書 ……………

目 次

第Ⅰ章	ドイツ研修の旅 ——日本団派遣の記録	2
■	団長団総括(団長・総務)	3
■	全体プログラム(前半)	10
■	地方プログラム	11
■	全体プログラム(後半)	29
■	引率指導者レポート	30
■	団員感想文	39
■	テーマレポート	54
■	お世話になった方々	58
第Ⅱ章	ドイツの友を迎えて ——ドイツ団受入の記録	59
■	全体プログラム(前半・東京)	60
■	地方プログラム	61
■	全体プログラム(後半・東京)	116
■	ホームステイ受入家庭・リーダーの声	117
第Ⅲ章	日独スポーツ少年団同時交流 50 周年記念事業	125
■	日本開催式典	126
■	ドイツ開催式典	128
第Ⅳ章	実施概要報告	129
(1)	実施要項	130
(2)	日本団派遣概要	135
①	事前研修会	135
②	日本団の行動	135
③	日本団の編成	136
(3)	ドイツ団受入概要	137
①	ドイツ団の編成	137
②	受入通訳一覧	137
(4)	日独スポーツ少年団国際交流協定書(2022-2023 年)	138

あとがき

第Ⅰ章 ドイツ研修の旅

●日本団派遣の記録



50 周年記念の同時交流

第 50 回日独スポーツ少年団同時交流

日本派遣団団長 遠藤 啓一

今回は、新型コロナのパンデミック後で、実に 4 年ぶりの対面での同時交流の旅でした。しかも、50 周年という記念すべき年に、団長という大役をおおせつかり、責任の重大さを感じていました。

しかしながら、日本部会をはじめとするドイツスポーツユースゲントの方々や地方での受け入れ担当者、受け入れ家族の方々の準備や配慮、通訳の方々のご協力により、また、参加した引率指導者・団員の積極的な交流姿勢により、大きな事故もケガもなく、充実した日々を過ごし無事に全員が帰国できたことに安堵しているところです。

飛行機の手配の都合もあり、今回日本団は 2 便に分かれての旅でした。出国前の東京で、ちょうど来日したドイツ団員との話し合いや、東京見物で一緒に行動したこと、また日本スポーツ少年団主催の 50 周年記念式典に参加したこと等は、その後のドイツでの生活へ良いスタートが切れた要因の一つになったと、今となって感じています。酷暑の東京で一日を過ごし、その晩に出国した第 1 便の方々には大変だったと思いますが、ドイツに行く前に直接団員同士で交流する機会があったのは、よかったと思います。

今回のようにミュンヘンで全体研修が行われるのは初めてだと思いますが、ミュンヘン市庁舎での表敬訪問、歓迎式典は盛大でした。時折の雨や、日本とは打って変わった涼しさに体調変化をきたす団員もいましたが、前半の全体研修はそれなりに充実したものでした。各グループは、全体研修を終え、地方プログラムへと旅立って行きました。



団長団

我々団長団は、まず、バイエルン州内にいた二つのグループを訪問しました。初めに東北グループ。東北グループとは、ノイシュバンシュタイン城の見学や大きな温泉プールを体験しました。次の九州グループは、空手グループが受け入れで、空手の練習を体験しました。その後移動したニュルンベルグでは、コンラート氏(通称コニー)にお世話になりました。コニーは旧知の友人で、彼は自宅で夕食会を開いてくれました。

その後、バーデン・ヴュルテンブルグ州のライメンに移動し、関東Ⅱ・東海グループと合流しました。

ここでは重量挙げグループが受け入れでした。ドイツの強化指定選手のいるクラブで、きちんと競技スポーツをやっているクラブでした。ここでは重量挙げのトレーニングを体験しました。いわゆる競技性を前面に押し出しているクラブは初めてでした。重量挙げは肉体的に負荷の多いスポーツであり、ある程度身体が出来てから本格的なトレーニングに入るのかと考えていましたが、成長過程では無理のない適切な負荷を与え、技術的なトレーニングは小さい時から必要だとのことでした。ここではドイツ国内トップの選手との対談が組まれていて、彼らの話は大変興味深いものでした。



空手クラブ代表者にインタビュー

最後は四国グループ。ラインランド・プファルツ州の、カイザー
スラウテルン市を表敬訪問しました。東京都の文京区と姉妹都
市だそうです。市庁舎近くに日本庭園があり、ここで昼食。おにぎ
りと餃子ができました。懐かしい味がしました。ライン川下りも楽し
んで、我々は、後半の全体研修の地であるフランクフルトへと移
動しました。

フランクフルト、レーマーでの表敬訪問及びドイツスポーツユ
ーゲント主催の 50 周年記念式典は、益子本部長も出席してく
ださり、盛大に行われました。ピアノ、バイオリン、ヴィオローネ
の生の三重奏付きの式典は、厳かな中にも和やかな雰囲気で行
われました。

今回の同時交流は、3 年間のプランクのせい、少しちぐは
ぐなところもあったかもしれませんが、全体的には充実した交
流だったのではないかと総括したいと思います。ミュンヘンで地
方プログラムへ見送った時と比べ、フランクフルトに集まって来
たときの団員達の生き生きとした顔つき、さよならパーティーで
の団員・関係者入り混じっての大盛況は、何よりもこのことを物
語っているように見えます。

先述したように、渡航時の疲れ、時差、気候の変化、初めて
の海外という精神的なプレッシャー等が影響したのか、渡航当
初は体調を崩した団員も数名いましたが、大事に至らず、充実
した交流を終え帰国できたことは、引率指導者の方々の細かい
配慮はもちろん、養護教諭でもある大久保総務や、佐藤庶務の

きめ細かいサポートによるものです。感謝してもしきれません。
今回の交流が、参加した引率指導者・団員の方々の今後の人
生の糧となるよう、また今回繋がった絆が今後とも末永く続くこ
とを祈ってやみません。

私事ですが、今回の旅では、10 数年来の数名の旧友と再会
を果たすことができ、旧交を温めることができました。その中の
一人でもある、イェンツ・ウヴェ・デッパ氏には、エスコートドライ
バーとして全期間大変お世話になり、また、通訳の築野真紗子
さんにもお世話になりました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

日独同時交流が、今後とも多くの若者の友情を育み、末永く
続くことを祈念し、総括いたします。ありがとうございました。



ヘレンキームゼー城前



ミュンヘン市庁舎表敬訪問にてdsj本部長と

第 50 回日独スポーツ少年団同時交流

～これからも続く交流～

第 50 回日独スポーツ少年団同時交流 日本派遣団総務 大久保 香織

はじめに

約 4 年ぶりの対面での同時交流であり、第 50 回の記念すべき日独同時交流に際し、日本スポーツ協会少年団課をはじめ、各地方のスポーツ少年団事務局、各单位団の指導者様、保護者、引率指導者の皆様、そして現地において大変ご尽力いただきましたドイツスポーツユエント(dsj)事務局ならびに日本部会、地方プログラム受入団体・連盟・責任者の皆様・ホストファミリーの皆様、そして通訳の方々に心から感謝を申し上げます。

事前研修会(5月20日～5月21日)

第 50 回同時交流における日本団派遣にあたり、派遣内定者に対して訪問国ドイツのスポーツについて、また渡航に関する予備知識習得のため、5 月 20 日～5 月 21 日にオンラインでの事前研修会が行われました。引率指導者の皆様とも、団員とも画面上でのやり取りになり、画面に映る皆様の表情から、直接会えないことでの不安が大きいように感じました。団長団だけは、打ち合わせのため日本スポーツ協会に集まりました。久しぶりの対面での日独交流だからなのか、それとも他の理由からか、緊張感のある会議室内の雰囲気を感じながら過ごした二日間だったように思います。初めから人数の少ないグループがあることなどから、各班でどのような役割を必要とするか、団員や引率指導者の皆様で考えていただき、グループごとに自分たちに合うやり方を模索してもらうという形で日独同時交流がスタートいたしました。集合している団長団は、情報交換や不安要素などを出し合い、同時交流参加経験豊富な日本団遠藤啓一団長にアドバイスをいただき、出発までに何をどんなふうに着用するか楽しみと、同時に不安も(事前研修欠席者がいたこともあり…)共有した二日間の研修となりました。

出発前(7月25日集合まで)

7 月 25 日に日本団が集まるまでの間に、ひとりふたりと辞退者が出てきました。既に事前研修会を終え、グループごとの事前研修会が既に計画されていたり、実施済みであったりするにも関わらず、学校行事等と重なってしまうため参加できないなどの理由で 5 月末～7 月まで、辞退者の連絡やグループの再編成の検討など、予想していたよりも多くの変更を要し、5 月にいただいた資料は瞬く間に訂正や書き込みでいっぱいになりました。体調不良で出発直前に辞退した者もあり、最終的に日本団は、団長団合めて 58 名となりました。

今年は、日独同時交流が 50 周年、日本・ドイツの両国で 50 周年式典が行われました。日本では日本団出発前の 7 月 26 日に国立オリンピック記念青少年総合センターで、ドイツ団到着の翌日に行われました。日本団・ドイツ団が揃って出席する 50 周年式典には、これまで両国を繋いでくださった通訳の皆さんへの感謝を込めて表彰する場面があり、たくさんの通訳者の皆さんが舞台上に並ばれ、これまで両国で重ねてきた交流の歴史や通訳の方々が繋いでくださった絆を感じる時間となりました。個人的な話にはなりますが、オンラインで実施されたユースキャンプでお世話になった通訳のあきらさんと、この東京での滞在で初めてお会いすることができました。とてもよく知っているのに、会うのは初めてという不思議な感覚でした。こういったことは、コロナ禍以降何度かあって、今回日独同時交流に参加した団員の中にも、見たことのある顔が数名。オンラインのシニア・リーダースクール(2021 年、2022 年)に参加していた子、2020 年日独スポーツ少年団ユースキャンプ(2021 年実施)に参加していた子がいました。「シニアで隣の班でした！」と声をかけてくれた子がいて、自分の班の講師以外の顔も覚えている子がいるんだ～と感動し、団員同士でも、「オンラインのシニア

アと一緒にだったよね?」「そうそう!」というような会話が聞こえ、オリンピックセンターでの数日間は、オンラインでは縮められなかった団員同士の距離感を、少しずつ近づけてくれる貴重な時間でした。

いざドイツへ。7月28日～7月30日(全体プログラム前半)

出発は、日本団の人数は少ないながら、7月27日の夜に出発した第1便、28日朝に出発した第2便に分かれての旅となりました。団長団は、庶務佐藤さんが第1便、団長の遠藤先生と大久保が第2便、とにかく第2便の子を全員飛行機に乗せなければ!ということで、何度もパスポートの確認をして、誰も大寝坊することなく出国し、全体プログラムが始まりました。ミュンヘンに到着してからは、ミュンヘンの街並みに感動し、バイエルン・ミュンヘンの選手たちがいつも手を振るあのバルコニーから街を見るなど、疲れが吹き飛ばすような経験をさせていただきました。長時間のフライトの疲れだけでなく、連日35℃を越える暑い東京で数日過ごし、ドイツ団との観光に式典といった緊張した時間を過ごしたことも原因の一つかもしれませんが、飛行機の中で体調を崩した子や、ドイツに着いてすぐに発熱した子がおり、最初から dsj の皆さんには本当にお世話になりました。素早い対応で、発熱した子を別の部屋に移していただいたり、水や食べやすいものを運んでくださったりしたおかげで、地方プログラムには予定通り全員が出発することができました。私にとって2回目のドイツは、10年という時間を感じないくらい、変わらない笑顔に迎えられる温かい気持ちでスタートを切りました。

地方プログラムのスタート

団長団は、私たち3名のほかエスコートのイェンツ・ウヴェ・デッペさん、通訳の築野真紗子さんの5名。30日の午前中は、今回の交流テーマであるSDGs×Sportについて、また dsj について学びました。その後、それぞれの班がミュンヘンのスポーツシュールを出発していき、東北グループと団長団が残りました。団長団は、ホテルへ移動するため、出発を見送った後、初めて5人だけで食事をし、ホテルでプログラムについての打ち合わせを行いました。食事の際や打ち合わせの後、本当にみんなス

ポーツが好きなんだとすぐに実感するほど話題がずっとスポーツに関する事で、それぞれ違う立場から見るスポーツについて話すことができました。

7月31日 オリンピアパークを見学したり、午後からは東北グループとアリエンツアレナを見学しました。東北グループは、移動がなかったこともあり体調不良だった子も元気になってきて、安心しました。少し表情が硬い団員もいました。



オリンピックシンボル(オリンピアパーク)

〔8月1日〕この日は、お城の見学の日で、東北グループと共にホーエンシュヴァンガウ城とノイシュバンシュタイン城を見学しました。自然豊かなところにあり、ちょっとしたハイキングを楽しみながら、大きなサンドイッチをおいしくいただきました。その後、団長団はオーバーアマガウの大きな修道院を見学したり、街を散策したりしました。この旅で何度も食べたアイスクリームも、ここで初めて食べました。



アイスを頬張る遠藤団長

〔8月2日〕ヨーロッパでもかなり大きな規模のプール・テル

メ・エアディングへ。東北グループによると、福島県にあるハワイアンズにとっても似ているとか。波のプールや流れるプールのなかで、ウヴェさんにスイムエクササイズを教えていただき、しっかりと運動をしたあと、東北グループとお別れし、次のトラウンロイトへ向かいしました。ホテルに到着し、カレーヴルストを食べました。(とてもおいしくて、10年前は何度も食べました。)ドイツでは、外のテーブルで食事をする事が多く、景色を楽しみながらの食事がとても美味しかったです。

〔8月3日〕 昼間は、団長団で街の散策をしたり、ローデルバーン(手動のジェットコースター)に乗ったりして過ごしました。バイアスロンのドイツ連邦トレーニングセンターでは、選手が夏のトレーニングをしているところを見ることができました。近くには大きなスキージャンプ台もありました。連続プールに行くことになるのを、ウヴェさんが気遣ってくださったことで、初めてバイアスロンのトレーニングを見ることができました。九州グループとは、夕方トラウンロイトの空手道場で合流し、空手の稽古の見学。九州グループの政岡先生の特別指導に、感動するドイツ団員たちの姿だけでなく、初めて空手をやる九州グループの団員も積極的に参加する姿を見せていただきました。通訳の内田美樹さんも全力で参加されていて、まさに全力の架け橋となっており、感謝するとともに、とても良い雰囲気を感じました。

8月4日 朝から九州グループの皆さんとキーミングへ向かいしました。ホストファミリーも参加され、とても楽しい雰囲気で見学できました。この日はさよならパーティがあり、九州グループの出し物や受入をしてくださった皆さんとの会食が行われました。

団長団プログラム(8月5日～8月6日)

〔8月5日〕 日本好きのクリスチャン・コンラートさん(コニーさん)とニュルンベルクを観光し、カイザーブルク城などを見学しました。何度も日本人を連れてここを観光しているのでしょう、何も見ていないのに街のことやお城について、スラスラと説明してくださいました。おやつにいただいたレーヴクーヘンのカロリーを聞いたときは、少し心の整理をする時間が必要でした。夕食は、コニーさんの素敵なおうちでいただきました。すぐくお料理が上手で、デザートまで手作り、いつか私もこんな風にドイツの方をもてなしたいと思いました。日本から持ち帰ったものや、

きついろいろな方からのお土産だろう品々が並ぶ素敵なおうちで、ホームステイのようなゆったりとした時間を過ごさせていただきました。

〔8月6日〕 ニュルンベルクの地下通路を見学、この日もコニーさんが案内をしてくださいました。雨が降ったり止んだり、今回のドイツでは傘が必要な日が多く、この日も折り畳み傘が役に立つ一日でした。昼食を食べた後は、関東Ⅱグループの滞在するライメンへ移動しました。

〔8月7日〕 連邦トレーニングセンターへ。関東Ⅱグループに合流しました。ここでは、重量挙げの選手たちがトレーニングを行っています。東京オリンピックにも出場したというオリンピックも、ここで練習しているということでした。スナッチについて学び、トレーニングにも少し参加させていただきました。関東Ⅱグループの団員たちは、前日もトレーニングに参加していて、この日は全身の筋肉痛に悲鳴を上げていました。全く同じトレーニングはできないものの、一緒にトレーニングすることで連帯感が生まれているような気がしました。一緒に作った昼食は、とても楽しく美味しかったです。午後は、重量挙げの選手たちとの交流。厳しい制限のある生活の中で、トレーニングを積んで次のオリンピックを目指す選手たちの言葉に、強い想いを感じました。

〔8月8日〕 ハイデルベルクの観光をしました。通訳の真紗子さんが通っておられた大学の建物の中を見せていただいたり、ハイデルベルク城を見学したりしました。衝撃的だったのは1914年まで使われていたという学生牢で、悪いことをするとこに入れられたという。中はたくさんの落書きが壁や天井にびっしり。そういった歴史にも触れながら、真紗子さんおすすめのアイスクリームを食べました。(ドイツにいる間に何度も何度もアイスクリームを食べました。)午後は、関東Ⅱグループの団員とエンパワメント/アンチ・ドーピングのワークショップに参加しました。管理のため、アプリに練習スケジュールや泊まっている場所、ドーピング検査を受けられる時間帯などを常に登録しないといけないなど、制限ある生活の中で競技に取り組む、大会に出場していることが分かりました。その後、四国グループに合流するため、出発しました。この日の夜、dsj のマズツフ古川実千子さんがホテルに寄ってくださって、各グループからの

連絡の有無などの情報交換を行いました。

〔8月9日〕 四国グループのプログラムに参加するため、ビンゲンへ。ビンゲンからローレライまで、ライン川クルーズ。午後からは天気良く、景色の良い展望台からの眺めを楽しみました。ちょっとしたトラブルでたくさん歩きましたが、良い運動だったということ。

〔8月10日〕 カイザープファルツの見学、市庁舎の表敬訪問を行いました。歴史ある建物の見学や、市庁舎塔から見える景色は、ミュンヘンの市庁舎ともまた違って、自然と調和した街の美しさを感じました。昼食は、なんと日本庭園のなかにあるお茶屋さんで、おにぎりや揚げ餃子などをいただきました。久しぶりの白いご飯、とても美味しくいただきました。日本庭園の中には、仏像や鳥居があり観光客も多くいらっしやっただけで、ドイツで日本を感じるひと時となりました。日本庭園を最後に、団長団の地方プログラムは終わりを迎え、四国グループよりも一足早く、私たち5人はフランクフルトへ向かいました。



カイザースラウテルン市の日本庭園

8月11日～8月14日(全体プログラム 後半)

〔8月11日〕 各グループが帰ってくるのを迎えたり、益子本部長と一緒に dsj の見学や昼食をとったりして、良い時間を過ごしました。

ただ、この日ドイツではよく起こる電車の遅延や運休が団員の足を止めてしまい、通訳の方々や dsj の方々がおられなかったら、どうすることもできなかっただろうと思います。無事に集合出来て本当に良かったと思いました。移動が長かったグループもあり、疲れている団員もいたように思いますが、それ以上にフランクフルトに到着した安心感や地方プログラムの充実感を持って集合していたように感じました。



dsjで益子本部長とランチ

〔8月12日〕 フランクフルトへ出発、フランクフルト市長表敬訪問と50周年式典が行われました。10年ぶりに訪れたレーマー市庁舎は、変わらず緊張感のある空間でした。この式典で、あの緊張感の中で演武を見せた団員二人には、敬意を表したいと思います。また、これまでの50年間の日独交流の歴史を感じる、素晴らしい式典でした。記念すべき50周年の年に同時交流に参加させていただいたことに感謝いたします。



レーマー市庁舎

式典終了後は、最後のお土産探しに向かい、シュレーに戻って団長団と日本部会で評価会を行いました。地方プログラムに関して団長団からお願いしたことは、さよならパーティがないグ

グループがあり、とても残念に思っているグループがあったので、できればどんな形でもいいのできよならパーティを行っていたきたいということ、感謝の気持ちを表現する場があったらよかった、練習してきた出し物を見せる場を、用意してもらえたら嬉しいということだけだったように思います。その後、団員達もシュールに戻ってきて、全体評価会が行われました。各グループから今回の日独交流の成果が発表され、言葉の一つひとつから充実感・満足感そしてもうこの交流が終わってしまうという寂しさも感じました。ドイツの楽しいきよならパーティーでは、会いに来てくださったホストファミリーへの感謝、長い時間一緒に活動してくださった通訳の方への感謝を伝える場面を見ることができました。翌日帰ることを忘れるくらい、踊ったり歌ったりドイツ最後の夜を堪能していました。

〔8月13日〕第1便は8時過ぎから荷物をバスに積み込んで、フランクフルト空港へ。第2便は戻ってきたバスに荷物を積み込み、出発しました。最後まで、手を振ってくださった dsj の方々、スタッフの方々、通訳の方々。疲れているのに本当に最後の最後まで、親切にしてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいです。少しの遅れがあったものの、第1便も2便も14日朝、無事に羽田空港に到着し、日本派遣団は解散となりました。

おわりに

私にとって2回目の日独交流派遣は、10年の時を感じさせないところと、大きく変わったと感じるところがありました。10年前は、初めての日独交流だったことや、グループの引率指導者であったことから、グループの団員たちといかに楽しんで過ごすか、またどんなふうに交流を深めるか、語学力に自信がない子が多いグループだったため、振り返ってみると体当たりな交流がメインだったように思います。10年前みんなが持っていたデジカメは、今回一度も見ることではなく、一眼のかわいいカメラを持っている子以外はみんなスマホで写真を撮り、その場でその写真をシェアするようなスピード感のある交流が行われていました。10年前必死に捲っていた「ウィルコメン」はスマホの翻訳アプリがあるからほとんど使わなかった団員もいて、私のウィルコメンも今回は書き込みがすごく少なかったことを残念に思いました。(10年前のウィルコメンを開くと、あの時こんな話

をしていたなあとも今でも思い出すことができるのに。)今回の交流で感じた、スマホやそれを世界とつなぐ Wi-Fi がなければできない交流には、なりすぎないことを願いながら、自分も便利な機能に相当助けられた交流でした。また、第50回という記念の年に自分の普段活動する近畿からの参加団員が2名しかおらず、残念ながら近畿だけでグループを編成できなかったことも今後の課題として持ち帰りたいと思います。

「日本人は意見をなかなか言えない」とか「遠慮をしてしまう」というイメージがあり、日独交流では団員に対し、地元でのドイツ団受入時や今回の交流でも「まずは自分の意見を持とう」と伝えてきました。地方プログラムでは、そういったイメージを吹き飛ばすくらい、ディスカッションやワークショップのなかで質問したり意見を言ったり、時にはこれが食べたい！などの要求もしている場面を見ることができました。10年前、自分のグループではこんな風に自分を表現できる子がいたんだろうかと感心しながらも、自分のやるべきことをできていない団員や dsj の方々に難しいお願いをしている班もありました。この交流がスポーツ少年団活動のゴールになることなく、スポーツを通して学び続ける人たちであってほしいと願います。団員たちの「受入をやりたい！また会いたい！」が実現できればいいなあと感じ、今後も成長していく姿を見守っていけたらと思う同時交流となりました。

この日独同時交流に関わってくださった全ての皆様に、最大級の感謝を込めて！！Vielen Dank！

全体プログラム（前半）

7月25日(火)

日本団集合(国立オリンピック記念青少年総合センター)

全体会

グループ別ミーティング

7月26日(水)

直前レクチャー

結団式

日独団員交流会

7月27日(木)

都内自由研修

50周年記念式典

第1便東京国際空港出発(NH217)

7月28日(金)

第2便東京国際空港出発(LH715)

第1便ミュンヘン空港到着、スポーツシュレヘ移動

オリンピアパーク散策(第1便のみ)

第2便ミュンヘン空港到着、スポーツシュレヘ移動

夕食・オリエンテーション

7月29日(土)

表敬訪問(ミュンヘン市庁舎)

市内オリエンタリング

グループ別自由研修

7月30日(日)

dsjの紹介

交流テーマ「スポーツ×SDGs」について

地方プログラム担当者と対面、移動



歓迎式(スポーツシュレ)



オリンピックシンボルと記念撮影(オリンピックスタジアム)



dsjの紹介とスポーツ×SDGsについて



表敬訪問(ミュンヘン市庁舎)

北海道グループ

ベルリン/ブランデンブルク



エラムアン！ミナ！ウタリポロンノ
～学ぶ！笑う！仲間たくさん！～



サップ体験



青空の下エコ村までサイクリング🚲

日程

7月30日(日)

ベルリンへ移動／

宿泊施設(セントル・フランセ)にて担当者と面会

7月31日(月)

ドイツ団員と対面

他言語体験／スポーツ活動(サップ)／フリードリッヒ通り散策

ブランデンブルク門、ホロコースト慰霊碑見学

8月1日(火)

オリンピック競技場見学／

交流テーマについてのワークショップ

8月2日(水)

他言語体験／エコ村プロドヴィンで昼食、農場見学／

ベルリン散策

8月3日(木)

ベルリン観光

8月4日(金)

他言語体験

博物館、動物園見学

さよならパーティー

8月5日(土)

ポツダム(ブランデンブルク州)へ移動／

ドイツ団員とのプログラム／ホストファミリーと対面

8月6日(日)

ファミリーデー



ボルダリング体験



ワークショップの様子



インラインスケート体験



オリンピックシンボルとともに(オリンピックスタジアム)

8月7日(月)

ルイーゼン広場へ移動／周辺観光

サンスーシ公園でピクニック

8月8日(火)

ポツダム州議会見学／現地ボランティア団体と交流

スポーツ活動(ボルダリング)

8月9日(水)

交流テーマについてのワークショップ

スポーツ活動(ビーチバレー)

映画鑑賞

8月10日(木)

スポーツ活動(インラインスケート)

さよならパーティー

8月11日(金)

フランクフルトへ移動



イーストサイドギャラリー(ベルリンの壁)



博物館

東北グループ

バイエルンスポーツユーゲント

WE ARE ONE

～笑顔で元気に最後まで♡～



アリアンツアレナ



ノイシュバンシュタイン城

日程

7月30日(日)

英国庭園散歩／スポーツ見学(川サーフィン、サッカー)

7月31日(月)

BMW ミュージアム見学／アリアンツアレナスタジアム見学
フュッセンへ移動

8月1日(火)

ノイシュバンシュタイン城見学／ホーエンシュヴァンガウ城見学

8月2日(水)

ミュンヘンへ移動／エルディングプールで体験
カーム市へ移動／ホストファミリーと対面／
ウェルカムパーティー

8月3日(木)

ファミリーデー／スポーツ活動(インラインスケート)／
現地の学校と交流

8月4日(金)

表敬訪問(カーム市役所、州議会議員)／散策、自由行動

8月5日(土)

ファミリーデー／チェコ観光／
ヴァルトミュンヘンで野外歴史劇を観劇

8月6日(日)

ファミリーデー

8月7日(月)

レーゲンスブルク観光



チェコでの一枚



インラインスケート体験



表敬訪問



ディスカッションの様子

8月8日(火)

自然観察体験／交流テーマディスカッション／ドラゴン博物館
見学／スポーツ活動(居合道)

8月9日(水)

スポーツ活動(多種目)／ファミリーデー

8月10日(木)

ヒルシャウへ移動／アスレチック体験／さよならパーティー

8月11日(金)

フランクフルトへ移動



さよならパーティー



現地新聞記事

関東 I・近畿グループ

ドイツ乗道ユージェント



ハンブルク市庁舎



お菓子パーティー

日程

7月30日(日)

ハンブルクへ移動／ホストファミリーと対面／

ウェルカムパーティー

7月31日(月)

市庁舎見学／ハンブルク観光

8月1日(火)

観光(動物園)／バーベキュー

8月2日(水)

港見学／スポーツ活動(ボルダリング)／発電所見学

8月3日(木)

ファミリーデー

8月4日(金)

市場見学／アミューズメント施設体験(トランポリン)／

ホストファミリーと交流

8月5日(土)

シェーンハーゲンへ移動／バルト海での自由時間

8月6日(日)

交流テーマについてディスカッション／市街観光／

キャンプファイヤー

8月7日(月)

受入スポーツクラブの紹介／スポーツ活動(柔道)

8月8日(火)

港観光／施設見学(ミニアトウア・ヴンダーランド他)



港で1枚📷

8月9日(水)

アスレチック施設体験／カヌーツアー(アルスター川)／
公園での自由時間

8月10日(木)

施設見学(ムゼウム・デア・イллюージョン)／さよならパーティー

8月11日(金)

フランクフルトへ移動



ホストファミリーデー



ディスカッションの様子



シュトックプロット作り



柔道体験



みんなで力を合わせて 1・2・1・2..(カヌー体験)



スポーツ活動(カヌー、ボルダリング)

関東Ⅱ・東海グループ

モータースポーツユージェント/
重量挙げユージェント

少数精鋭

～力を合わせていざ行かん～



ホストファミリーとの出会い



アルテンケッセル市のレクリエーションに参加

日 程

7月30日(日)

ヘルマン・ノイベルガー・スポーツスクールへ移動/
地方プログラムの説明/ホストファミリーとの懇親会

7月31日(月)

ホンブルグ・シュロスベルグ洞窟探検/キアケル城見学/
パン焼き体験/スポーツ活動(アーチェリー、水泳)

8月1日(火)

ルクセンブルク散策/観光(ザールシュライフェ他)

8月2日(水)

アルテンケッセル市庁舎でレクリエーション参加/施設見学
(フェルクリンゲン製鉄所)/観光・自由時間

8月3日(木)

観光(ガイアレイ橋、ベネディクト修道院)

8月4日(金)

観光(フォアバッハ市場[仏]、ザールブリュッケン城他)/
ザールスペクトル祭り参加

8月5日(土)

ライメンへ移動/重量挙げスポーツユージェントへ引継ぎ/
懇親会

8月6日(日)

ワークショップ/スポーツ活動(重量挙げ)

8月7日(月)

ディスカッション/スポーツ活動(重量挙げ)/異文化交流

8月8日(火)

観光(動物園)/ディスカッション



アルテンケッセル市のスイミングスクールにて

8月9日(水)

観光(ハイデルベルク城他)

8月10日(木)

スポーツ活動(水泳、ビーチバレー他)

ディスカッション

8月11日(金)

フランクフルトへ移動



警察官の話を真剣に聞く私たち



キアケル城でパン作り体験



ザールラント市長さんにバッジをプレゼント！



団長団と一緒に重量挙げのトレーニング



重量挙げオリンピックとの交流



一緒に東京観光した仲間たちと再会

北信越グループ

ドイツスキーユージェント

SUPER 北信越 BROS.
～first penguin に俺はなる！！

ケンプテン

日程

7月30日(日)

交流テーマについてのディスカッション／地方担当者と対面／
TVK スポーツパークへ移動／ウェルカムパーティー／
ホストファミリーと対面

7月31日(月)

ケンプテン市庁舎表敬訪問／市内観光／
スポーツ活動(バスケットボール)

8月1日(火)

観光(ノイシュバンシュタイン城他)

8月2日(水)

ハイキング(ホッホグラートバーン)／ディスカッション

8月3日(木)

施設見学(アドラーポスト醸造所)

8月4日(金)

聖マルクス幼稚園で子どもたちと交流／ブーヘンバルクへ移動
／スポーツ活動(ミニゴルフ)

8月5日(土)

ファミリーデー

8月6日(日)

ファミリーデー

8月7日(月)

クライミング(クレッターヴァルド)／ハイキング

8月8日(火)

スキーフライングヒル見学／スポーツ活動(水上スキー)



ディスカッションの様子



ホッホグラートバーン山頂駅周辺で撮影



スキーフライングヒル

8月9日(水)

施設見学(チーズファクトリーエーデルワイス)／

創作活動(カッティングボード)／チーズシュベッツ作り

8月10日(木)

施設見学(ケンプテン消防署)／ケンプテン散策／

スポーツ活動(ビーチバレーボール)／さよならパーティー

8月11日(金)

フランクフルトへ移動



水上スキー



みんなでパジャリ📷



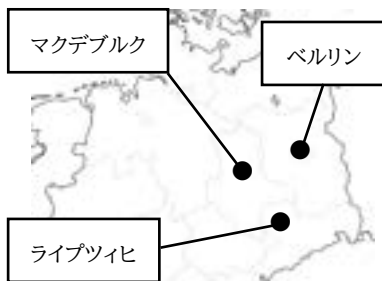
さよならパーティー①



書道を体験していただきました！

中国グループ

ザクセン/ザクセン=アンハルト



スポーツを通してみんなを笑顔に
-うちの笑顔、ぶちかわいいけえ！

日程

7月30日(日)

ディスカッション／

ゲルウィッシュ(ブラウ・ヴァイス・ゲルウィッシュ・ウーネウェーク
体育館)へ移動／ホストファミリーと対面

7月31日(月)

イエリホーファー・ラント郡長による挨拶および街の紹介／
施設見学(なめし革工場)／ブルク市観光／ポーリング大会

8月1日(火)

マクデブルクへ移動／施設見学(MDCC アレーナ他)／
アスレチック体験／バーベキュー

8月2日(水)

ベルリンへ移動／ベルリン観光

8月3日(木)

施設見学(溶接技術研究所)／エルバウム市で交流／
交流テーマについてのディスカッション／スポーツ活動

8月4日(金)

施設見学(カリ工場)／さよならパーティー

8月5日(土)

ライプツィヒへ移動／歓迎パーティー／ホストファミリーと対面

8月6日(日)

ファミリーデー

8月7日(月)

ザクセン州議会見学／ウェーレン市へ移動／ハイキング

8月8日(火)

ザクセン州スポーツ連盟にてディスカッション／施設見学



イエリホーファー・ラント郡長との1枚



スポーツ活動の様子



さよならパーティーにてホストマザーと📷

8月9日(水)

バスツアー／ドレスデン警察署見学／スポーツ活動(柔術)／
バーベキュー

8月10日(木)

モーリッツブルク城見学／さよならパーティー

8月11日(金)

フランクフルトへ移動



アップサイクリングを通して SDGs を学ぶ



施設見学



グループ発表の様子



カリ工場入口

四国グループ

ラインラント=プファルツ

Lass uns Wurst essen gehen !
 ~ソーセージを食べに行こう!~



クラブハウスにて



ハイキング

日程

7月30日(日)

オッターバッハへ移動／歓迎パーティー／

ホストファミリーと対面

7月31日(月)

マインツ観光／州議会見学

8月1日(火)

グラン川でカヌーツアー／マイゼンハイムへ移動

8月2日(水)

ハイデルベルク観光(ハイデルベルク城等)

8月3日(木)

交流テーマについてのディスカッション／

交流活動(ハチの巣づくり他)

8月4日(金)

ドンナースペルクへ移動／文化探究活動／ハイキング

8月5日(土)

ベルワルトシュタイン(Berwartstein)城観光／ハイキング／

消防署訪問／スポーツ観戦

8月6日(日)

ファミリーデー

8月7日(月)

ジップライン体験／スポーツ活動(サッカー、剣道等)

8月8日(火)

スポーツ活動(柔術)／VR 体験／バーベキュー



消防署にて

8月9日(水)

ローレライ観光／ハイキング

8月10日(木)

オッタバツハー市庁舎見学他／さよならパーティー

8月11日(金)

フランクフルトへ移動



スポーツ活動(柔術)



VR 体験(馬車)



みんなで👉



剣道クラブの方々との集合写真

九州グループ

バイエルン/ ヴュルテンベルクスポーツユージェント

話し愛・認め愛・

分かち愛・助け愛せんばばい！！



ブルクハウゼン城へ



トラウンシュタイン郡郡長訪問

日程

7月30日(日)

ディスカッション／ホストファミリーと対面／歓迎会

7月31日(月)

ブルクハウゼン城観光／

交流テーマについてのディスカッション

8月1日(火)

ホストファミリーと交流

8月2日(水)

トラウンシュタイン郡の郡長へ訪問／

スポーツ活動(アイス・ストック・スポーツ※伝統的スポーツ)

8月3日(木)

スポーツ活動(水泳、空手)

8月4日(金)

キーミングへ移動／観光(キーム湖等)／さよならパーティー

8月5日(土)

アウグスブルグ観光／ヴュルテンベルクへ移動／

ホストファミリーと対面／歓迎会

8月6日(日)

ホストファミリーデー／施設見学

8月7日(月)

野生動物園でピクニック／スポーツ活動(水泳)

8月8日(火)

ローテンブルグ観光／スポーツ活動(クライミング)



グラサンコンビ😁(さよならパーティー)



動物とふれあい



空手



蜂蜜作りを学ぶ

8月9日(水)

施設訪問(ブロンバッハ修道院)／交流テーマについてのディスカッション／スポーツ活動(スポーツテスト)

8月10日(木)

ミュルフィンゲンへ移動／施設見学(ebm-papst 社等)
さよならパーティー

8月11日(金)

フランクフルトへ移動



レジデントにて(ヴェルツブルク)

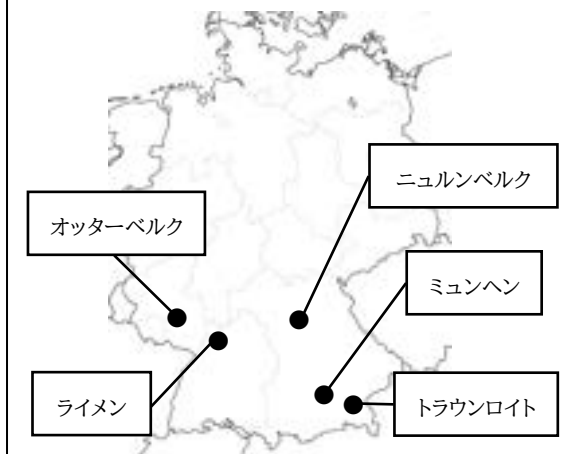


クライミング



ブロンバッハ修道院にて

団長団



プール体験が終わって東北グループとともに



アリアンツアレナ

日程

7月30日(日)

各グループの地方プログラム分散見送り

東北グループとともに英国庭園見学

7月31日(月)

BMW ミュージアム、ミュンヘンオリンピックパーク見学

東北グループとともにアリアンツアレナスタジアム見学

8月1日(火)

東北グループとともにノイシュバンシュタイン城見学

8月2日(水)

東北グループとともにテルメ・エルディングでプール体験

トラウンロイトへ移動

8月3日(木)

ローデルバーン体験

九州グループとともに空手道場視察

8月4日(金)

九州グループとともにキーム湖見学、さよならパーティーに参加

8月5日(土)

ニュルンベルクへ移動

ニュルンベルク城見学

8月6日(日)

ニュルンベルク市内見学

バーデン=ヴュルテンベルク州ライメンへ移動

8月7日(月)

関東Ⅱ・東海グループとともにトレーニング(重量挙げ)、

アスリートとの対談に参加



団長団もトレーニング



関東Ⅱ・東海グループとともに



カイザースラウテルンの日本茶屋



ドイツスポーツ連盟のオフィス

8月8日(火)

ハイデルベルク城見学、関東Ⅱ・東海グループとともにアンチ・ドーピングワークショップ、テーマディスカッション参加
ラインラント・プファルツ州オッターベルクへ移動

8月9日(水)

四国グループとともにライン川にてローレライ見学
マインツ市内スポーツ施設見学

8月10日(木)

四国グループとともにカイザースラウテルン市表敬訪問
フランクフルトへ移動

8月11日(金)

ドイツスポーツユーゲントにてワークショップ
各グループお出迎え



お世話になったドイツスポーツユーゲントの皆さんと



益子本部長と団長団

全体プログラム（後半）

8月11日(金)

フランクフルトへ集結／指導者ミーティング

8月12日(土)

フランクフルト市庁表敬訪問／50周年記念式典／

市内オリエンテーリング／団長団評価会／全体評価会／

さよならパーティー

8月13日(日)

フランクフルト空港へ移動(日本へ帰国)

第1便フランクフルト空港出発(NH204)

第2便フランクフルト空港出発(LH716)



レーマー市庁舎



少林寺拳法演武の様子(50周年記念式典)



さよならパーティーの様子



全体評価会(東北グループ)



ドイツでの最終日『この経験をどう活かすか』

引率指導者レポート

【北海道グループ】木村 和子

『かけがえのない 21 日間』

「指導者として、またドイツに行きたいです。」

11 年前、私は団員として、この日独同時交流に参加し、帰国後に書いた感想文の最後の一文だ。ドイツでの交流は貴重な体験であり、少年団活動が続けてきてよかった、これからも続けていきたいと強く思った経験だった。それから時が経ち 2020 年、また日独同時交流に参加できる機会が巡ってきた。しかし、感染症の影響により中止となり、数年はオンラインの交流という、もどかしい期間が続いた。2023 年、ついにまたドイツに行けることとなった。

5 月、オンラインでの事前研修で、北海道グループの団員と顔を合わせた。オンラインでのプログラムは、コミュニケーションを取りづらく、みんな互いに探り探りの時間が続き、団員も私自身も少し不安が残る部分があった。しかし、北海道での事前研修では、全員が実際に顔を合わせることができ、少しずつ笑顔も見え、内心ほっとした。

7 月、いよいよ私たちは東京に集まった。「このどこかぎこちない雰囲気が出てくる頃にはどう変わっているかな」と撮った写真がとても懐かしい。ドイツに行く前にドイツ団と灼熱の東京を観光し、互いにこれからはじまる交流に対する期待を抱き、式典では 50 周年である記念すべき年に参加していることに少しの緊張感を感じた。東京で過ごした 3 日間でグループ内の距離も縮まり、いい雰囲気でいよいよドイツへ出発のときを迎えた。

通常 12 時間で到着するドイツへ 14 時間かけて第 1 便で到着した私たちは、眠い頭と浮腫む足、疲れた体ながらも、ドイツに来た高揚感で、BMW ミュージアムやオリンピックパークを満喫した。次の日には長旅の疲れが出たのか、体調不良のアクシデントもあったが、無事に全員で地方プログラムに出発することができ、一安心。

ミュンヘンから電車に乗り、ベルリンの担当者マリアが用意してくれた自己紹介カードを書いたりしながら 5 時間。ドイツの電

車は遅れるのが当たり前だというが順調にベルリン中央駅に到着し、一緒に活動するドイツの団員と緊張する間もなくの初対面となった。ベルリンでは、日本団員とドイツ団員を混ぜた部屋割りと同じ宿泊施設に宿泊した。一対一の部屋もあり、大丈夫だろうかと心配したが、私の心配をよそに、団員たちは徐々に距離を縮めていけたようだった。

ベルリンでのプログラムは、かの有名なベルリンの壁やホロコースト、オリンピックスタジアムなどの観光スポットへの訪問が多く、THE ドイツを満喫させてもらった。毎日 1 万歩以上歩き、これは痩せるのでは！？と思ったこともあったが、ドイツ料理やピザ、ある夕食は寿司など、たくさんのおいしい食事との出会いがすぐにその思いを打ち砕いた。

毎日、朝から晩まで時間を余すことなく、たくさんのプログラムを用意してもらい、最高に楽しい時間を過ごすことができた。ベルリンの仲間たちと別れ、いろんな意味でドキドキしながらたどり着いた次の街はポツダム。団員たちはホストファミリーと対面し、期待と不安が入り混じった面持ちでホームステイへ向かった。翌日、それぞれホストファミリーデーを楽しんだようで、この交流の醍醐味であるホームステイが 1 日でも経験できたことは本当によかった。担当者と話したが、日本もドイツも共働きの家庭が増えていることなどから、ホームステイの受け入れ家庭を探すことが難しく、交流の変革期を迎えているようにも思う。ポツダムでのプログラムは、スポーツのプログラムが多くあり、私たちの共通言語はスポーツであるというように、スポーツを通して交流を深めることができた。また、他の国のボランティアの 2 人がプログラムに参加してくれたり、シェアハウスにおじゃまして話を聞いたりなど、ヨーロッパの若者との交流もあり、高校卒業後にボランティア期間を設けるなど、日本の若者との文化や考え方の違いについて知ることができ、とても刺激となった。

地方プログラムを終え、フランクフルトでの 50 周年式典やきよならパーティーがあったという間に過ぎていった。全体評価会の発表では、「北海道グループは永久に不滅です！」4 人のそ

んな言葉を聞いて、このグループでドイツに來られてよかったと強く感じた。

最後に、この交流で出会った方々、関わっているすべての方々に感謝して、引率指導者記録とする。

【東北グループ】 佐野 直之

『さらなる飛躍へ』

二度目の参加となる日独同時交流、第46回に参加しその後3年間はオンラインが続き、4年ぶりのドイツ派遣が決まった時は喜びもありましたが、少し複雑な気持ちもありました。

今回は派遣経験者という事も踏まえて、良い点や改善点などをふまえて話していきたい。

今回の事前研修会はオンライン開催で始まった。事情はあるのかもしれないがオンラインならではの苦労があった。今回あった例としては引率指導者同士が話している間、団員はただ聞いているだけになっていた。対面であれば引率指導者、団員と分かれて時間を有効的に使えていたと思う。また、オンラインでは団員たちのモチベーションにも影響が出ていると感じた。

係別のミーティングにおいては何もないうまま事前研修が終了し、オンラインでミーティングを開いても不確定な情報しか団員にも伝えることが出来ず、話し合いからまとめるまでにかかなりの時間を要した。私としてもオンラインにおける進め方について考えていかなければならないと感じた。例えばブロックごとに集合して全体とはオンラインで継ぐなど今後のやり方の改善に期待したい。

今回は50周年式典のため出発前の日本滞在の時間が多かった。ハードスケジュールではあったが団員たち同士でグループを越えた交流ができたと思う。ドイツ派遣団との交流はもう少し時間があれば感じたがとても良かった。オンラインで交流が少ない分、日本の滞在時間を作るのは良いと感じるが、係別ミーティングをするには進め方も含めて今後考えていかないといけないと感じた。

今回東北グループの受入れ先はバイエルン州の北東に位置するカーム市(Cham)でした。受入れ担当のダッシュナー(Daschner)さんと通訳の美穂さんは、事前研修の前から連絡を下さず渡航への不安はありませんでした。

初めはミュンヘン市内やノイシュヴァンシュタイン城をビルギット家族と周りました。その後、カームに到着しホストファミリーの皆さんから歓迎を受けました。団員をはじめ私も緊張していたが、スポーツ交流を通して距離を縮めていくことができた。

地方プログラムではカーム地方の歴史や文化を体験できるプログラムとスポーツ交流が多く含まれていました。ディスカッションにおいてはドイツ側の年齢が低い事もあったが、ドイツと日本の考え方の違いを団員たちは感じていたのもとても良い経験ができたと感じています。また、チェコへの国境越えもありとても良い経験ができたと思います。

今回受入れ担当のダッシュナーさんは以前に本交流で日本に訪日しており、今回の受入れを楽しみにしていたと話してくれました。このような繋がりが本交流を継続させてくれていると感じました。

何ヶ月も前から私たちのために集まって、13日間もの地方プログラムを考えてくださり本当に感謝しかありません。

また今回のプログラム中は雨が多く20℃を下回る日がほとんどでした。しかし、プログラムの内容を臨機応変に変更して対応していただきました。そのおかげで、団員たちも体調を崩すことなく最後まで元気に過ごすことができました。本当に素晴らしいプログラムでした！

ただ、地方プログラム中に今回の交流では聞いている話と聞いてない話があったので、日本側 JSPO とドイツ側 dsj とのコミュニケーションをもう少し改善して頂けると助かります。

最後にドイツ側で温かく受け入れてくださったホストファミリーや関係者の方々に感謝いたします。また、第50回日独同時交流という節目のときに二度目のチャンスを頂いたことを所属団ならびに事務局の皆様にも感謝いたします。

ただ残念なのが、年々団員及び引率指導者の参加が少なくなっていると感じました。本交流がこれからも永続的に続くように私なりに今後もスポーツ少年団を通して協力していくつもりです。そのためにも団員のみんなが各地でリーダーとして活躍して、今後引率指導者として参加してくれることを期待しています！

この交流で出会えたみんなに別のかたちで再会できることを心より楽しみにしています！

【東北グループ】 中野 仁之

「交流が終わって、家へ帰って、やれやれこれで終わり、ではないんです。この平和のためにも、この交流のためにも、スポーツのためにも、あなたたちはこれから頑張るスタート点に立っているんです。今度はみんなの番です。頑張って！ チュース！」
帰国前日の8月12日フランクフルトレーマー市庁舎皇帝の間に、
“交流ばあちゃん”こと高橋範子さん(前 dsj 職員で日独同時交流の発起人の一人)の言葉である。日独交流の数々の思いがこみ上げると共に、私にも団員に対しても「帰国後に、あなたが伝えること、すべきこと…」の重要なミッションをいただいた気がしている。

この日独交流から得たかけがえのない経験は一言では語り尽くせないだろう。団員たちがドイツから帰国するときの“笑顔、ハグ、そして涙”、“フィーレンダンク！アウフヴィーダーゼン！”のお別れのシーンが、何よりもその素晴らしさを物語っている。その涙こそ、言葉や文化の違いを超えて、友情と絆が結ばれた証である。…さて、日独交流の感動の記録は団員たちの感想文に任せることにして、ここでは、次の日独交流がさらに素晴らしいものとして継続できるよう、帰国後の自分がすべきことを含め、引率指導者として考えたことをお伝えしたい。

当初私は、東海グループの指導者として参加する予定が、複数名の辞退者が出たことから、グループの解体、他グループへの合流を余儀なくされた。辞退は、学業や自らのスポーツ活動との兼ね合いであり、合流は、日独交流を円滑に運営するためには仕方がないことである。しかし、結果的に参加者が定員の77人に対して59人、東海・近畿グループの不成立は、せっかくの貴重な機会であるのに対し、残念である。私の住む津市でも、シニアリーダー登録は1単位団、4人だけである。JJSA が持っているこの育成システムを、青少年スポーツに係わるすべての人に周知したい。さらに、日本のスポーツ界にとって JJSA の理念・仕組み・活動を広げることは、真の意味の“スポーツを通しての青少年の健全育成”に通じると確信している。また、団員の話から、日独交流への参加を応援してくれる学校と、“試験等が優先”と認めない学校(単位を与えてもいいほどの活動と思うのだが…)があると聞いた。団員の所属校(文科省や教育委

員会も含めて)に、この活動の意義と価値の理解をさらに得る必要があるであろう。

この交流は「団員が主役」であり、今後のスポーツ少年団を支える人材の育成を目指したものである。前回第46回の日本団総務の杉山先生から「引率指導者の立ち位置を確認する必要がある」と報告書で申し送りされている。私は今回、前述の理由から、東海(団員は関東Ⅱに合流)→四国→東北と渡り歩き、多くの引率指導者と団員を見られる立場(第三者的だが…)にすることができた。そこで振り返ることは、「団員たちをもっと主体的にさせることができなかったか」ということである。例えば、その日の行動を団員に考えさせる、皆の前で挨拶・お礼をさせる、座席は固まらせない、あるグループのように「お客さんになってはいけない。家事の手伝いくらいはしなさい」とアドバイスする…。ディスカッション等では豊かな発想を示し、力のある団員たちである。引率指導者の役割は「場を与え、見守ること」であり、自分の生徒やサークルのように「囲い込む」ことではない、のであろう。

「主役である団員」にもあえて注文を付けたい。小学校2年生の国語教科書に「スイミー」という教材が載っているが、異国の地で、みなさんはスイミーのように群れをつくって安心してはいけぬ。みなさんは小魚ではなく、一匹の堂々たるクジラのごとくふるまってほしい。隙間時間に、スマホでゲームやコミック？式典で居眠り？交流の食事会で、団員だけで固まらなくても…。交流中に団員だけの記念写真はいらないだろう。「上げ膳据え膳」ではいけない。あくまでも、交流であって接待ではないのである。…確固たる主体的な国際人を目指す人たちのみだから。

この日独交流は、私にとってもかけがえのない喜びとたくさんの学びがあった。最後に、この素晴らしい機会を頂いた、日本・三重県・津市スポーツ少年団のみなさま、コーディネートをいただいたdsjのみなさま、地方プログラム責任者のビルギッツ・ダッシュナー様、家族のように接してくれたホストファミリーのみなさま、ずっと同行いただいた通訳の中澤ムラス美穂様に、心から感謝を申し上げたい。Vielen Dank！ありがとうございました！

【関東Ⅰ・近畿グループ】 佐倉 和明

『第50回日独同時交流に参加して』

2019年第46回を最後に対面での交流会は中止、WEB開催を経て今年度第50回日独同時交流が開催され、幸運にも参加できたことはありがたいことでした。

振り返れば、最初に参加したのは奇しくも第25回の記念交流でした。その時も記念行事が開催されて、当時まだボンにあった首相官邸を訪問しました。東西ドイツ統一後ベルリンに首都を移すことは決定していてもその準備期間中でまだ西ドイツの首都であったボンが首都でありました。川沿いにある綺麗な官邸の25周年記念式典では我々日本団よりもドイツの受け入れ先の参加者が興奮していたのを思い出します。それから25年を両国の関係者で繋ぎ、第50回記念式典が日本で開催されそれにも参加することが出来ました。この偶然は自分史の中の特記事項にしたいと思います。50回、スポーツは世界を繋ぐを合言葉にスポーツ少年団の日独同時交流にご尽力いただいた多数の方々に唯々頭の下がる思いです。

私はその回以外にも、第40回、第46回に参加させていただき、都合4回目の参加となります。コロナ禍による最後の開催、コロナ禍明けの最初の開催、その両方に参加できたのもまた奇遇と言わざるをえません。自身3回目までの参加の両国・世界の技術革新の変化、特に通信技術についてはその感想を前回述べてさせていただきました。電話、テレフォンカード、携帯電話、スマホ、翻訳アプリ等の変化はスピードが上がることはあっても止まること無いように思います。それは言い換えれば、両国、ひいては世界的に文化の違いがなくなるということを示しています。世界共通のハード、ソフト(最近はアプリというらしい)を使用してゆく中ではその国の言語や文化が多少の違いを残しながら世界的に共通化してゆくことにほかなりません。スピードアップする変化に対応することは同一性を進め、その国独自の文化を失わせてゆくのかもかもしれません。それを肯定的にとらえて、対応しなければ一般的な社会生活も送れなくなってきました。いわゆる、スマホ難民的な流れが生じるのは個人的には好ましくないと感じています。なんでもスマホで情報を提供します、スマホで手続きをくだささいは情報化社会、SDGsの究極の目的であるスマートソサエティーに移行する中では致し方

のないことではあることを理解する反面、情報弱者を生み出しているようにも思えます。

そのような、情報化社会の進展の中でこの日独同時交流会は全くアナログ的に対面で、ホームステイをして、まず相手の文化が自分たちの文化と違う、違う文化が世界にはいくつもあり共存しているのだということを、本当に肌で感じることを目的として実施されています。ホームステイで異文化の人達と直に交渉し、異なる国の歴史に触れ、今起きていることを感じるという生活は大事だと思います。海外旅行等で異文化に触れたときに二つの反応を示します、極言すれば一つは拒絶する(内にこもる)、完全に取り入れる(無批判に)の反応を生じさせます。いずれの反応もお互いを否定することはできません。それは異文化に触れることで生じるある種の熱量の結果であると思いやむを得ない事であると思っています。

同時交流に参加する子供たちは我々の時代とは異なり早くに異文化に触れることで極端化した反応ではなく、柔軟に異文化を受け入れ、自身で消化して異文化との対応をしっかりと見極めて進めてゆくことができる判断力を得られる良い機会だと思います。そのような感覚を持った子供たちがこの同時交流から育つことを強く希望するところです。

今回、我々関東Ⅰ・近畿はハンブルグ・ETVの柔道部会の受け入れによって、ドイツの文化特にドイツの普通の生活を多く体験することができたと思います。おそらく、ドイツの子供たちが少年少女期に経験するであろう生活を体験させていただいたと思います。観光旅行では(計画された日程ではありますが)絶対に味わえないいくつかの貴重な経験を楽しめたことは本当に一面ではあるとは思いますが、ドイツの文化(社会)を体験でき、その経験がこの先彼らの異文化との対応についての貴重な経験を得たと思います。ETV柔道部会に感謝です。

今回参加の団員が次は指導者としてこの同時交流に参加して次代の子供たちに貴重な経験を繋いでいってくれればと密かに祈っています。

【関東Ⅱ・東海グループ】 中野 孝行

『特別な同時交流』

今回の日独スポーツ少年団同時交流は、私にとっていろいろ

な意味で特別なものでありました。それは、私が生まれた1974年にこの同時交流がスタートし、今回 50 回という節目のタイミングで参加することができたからです。私は、これまでに、第19回に団員で、第 43 回に引率指導者として同時交流に参加させていただきました。すでに 2 回参加させていただいておりますので3回はないだろうと思っていましたし、多くの指導者の方々にこの体験をしていただきたいと思っていたところではありますが、3回目の同時交流参加が急遽決まりました。関東Ⅱグループは、埼玉県と茨城県で構成され、引率指導者もお互いの県から交互に出していました。今回は、茨城県の番でしたが、引率指導者がみつからないということで埼玉県に話が回ってきました。自分が生まれた年に始まり、コロナが落ち着きをみせ、リアルな派遣が再開された記念すべきタイミングで参加できることは私にとって特別なものとなりました。

5 月の事前研修はオンラインで行われましたが、関東Ⅱグループは、団員 3 名という少人数でした。しかも、その内 1 名が都合により遅れて参加という不安な状態からのスタートとなりました。グループ内の役割分担やテーマ決めなど話し合いは順調にすすみました。しかし、オンラインということでお互いの仕草や細かい表情などの把握が難しかったです。改めて対面で実施することが重要であると感じました。そのため、グループ別事前研修を対面で実施すべく準備を進めていく中、東海グループが団員の辞退により 2 名となってしまう、グループ編成を再検討する必要が出てきました。再検討の結果、関東Ⅱと東海の合併が決まり、関東Ⅱ・東海グループとして再スタートを切ることとなりました。この時、出発の 1 か月前である。新たにグループ別事前研修をオンラインで実施することになってしまいました。また、ドイツ側の受入れ態勢も変更になることが伝えられ、受入れ団体、受入れ地、通訳等が決まらず、渡航準備に支障が生じるとともに、本当に参加できるのか団員を含め不安な日々を送ることとなりました。出発1週間前になり受入れ準備が整い、我々のグループは何とかドイツに行けることとなりました。

7 月 25 日、日本団集合の日、はじめてグループメンバーが顔を合わせることができました。グループの団員は、これまで画面越しに数時間会話をしただけなので不安でいっぱい表情でした。今回は、50 周年記念式典をドイツ派遣団と共に執り行

うため、出発までの 3 日間をオリンピックセンターで一緒に過ごすことができるのが救いでありました。私はグループの結束力を高めることに注力し、無事に日本を飛び立つことができました。

地方プログラム前半は、モータースポーツユージェントの下、ザールラント州にあるザールブリュッケンにて受入れをしていただきました。ここはフランスとの国境に近く、かつてはフランス領でもあった所です。そのため今でもドイツとフランスの文化が入り混じった面白い場所でした。私は、ホストファミリーと電動自転車に乗ってフランスまで行くという貴重な体験ができました。また、ルクセンブルクにも近く、グループ全員で3国国境まで連れて行ってもらいました。そこには国境を示す木が植えてあるのですが、木の周りを 1 周すれば一瞬で3国を旅行できる場所でした。ある日には、ホームステイ期間中に誕生日を迎える団員の誕生日パーティーを内緒で準備し、盛大にお祝いをしてくれました。素敵なプログラムをたくさん用意してくれたイーリスに感謝します。地方プログラム後半では、パーデン＝ヴュルテンベルク州にあるハイデルベルクのユースホステルにて1週間を過ごしました。重量挙げユージェントの団員と同じ部屋に泊まりながら、重量挙げの体験やオリンピアとの対談、お互いの国の料理を作って食事会など様々なプログラムを体験しました。貴重な体験を準備してくれたリリーに感謝します。

最後になりますが、「スポーツは私たちを結ぶ」をスローガンに、今回 50 回を迎えたこの交流は、両国にとって特別な意味を持つものです。これは、参加した者にしか分からないものだと思いますので、ひとりでも多くの団員、引率指導者に参加していただきたいと思うと同時に、この先も永くこの交流が続くことを心から願っています。dsj、JJSA 関係者をはじめ、交流に携わった全ての方に感謝申し上げます。

【北信越グループ】 浅野 亜紀子

『第 50 回日独スポーツ少年団同時交流を終えて』

私は団員・リーダー・指導者と継続して活動をしてきました。高校生の頃には、この日独同時交流にも参加しました。その時の経験から一人でも多くの団員達にこの交流の意義を経験して理解して欲しい、そのサポートができればと思い参加しました。また、引率指導者として参加することで私自身の今後の活動に

において生涯スポーツの認識、普及・促進に繋がたいと考えて希望しました。

新型コロナウイルスによるパンデミックにより今回の第 50 回は 4 年ぶりの対面開催となりましたが、全体事前研修はオンライン形式で行われました。コロナ禍ではスポーツ少年団活動も制限されていたのでグループ内で顔見知りの団員同士も少なく、画面上の限られた時間でどのようにコミュニケーションを図るかが課題だと思いました。そこで、初めてのグループ顔合わせで参加する上で大切となるのは人任せにはせず、自分の考え・想像力・積極性を持つことではないかと伝え全体事前研修に取り組みました。全体事前研修やその後のグループ別事前研修を通して、みんなで相談するうちに一人ひとり、考えも積極性も違う中でお互いを受入れて尊重し、協力することを実践し、グループ別事前研修に当日参加できなかった団員への連絡連携もスムーズに行うことができ嬉しく思いました。

いよいよ出発を控えて東京へ集合。直前レクチャーや結団式を終え、来日したドイツ団との交流会・自由研修を過ごして実際の交流イメージも深まり、高まる期待と共にドイツへと出発しました。

全体前半プログラムでは到着翌日にミュンヘン市庁舎での表敬訪問と市内散策を行い、長時間のフライトや時差に慣れていない為、団員達には疲れも見えましたが日本とは違った街並みや食事にドイツに着たことを実感してワクワクしていることが感じとれました。日本団を複数に分けて行ったディスカッションもグループで準備していた項目とは違う内容をグループの違う団員と話し合うことでより理解が深まったように思いました。

そして地方担当者と対面し、地方プログラムへ出発。今回、北信越グループは地方プログラムの全期間をケンプテンで一家庭一人でステイさせていただいたことはドイツと日本の違いを知る上で非常に良い経験でした。日々、日常生活や様々なプログラムをパートナー達と過ごし日程が進むごとに深く打ち解けて毎朝、集合場所に笑顔で現れるみんなを頼もしく思いました。

双方の資料を渡独前に交換して迎えたテーマディスカッションでは予想を超えるハードなハイキング(登山)で疲れのでも中、予定時間を越えて活発な議論が行われ、両国の状況や取り組

みを理解し、自分達にはこれから何ができるかと当事者意識を持って話し合うことができました。

プログラムではバスケ、美しい風景を見ながらの数々の場所でのハイキング、ミニゴルフ、クライミング、水上スキー、ビーチバレーボールとたくさんのスポーツ活動があり、言葉の壁にぶつかりながらも応援したり励まし合ったり、挑戦する団員達の笑顔にスポーツの持つ力・素晴らしさを改めて感じました。

ドイツで古い歴史を持つケンプテンの市街地を説明を伺いながらの散策やノイシュバンシュタイン城の見学、地域のチーズ工場見学やチーズシュベッツ作りなどの文化活動も訪れている地域の特徴を知ることで異文化理解が深まったと思います。

別れの涙を堪えた地方プログラムのさよならパーティでしたが、全体後半プログラムでのさよならパーティにもパートナー達が参加してくれて最後の夜を過ごすことができました。「また来年、日本で！」の約束をしながらも団員達の溢れる涙に濃密で忘れられない経験ができたのだと感じました。

プログラム中、体調を崩す団員が出た時やドイツ鉄道のトラブルの際も団員同士で協力しあい引率である私を助けてくれました。ありがとう。異文化を知り、改めて日本を知り、自分自身を見つめ、苦手な事や初めての事にも挑戦し、自分達で設定したグループ目標を達成できたのではないのでしょうか。個人各々としても、自分の目標に対する気づきに触れることができた時、日々成長を感じさせてくれました。引率指導者としては、一緒に過ごした日々がその一助となっていたら嬉しいです。

団員達には今回の同時交流での全国各地のリーダー同士の交流や国際交流で得た有形無形の経験が今後のそれぞれの人生で貴重な体験として発揮され、また経験した世界的視野を身に着けて今後のリーダー活動・将来の引率指導者としての活躍心から願ってやみません。私自身も今後のスポーツ少年団活動に寄与できるよう努力してまいります。

最後に様々なプログラム準備に奔走し、常に活動を共に過ごしてくれた地方プログラム責任者のリヒャードさん、ドイツで出会った皆様との意思疎通を円滑にするため細部まで心配りをしてくださった通訳の佑香さん、温かく受入れてくださったホストファミリーの皆様。JJSA、dsj の皆様。団員達の参加を理解しサポートいただいたご家族、所属県の皆様。本事業開催に携わ

ってくださった全ての関係者の皆様に深く感謝いたします。私たちの交流が次の50年に続きますように。

【中国グループ】 福田 悟

『記念すべき50周年交流に参加して』

第50回日独スポーツ少年団同時交流(派遣)に参加させていただき大変光栄に思いました。

私は第25回(シュパイヤー)・第32回(チューリーゲン・ザクセン)・43回(ザクセン、ザクセン＝アンハルト)の交流に参加させていただきましたが、私の交流テーマは一貫して「学校部活の地域(クラブ)移行への推移の考察」でした。フランクフルトでの「記念式典」では訪問の都度訪れた「レーマー市庁舎」の席に座り、中国ブロック団員による「少林寺拳法」の演舞に胸を熱くしながら過去の交流の感慨にふけていました。こうしてレポートを書いている間も「中国ブロック団員」の「ライン」では、ホットな交流が続き、また、私もドイツで親交を深めた仲間とのメールでの意見交換を続けています。

今回の交流について印象的だったことを下記にまとめたいと思います。

①テーマについてのディスカッション

これは、交流の重要なプログラムであると認識し、グループ事前研修会から準備を開始し、その後も団員らのオンラインで内容を深めて準備万端で臨んだ。過去の交流から見ても満足の出来るものと思っていた。一方、ドイツ側からは、両州交流担当者による「SDGs」への具体的な取り組みの実践紹介があり、日本でも即実践してみたいと思われるワークショップであり、ディスカッションの時間が不足だと思われる杞憂を補うのに十分なものであった。

②コミュニケーションスキルとツール

今回ほどコミュニケーションの手段としての「ライン」と「音声入力翻訳アプリ」の威力を感じたことはなかった。「ライン」は「グループ事前研修会」時から、交流を終えた国内でもホットな交流が続いている。また「翻訳アプリ」は、日独両国団員、関係者も一同に利用し、コミュニケーションスキルに大きな力を発揮した。以前のように辞書を引きカタコトのドイツ語で礼状やクリスマスカードを書いたことや、1日の活動を終えて団員達が異国

の夕焼け空を眺めながら「ビス、モーゲン、チュース」と声がけした時代はもう終わったのかなと思った。しかし、団員が、感想文に「スマホ」ばかり見ていて相手の表情が見えなかったので、今回はドイツ語を勉強したいという反省の言葉に「やっぱり」と安堵の胸をなでおろすと同時にカタコトのコミュニケーションスキルにも胸を張った。

③「武術の振興」

私は「剣道のスポーツ少年団」に所属し、自分自身は「柔道」を趣味として高校・大学にも外部指導者として出向いている。また、今回はグループに「少林寺拳法」、「空手」、「柔道」、「合気道」の団員がいたことから私は彼らとともに、この「武術」の「地方プログラム」での交流活動や「フランクフルト」での「さよならパーティ」での「演舞」に大変興味をもった。

「武術」は日本でも伝統を守っている流派もあるが、ほとんどが明治時代以降に「柔術⇒柔道」、「剣術⇒剣道」に分かれて独自に発展してきており、今回、ドイツで交流活動、演武披露された「武術」のルーツは何処にあるのか？また、ドイツでオリジナルな発展を遂げたものであるのか？今後、ドイツの仲間との交流を通して明らかにしていきたい。

そんな中でも「左座右起」による「正座」、号令「礼！」は日本のそれと共通していたが、日本の多くの道場で号令として掛けられる「黙想」は「座禅」という号令であったし、また、柔道の創始者である「嘉納治五郎」先生の写真額(畳半畳の大きさ)がドイツの「武術」の道場に大きく掲示してあったのもとても印象深かった。

④「自然体験活動」

ドイツでの自然体験活動はとても興味深いものであった。「川(エルベ・ハーフェル運河)」「山(カリマンジャロ・エルベ砂岩渓谷)」などはとても感動的な体験であった。また、「エルバウエンパーク(ハイロープ)」や「モーリッツブルグ(シンデレラ)」も団員には好印象に残る体験だったようだ。また連日のように10km以上を歩く自然の中での散策はドイツの自然に触れる絶好の機会となった。

⑤今も続く「SDGs」議論

「さよならパーティ」でホストファミリーが「家庭でのSDGs実践」について情報提供をしてくれたことは、今回の交流テーマに

ついて今後の議論を深めるための大きな財産となった。国内外の友人にもシェアして、今後なおいっそう議論を深めていきたい。

～おわりに～

この交流にあたってプログラム担当者の方々と始め、団員の所属団、各県・市町スポ少本部のご支援に対して厚くお礼を申し上げます。最後に中国 G の団員は、本当に素晴らしい仲間であったことが最高の喜びであり、彼らにも感謝してペンを置きたいと思います。

【四国グループ】山神 眞一

『第 50 回日独スポーツ少年団同時交流の引率者として』

この度、第 50 回の節目となる日独スポーツ少年団同時交流の四国グループの引率者として、7 月 24 日(月)から 8 月 14 日(月)まで帯同する役目をさせていただきました。四国グループの団員は、高校生 3 名と大学生 4 名の 7 名でした。

7 月 27 日(木)羽田を経ち、28 日(金)ミュンヘン空港に到着後、スポーツシュレに移動し、オリエンテーション、指導者ミーティングを行いました。翌 29 日(土)は、ミュンヘン市庁舎訪問から始まり、市内オリエンタリングをして、夜には、地方プログラム企画担当者と面談し、確認打ち合わせをしました。四国グループは、ラインラント・プファルツ州のオッターバッハ市を中心に地方プログラムを実施しましたが、この地方は、ドイツの南西部に位置して、フランスやルクセンブルクに近い地方都市です。30 日(日)、いよいよ地方プログラムのスタートです。オッターバッハ市に到着すると歓迎パーティーが開かれ、それぞれのホストファミリーとの対面もあり、この日から約 2 週間ホストファミリーとの生活が始まりました。31 日(月)は、マインツ市内観光と州議会の見学をしました。8 月 1 日(火)の午前中は、グラン川でのカヌーツアーでしたが、団員は、満足気でした。午後は、バーフス・プファドという自然公園での裸足散策をしました。2 日(水)は、ハイデルベルグ城を見学しましたが、ハイデルベルク城は、ドイツ南西部の都市、ハイデルベルクにある古城であり、ドイツ最古の大学として知られているハイデルベルク大学とともに、世界各地から訪れる人気のスポットです。城の内部は、廃

墟の美とも言えるもので、歴史の重さを感じました。3 日(木)は、交流テーマである「スポーツ×SDGs」のディスカッションがメインの日でした。日本の団員は、日本の伝統文化である相撲とドイツで人気のあるサッカーを題材にジェンダー平等について、ドイツ側は、エネルギー問題を挙げて、省エネやエネルギーの利活用について説明し、ディスカッションを深めました。4 日(金)は、古代ローマ人達がアルプス以北へ進出してくる以前からヨーロッパに住んでいたとされるケルト人集落のレプリカを訪問しました。5 日(土)は、自然保護区のプファルツの森にハイキングしました。赤い砂岩の連なる芸術とも言える岩層の印象は、衝撃でした。6 日(日)は、それぞれのホームステイ先で休日を楽しみました。7 日(月)は、広い森林の中にある「ジップライン」を体験するプログラムでした。大きな木と木の間を繋いだロープを転々と渡っていく爽快なアクティビティでした。8 日(火)は、オッターバックという街で馬車に乗って VR 体験し、現在と過去の風景の違いから歴史を堪能しました。9 日(水)は、ライン川をクルーズ船に乗り、ローレライを観光しました。川の両岸に見える景色は、城の歴史と文化を感じさせるものでした。10 日(木)は、カイザープファルツ市庁舎を訪問し、博物館と日本庭園を見学しました。この日が地方プログラム最後の日であり、さよならパーティーが開かれ、日本の団員は、空手と阿波踊りを披露し、讃岐うどんをふるまいました。ドイツの団員は、柔術の演武を見せてくれました。翌日、お別れする最後の場面では、日独の団員ともに涙涙でした。それだけ想い出深い交流だったと思いました。

11 日(金)からフランクフルトに入り、翌日 50 周年記念式典、全体のさよならパーティーを行って両国の団員、スタッフで楽しむとともに別れを惜しむひとときとなりました。そして、13 日(日)ドイツを後にしました。

全体の感想として、言葉の壁を越えた日独の交流を通して「スポーツは、人を繋ぐということ」と「広い視野・深い洞察・高い理想」というグローバルな視座を体験できたと思います。参加した日本の団員の今後の成長が楽しみです。

最後に日独の同時交流の企画・準備・運営をしていただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

【九州グループ】 政岡 浩

『ドイツでの「大河の一滴」は大きな流れに』

7月27日ANA217便、「ドイツの若者との交流活動が、深い学びと、新たな友情を築くこと」を願って、期待・不安・希望の入り混ざった気持ちを抱き、日本から飛び立った。九州グループの団員5名と引率指導者、通訳の計7名。感動と共に過ごした日独交流の姿を、(1)プログラムの概要 (2)地方プログラムの成功 (3)終わりに、の項目に沿って記したい。

(1)プログラムの概要

①全体プログラム(ミュンヘン) ②地方プログラム前半(バイエルン・スポーツユーгент)空手道での交流、史跡学習など ③地方プログラム後半(ヴュルテンベルク・スポーツユーгент)スポーツテスト、クライミングなど ④全体プログラム(フランクフルト)

(2)地方プログラムの成功

【前半】リチャード氏の空手道場が地下1階にあり、隣接するホールで、トラウンロイトのホストファミリーとの出会いがあった。『ホームステイで過ごすとき通訳がいない。うまくやっていけるかなあ。心配や……。』という団員の心をおおっていた暗い霧のような不安は、ホストファミリーの方々の「ようこそ、よく来てくださいました。つかれたでしょう」という気持ちが伝わる柔和な笑顔で、一瞬のうちに吹き飛んだ様であった。心と心は、言葉の壁を超えて伝わることを改めて感じた。

5日目に、「空手道」の交流を行なった。リチャード氏の門下生である幼児から小中学生ぐらいの生徒、成人の男女の約15名と団員で、組手や形の練習に汗を流した。小職が基本と形の指導をしたが、楽しい雰囲気の中で交流を深めることができた。その後は、リチャード氏が焼いたバーベキューの肉、ソーセージが大きなパレットに盛られて運ばれてきた。団員とホストファミリーで、おいしく嬉しいバーベキューパーティーの一時を過ごした。ヨーロッパ最長のブルクハウゼン城の見学、キーム湖の遊覧などの活動を終え、さよならパーティーの夜を迎えた。翌朝は涙の別れ。トラウンロイトの人々の親しみやすく、温かく、優しい心に、感謝の気持ちを抱きながら……。

【後半】ドイツ 9日目、九州グループ一行のワゴン車は、ホームステイ後半の地、ヴュルテンベルク・スポーツユーгентへと

向かった。中世を彷彿させるロマンチック街道の風景を車窓から愉しみながら……。団員、通訳、引率指導者はすっかり打ちとけ、入国時当初にはなかった、連帯感と心地よい絆が芽生えていた。緑の木々が生い茂るニーダーシュテッテンで歓迎のバーベキューパーティーが催された。翌日からは、クオリティーの高いプログラムが準備されていた。その中でも、ドイツのスポーツ精神にふれた活動が、スポーツテストであった。年齢の段階ごとに、スポーツ種目の基準が細かく設定されており、クリアすることが求められる。「100m走(50m)」「3km走(800m)」「水泳25m」「投てき(ハンマー投げに似た種目)」などに7名全員チャレンジした。『ドイツでは、幼い頃から、様々な運動能力の視点で、スポーツにふれさせているんだなあ。』と痛感した。プログラム責任者のラインホルド氏は日独交流に長年関わっておられ、周到な計画、スムーズな活動には、心底から素晴らしいさを感じた。最終日夜のさよならパーティーも、趣向を凝らしたプログラムで、心温まる思い出に残るものとなった。

(3)終わりに

九州グループ、わずか団員5名と引率指導者1名のために、陰で表で、どれだけの人々が関わり、どれだけの準備が成されたのか、想像するだけで、胸が熱くなる。温かい心遣いに感激・感謝の連続であった。「ありがとう」を幾度言っても、その寛大な情けには引き合わない。ドイツの自然・空気・人々のやさしさ・慈しみ……すべてからこみあげてきた団員一人ひとりの熱い涙の滴は、大河の一滴となり、やがて絆の広がりという、大きな流れとなることだろう。

団員感想文

『スポーツのあり方』

北海道 熊坂 佑奈

今回のドイツでの交流を通して学んだことがたくさんあります。その中でも私が特に日本に帰って考えたいと思ったことは、スポーツのあり方です。ドイツで過ごす中、日本のスポーツはもっと誰でも身近に気軽に行えるようにすることで、たくさんの人が集まり、よりスポーツ活動を発展させることができるのではないかと考えました。ベルリンで SDGs についてのディスカッションを行った際に、ドイツではたくさんの人がスポーツクラブに所属しているという話を伺いました。また、ドイツのスポーツを行っている子達と話す中で、色んなスポーツを体験してきた人や、いま複数のスポーツを掛け持ちしている人、日本ではスポーツとして馴染みのないチェスをやっている人がいることを知り、みんな1つのスポーツにこだわらず、多様に気軽を楽しんでいるように感じられました。日本では少年団に所属している人も年々減っており、クラブや少年団は大会などで勝ちを目指す、というような団やクラブも多いと思います。それはそれで一つのスポーツのあり方だとは思いますが、誰でも楽しめるような勝ち負けに拘らないスポーツ活動を行える場を増やしていくと、よりスポーツの世界を発展させることができるのではないかと思います。

『交流会を終えて』

北海道 山田 柚璃

生まれて初めての海外に加え、一緒に行動する人たちは初対面で不安と緊張と少しの高揚感でいっぱいだった 7 月 25 日。ホームステイは経験できなかったが、同じ部屋に宿泊したり、1 日と一緒に過ごしたりと日独交流ならではの活動はできたと思う。また、言葉の重要性を実感するものとなった。現在はスマートフォンがあれば、すぐに翻訳し、違う言語の話者とも簡単に意思疎通を図れる。実際にスマートフォンに助けられた場面がいくつもあった。しかし、機械を介すよりも自分の言葉で拙いながらも伝えようとするのが仲を深めるきっかけになったと思う。「これはなんていうの?」と交互に聞きあったり、ドイツ人が日本語を頑張って話してくれたり、逆に教わったりと楽しい時間を

を過ごせた。このことから、相手の言葉・文化・考えを知ろうとする姿勢がよい雰囲気づくりに繋がり、少年団活動にも活かせると感じた。約 3 週間の交流は、新たな発見と学び、そして思い出となって私の心に残った。

『第 50 回日独同時交流、ドイツ訪問を振り返って』

北海道 池田 景松

第 50 回日独同時交流に参加させて頂き、初めて知ることができたことが数多くありました。

まず 1 つ目は、ドイツはスポーツ先進国の中でも突出して発展しているということです。ブランデンブルクへ訪れた際に、新しくできたスポーツ施設を見せて頂きました。そこでは陸上の屋内トラックや、ボブスレーの練習施設などがあり、更に選手の寮や食堂などが敷地内に併設されていました。選手を第一に考えられた施設が数多く設立されており、快適にスポーツが行えて、尚且つ食住環境も整備されていることには大変驚きました。

2 つ目は日本ではとても人気のあるスポーツである野球があまり通じなかったことです。野球をやっている方が非常に少なく、認知度もあまりなかったことです。それに比べ、サッカーの認知度は凄まじく、ベルリンでは白熱した試合観戦が行われていました。2 部リーグの試合でも、とても気合の入った応援がされていて、スポーツ文化の違いに驚きました。

ベルリン、ポツダム、フランクフルトの比較的都市部の訪問では最新の施設を見学し、アクティビティを体験、ドイツの団員と積極的に交流することもでき、カラオケでの盛り上がりの凄さも一緒に楽しむことが出来ました。

酷暑の日本とはかけ離れた涼しいドイツでの様々な体験が出来た日独同時交流はとても有意義なものとなり、良い体験、良い思い出となりました。この経験を自チームの団員、札幌や北海道の団員にも話し、次に参加する団員にバトンを渡したいと思います。

『日独スポーツ同時交流を終えて』

北海道 中野 澄加

今回の日独スポーツ同時交流の交流テーマ「スポーツ×SDGs」ではスポーツという共通なものを利用して私たち自身
がこれからどうしていくべきなのかについて話し合うことができました。一番印象的だったのはポツダムでのSDGsについてのクイズです。クイズの答えの選択肢をそれぞれ1つのエクササイズを決めて行いました。体を動かしながらクイズをすることでより楽しく学ぶことができました。また、サッカーした時に言葉がお互いわからなくても通じ合えるように感じました。チームの中でどうやってボールを繋ぐか考えながらできたと思います。そして、自分たちの住む地域で行なっていることや解決しなければならないことについて英語で話し合いました。言語が違うために理解することが難しかった部分もありましたが、ドイツと日本で似ている部分や違う部分について話し合うことができとても良い経験になりました。

『繋がり』

東北 中館 結衣

私はこの日独スポーツ少年団同時交流において、新しい出会い、経験、発見をした。そして、確信したことがある。それは、笑顔とスポーツは世界共通であるということだ。そんなことは当たり前だと思う者もいるだろう。だが、私はこのことに対して少しも当たり前だと思うことはなかった。それどころか非常に感動した。言語や文化、何もかもが大きく異なった場所で、それぞれのとき、それぞれの場所に共通の笑顔があるという事実が私は嬉しくて仕方なかったのだ。

年齢や性別、障がいの有無、そして言葉の有無。これらはスポーツにおいても「壁」として扱われることが多い。だが、私はスポーツで乗り越えられる「違い」だと考えている。スポーツを通して生まれるチームワークのような人と人との心の繋がりや絆が、言葉のない状態でも生まれるその瞬間を、私は現地で体験した。スポーツには人と人をつなぐ力、世界をつなぐ力が存在しているということを自身で感じる事ができた。

私は、現地に行くことで得られたこれらの事実から今後の活動では楽しみ楽しませるスポーツを、リーダーとしても一人の人としてももっと多くの人に伝えていきたいと思った。私の人生に

おいてこの日独同時交流は、発見で溢れたかけがえのない成長の場となった。

『日独同時交流を終えて』

東北 佐々木 胡桃

私たち東北グループは、バイエルン州のChamという街を中心に、地域の子どもたちやチェコの子どもたちと、様々なスポーツを通して交流を深めました。また、サッカーチーム“バイエルン・ミュンヘン”のホームであるアリアンツアレーナを見学したり、ノイシュバンシュタイン城やレーゲンスブルクをはじめとする観光名所や歴史ある街を訪れたり、ドイツとチェコの国境でチューチュートレインをしたり、他にもいろいろな場所を訪れ、書ききれないほどの貴重な体験をしてきました。

1日1日がとても濃く、約2週間の滞在は本当にあっという間でした。それは、単に訪れた場所が楽しかっただけではなく、受け入れ先で出会ったたくさんの方々が、私たちのためにいろいろな準備をし、歓迎してくれたのおかげだと思います。

今回の交流に携わり、より良い交流になるよう尽力してくれた全ての人に感謝しています。最高の夏になりました！ありがとうございました！Vielen Dank！

『日独同時交流に参加して』

東北 横井 心

今回は、50周年記念ということで東京から始まった日独同時交流。ドイツだけではなく、東京でも多くのことを学ぶことができました。日本に来たドイツ団のみんなと交流し、簡単なドイツ語を学んだり、ドイツ人の雰囲気を知ることができ、出国前に日本で交流できたことでよりドイツへ行くのが楽しみになりました。

ドイツでは、毎日がとても楽しい2週間でした。楽しいことだけでなく大変なことも多くありましたが、充実した日々を過ごすことができました。一番大変に感じたことはやはり言語です。私のホームステイ先の子は、10歳だったため英語が話せず翻訳機頼りになってしまいました。しかし、なるべく自分の言葉で伝えられるよう、覚えてたドイツ語を少し話したり、ジェスチャーを使い頑張りました。グループ活動では、スポーツ活動やダンスなどでドイツのスポ少の子たちと交流しました。言葉が伝わらなくてもお互いにスポーツのコツやダンスを教え合いなが

ら活動することで、より絆が深まりました。

今回の交流で私は、最高の仲間と最高の家族に出会えました。一生忘れない夏の大切な思い出になったと思います。ドイツで学んだことをこれからのスポ少活動や日々の生活に生かしていきたいです。

『捉え方の違い』

東北 池田 直

この交流はSDGsの意識が日本より高いドイツの意見を聞き入れる良い機会だった。話し合いで感じたことは、日本側は現実志向であるのに対し、ドイツ側は理想的思考であったことだ。私たちは、目の前のことから解決していくという考えのもと意見を上げたが、一方のドイツ側は根本に理想としているものがあるため、それを先に解決することが重要であるという考えだった。私たちよりも年齢が一回り二回り低かった子供たちとの話し合いで濃い話し合いは行えなかったと感じた。しかし、SDGsの意識が日本よりも強いドイツと意見を交わすことができていくことに意味があり、それらを行えたというのは良い点と言えると思う。この交流は話し合いがすべての目的ではなく、仲が深まることでできる話し合いだ。そのため、二週間という長いようで短い時間に多くを経験し、仲を深められたことがよかったと感じた。

『日独同時交流の感想』

東北 五十島 暖人

私は、この日独同時交流を通して、たくさんのことを経験することができました。そのなかでも、特に良い経験だった二つを紹介したいと思います。

まず一つ目は、初めて海外に行くことができたということです。はじめは言語が違う人たちとコミュニケーションができるか不安でした。しかし、ドイツの人たちは英語や翻訳機を使いなんとか伝えようとしてくれて、会話がとても弾みました。そのため、言語の違いに心配する必要がないことがわかりました。

そして二つ目は、ノイシュバンシュタイン城に訪れることができたということです。この日独同時交流に参加することが決まる前から、ずっと行ってみたかったお城だったので、外から見ただけでなく、お城の中に入ることができたのはとてもうれしく、とても良い経験になったと思います。

この日独同時交流は私にとって特別なもので、将来的にも忘れられない大切な思い出となりました。機会があればまた参加したいです。

『日独同時交流を終えて』

東北 与板 翔貴

今回の日独同時交流に参加させていただき、私は初めての海外での生活を経験することができました。言語の壁など、慣れない環境での生活には漠然とした不安がありました。私はドイツ語は殆ど話せず英語も得意ではなかったため、自分の思いを完全に伝えることは難しかったのですが、伝えようとする気持ちは誰よりも強かったです。

地方プログラムでは、その土地の歴史や伝統に触れる機会が豊富でした。また、ホームステイ先での生活は、ホストファミリーの方々がとても親切で、不自由なことはありませんでした。家族全員が簡単な英語を使ってコミュニケーションを取ってくれたおかげで、たくさんの会話を楽しむことができました。

ディスカッションを通じて気づいたことは、ごみの分別や食品ロスなど日本とドイツで共通の問題が多いことであり、国民の考え方に大きな違いはないということでした。

最後に、この交流に携わった全ての方々から感謝いたします。そして、このような交流を一人でも多くの人が経験できることを願っています。

『第 50 回日独同時交流に参加して』

関東 I・近畿 瀬尾 桜子

今回の交流は、私にとって人生の忘れられない思い出と貴重な経験になりました。最初はすごく緊張して不安が大きかったのですが、グループのみんなと過ごしていくうちに、緊張がほぐれていき、ドイツでの生活はとても楽しく、充実した最高の約3週間でした。

地方プログラムでは、ホストファミリーのGretjeやJon、受け入れて下さったドイツ柔道ユエグントの仲間と活動し、みんなとした柔道、観光、料理、カードゲーム、ディスカッション、カヌー、サッカーなどそれらは私にとって良い経験になりました。受け入れて下さったドイツ柔道ユエグントの仲間たちは優しく、思いやりのある人でした。

言葉が通じなくても、自分から進んでジェスチャーをしたり、努力することが大切だと学びました。また、ドイツの歴史や建物など、深く知ることができ、実際に見て学ぶことができたのでとても勉強になりました。

この貴重な経験を後輩たちに伝えて、スポーツ活動に活かしていきたいと思います。

私達を受け入れて下さった、ホストファミリー、ドイツ柔道ユースの皆様、JJSAの皆様、支えて下さった関係者の皆様、多くの方々に感謝しかありません。関東I・近畿のメンバー、ありがとうございました。とても楽しかったです。

『この夏ドイツに行って』

関東I・近畿 菅野 そよ香

私は、7月25日から8月14日までの3週間ほど日独同時交流会に参加させていただきました。全体プログラムではミュンヘンに行きました。その中の2週間はハンブルクの柔道クラブに受け入れていただき、そこでホームステイもさせていただきました。最後の全体プログラムではフランクフルトに行きました。交流テーマはSDGsでした。

ドイツに着いてすぐに、ミュンヘンのオリンピックスタジアムへ訪れました。日本とは違い大胆な角度のデザインが印象的でした。また、サブトラックでは、一般人が普通に走っているということにも衝撃を受けました。オープンな環境であると感じました。

ミュンヘンは、すごく不安が大きかったです。また、その中で日本の良さを改めて知ることができました。毎日用意してくれる両親のご飯や、いつも話して笑ってくれる友達。全て何気なく日本で過ごしていた日常が楽しく大切な毎日だったとすることができました。

しかし、ホームステイでは受け入れてくれた方々が温かくしてくれたおかげでハンブルグが新しい居場所となり徐々に打ち解けることができました。またその仲間と一緒に多くの自然に触れることができました。森の中にあるウィルトパーク・シュワルツェベルグ野生公園やバルト海では、交流テーマのSDGsに関係の深い自然についてこの自然を守らなければいけないのだと、身近に感じるすることができました。また、ドイツの子供たちが大自然の中でのびのび遊んでいるのが印象的でした。

ホームステイでは、ドイツの人とより身近に話すことができ、ドイツの生活も垣間見ることが出来ました。日本のことにすごく興味を持ってくれていて嬉しかったです。言葉では伝えられなかったことも多かったので次はもっと語学力を身につけて会いに行きたいと思いました。2週間私たちを楽しませてくれた柔道クラブの人達には感謝しています。別れが本当に辛かったです。来年は日本への受け入れがあるので、日本で再会できるのが楽しみです。

ミュンヘン、ハンブルク、フランクフルトの全ての都市で市庁舎に訪れました。普段は公開されない内部まで見学でき貴重な経験をさせていただきました。歴史を大切にしつつ新たな未来を創っていく場所が見られて感動しました。

この貴重な経験をいま私が活動している高浜テニスクラブや今後の生活に活かしていきたいです。このような機会を準備してくださった高浜テニスの上原会長をはじめとするすべての方々にお礼申し上げます。

『2週間のドイツ滞在』 関東I・近畿 大塚 直弥

私はドイツに行く前に、いろいろな人の経験談や、感想を聞きました。その時に言語の壁が大きかったといわれました。しかし実際に行ってみると、そこまでコミュニケーションを取りづらいいとは思いませんでした。ドイツの人たちが私たちにもわかりやすいような言いまわしで、説明してくださったので、とても話しやすかったです。またホストファミリーの家に泊まらせていただいたときには、家族全員がそろって食事をしていることに驚きました。また、夕食の時には、ドイツの伝統的な料理をいただきました。行く前までは、ソーセージのイメージが強かったですが、ほかにもたくさんのものがあることを教えてもらいました。どれもとてもおいしかったです。その中でもGulaschという牛肉の煮込み料理が一番良かったです。ドイツ側のグループの人たちと、過ごす中で文化や歴史とスポーツなどの様々な経験ができました。またドイツの子供たちが小さいころに経験するような体験もさせていただきました。ただ2週間ドイツにいただけでは絶対に経験できないことが経験できたので、これからもこの交流が続くといいなと思いました。

『日独同時交流を通して感じたこと』

関東Ⅰ・近畿 三古 貴子

慣れない土地で生活することへの不安、コミュニケーションや意思疎通を図れるのかということへの緊張、新たな出会いがあることへの楽しみ、様々な感情が入り交わって始まった日独交流でした。しかし、最初に持っていたネガティブな感情はすぐになくなり、ドイツの方々のあたたかさや優しさにたくさん触れた日々でした。その中でも特に印象に残っているのはハンブルクで過ごした2週間でした。まずホームステイ先では見ず知らずの私をあたたかく受け入れてくださり、そこではドイツの伝統料理や伝統ゲームを教えていただきました。また日々のプログラムではこれまであまり経験したことのないカヌーやボルダリングなどのスポーツ体験や歴史的な場所への訪問等をし、毎日が学びと感動で溢れていました。さらにドイツの方々は毎日積極的に話しかけてくださり、私たちが必死に話す英語にも耳を傾け、親身になって話を聞いてくださりました。そこから国境を超えて交流したり、コミュニケーションを取ったりすることへの楽しさを知ったのと同時に、受け入れ団体の方々との素敵な思い出を作ることができたことに喜びを感じました。だからこそ、今後はドイツでの学びを活かして活動し、楽しかった出来事を後輩たちにも伝えていきたいと感じました。本当に関わってくださった全ての方々に感謝しています。

『日独スポーツ少年団同時交流を終えて』

関東Ⅰ・近畿 西山 莉世

私は日独スポーツ少年団同時交流で、沢山の新しい経験をさせて頂いたとともに、忘れられない思い出となった。

日本とドイツは全く違う言語で、言葉によるコミュニケーションの難しさはある。しかしホストファミリーがあたたかく迎えてくださり、私の拙い英語でも読み取ろうとしてくださったおかげで会話をすることができた。「通じないかもしれないから話さない」のではなく、お互いのコミュニケーションを取りたいという意味があれば拙い会話でも思いは通じるし、仲を深めることはできると身をもって学んだ。また、スポーツを通して心を通わせることで、言葉以外のコミュニケーション方法もあると感じた。スポーツを通して協力したり、競い合ったりして楽しんだ時間はとて

も良い思い出となり、スポーツというコミュニケーションツールが創り出してくれたのだと強く感じた。

日独スポーツ少年団同時交流で経験させて頂いた経験をこれからの生活や、スポーツ少年団活動に活かしていきたい、この活動を後輩にも伝えていきたい。

『交流に参加して』 関東Ⅱ・東海 高安 ほの香

今回、日独スポーツ少年団同時交流に参加して、たくさんの人に出会い、貴重な経験をすることができました。

私は、行く前、初めての海外で不安なことが多くて緊張していました。実際にドイツに着くと、日本とは違うことばかりで驚かされることがとても多かったです。例えば、建物一つ一つがお城みたいで歴史を感じられたり、朝食は毎日パンとハムが出てきたり、トイレが有料だったり、毎日がとても新鮮でした。また、街のいろいろなところに連れて行ってもらったり、地元のお祭りに行ったり、普段触れることのない重量挙げをやってみたり、一緒にゲームをしたりして、楽しくて最高な時間を過ごすことができました。

今回の交流で、ドイツの良さにも気づくことができ、言語の違いがあっても、一緒に楽しめることに気づくきっかけになりました。同じグループのメンバーをはじめ、この交流に関わってくださったみなさんに感謝しています。ありがとうございました。

『最高の出会い・思い出』 関東Ⅱ・東海 岩男 将哉

私は、今回の日独同時交流に行くことができて本当に良かったと思っています。

日独同時交流が始まるまでは、いくつかの不安要素がありました。1番大きな不安要素は初めての海外で異文化に触れ合うということ、他にも一緒に参加する日本団との歳の差、人間関係作り、自分の殻を破れるかなど、日程が近づくにつれて不安要素がどんどん増えていきました。しかし、行くと決めたからには悩んでいても仕方ないと思い全力で楽しむと決めて当日を迎えました。

ドイツに行ってから、1番気にしていた初めての海外、異文化に触れ合うなんて不安は初日から無くなっていて、ホストファミリーの方や関係者の方々に助けられながらもドイツの文化

に慣れていくことができました。同じ日本団の参加者の人たちとも年齢関係なく接してくれたおかげで何の不安もなく楽しく日独同時交流を終えることができました。

今回の日独同時交流では多くのことを得ることができました。言葉が通じなくても交流はできるし、不安を抱えていても前には進めない。今までの自分とは全く異なる考えを持つことができました。今後もこの経験を糧にいろいろな事に挑戦していきたいと思いました。

『ドイツと日本がもつ意識の差』

関東Ⅱ・東海 川田 侃央

ドイツを訪れ自分事としてとらえる人の多さに驚いた。

ドイツは日本よりも持続可能性を考えた環境作りが進んでいることは知っていたが、ここまで自分事としてとらえられる人がいるのだと感じた。日本ではどんなに制度が変わろうとも環境を気にする人は増えず不自由になったと感じているだけの人が多くいると感じる。しかし、ドイツではなぜだめなのか、なぜリサイクルをするのかを説明してくれる人が多くおりなぜを主体的に思考に取り入れることで自分事として考えられているのだと思った。その、なぜを想像する力が日本人にかけていると思う。それは、言われたことをやるという教育に問題があるのではないかと考える。それは、スポーツを教えるうえでも同じだ。子供主体で考えさせるより教えることが多くなっていると思う。子供の成長に携わる人間が積極的になぜそうなるかを問いて、なぜを考えられる人間にしていくなべきだと思う。そして、世界に転がっている様々な問題を自分事として考察できるようになるべきだと考える。

『自信』

関東Ⅱ・東海 山本 光琉

今回のドイツ派遣が自分にとって初めての海外でした。しかし緊張はほとんどなく全てを楽しもうという前向きな気持ちでプログラムに参加しました。

この日独同時交流を通して歴史的建造物に触れたり、スポーツ活動や地域のレクリエーションへの参加をしたり貴重な経験をすることができました。またホームステイ先では多少の英語とジェスチャーを使い、言語の壁を超えたコミュニケーションをと

り仲を深めることができました。今回の活動で気がついた大切なことは「お互いを理解しようと努力すること」です。地方の児童館に行ったとき、子供たちは元気にハイタッチをして迎え入れてくれました。一緒にテーブル・フットボールやボードゲームをしたり写真を撮ったりするとき、言語がわからない中でジェスチャーを使い、どうにか理解しようと思いました。お互いを理解しようと努力することができれば人と人が繋がるのは一瞬だと思いました。

今回の日独同時交流で私は自分に自信が持てるようになりました。ドイツスポーツユースの方々や名前も年齢も知らないドイツの方々とコミュニケーションをとり、国際交流への可能性を感じたからです。これからは自分の単位団やリーダーにドイツやスポーツの素晴らしさを伝えていきたいです。また次は指導者として参加できるように精進していきたいと思います。ありがとうございました。

『私の成長』

関東Ⅱ・東海 太田 はるか

この日独同時交流はとても毎日が充実していた。ザーランドでのホームステイや、ハイデルベルクでの重量挙げのアスリートと生活するときでも、まず自分の意見を持つということが人とコミュニケーションをとることへの第一歩になり、難しくても言葉にしてみることで初めて繋がったことを実感し、それを日に日に大切にしていくことで人と関わることの楽しさや嬉しさ、重要性を学ぶことができた。人と関わることで、相手のことを知ることができ、それによって個々の違いや文化の違いを肌で感じることで、とても大きな学びを経験することができた。さらにその考え方を学べたことで視野が広がり、ドイツで一日一日を過ごしていく中で、自分自身の成長を確かなものとして感じ取れたことが自信を持つことにも繋がった。ドイツのスポーツに対する姿勢というものはとても勉強になり、必ず日本のスポーツ少年団にその学びを生かし、この経験が価値あるものであることをこれからも大切にしていきたい。

『異文化とスポーツ』

北信越 宮坂 空

幼いころ私は親に連れられて、愛知県にあるリトルワールドというテーマパークによく遊びに行っていました。リトルワールドは

世界の国々の住居を展示していて、名前通り世界をギュッと小さくしたような場所でした。その中でも私の一番のお気に入りにはドイツ、バイエルン州の家でした。壁に描かれた色鮮やかな騎士の絵や、流れるババリアンミュージック、それと大好きなソーセージ、その場所すべてがワクワクしてドイツに強い憧れをいっていました。

今回ドイツに行けることになり、さらに同年代のドイツ人たちと二週間近くとも行動できるという、旅行などでは得ることの出来ない大きな学びがあると確信し、気を引き締めながらも楽しい気持ちでした。

現地に到着し、憧れていたドイツが目の前にあることに、最初は頭がついていきませんでした。雄大な自然が広がり、のどかな牧草地とカウベルを付けた牛たち、険しい山々と美しい街、おいしい食べ物、こんなに素敵な場所が同じ地球上にあるのか、と思うほどに毎日が刺激的でした。そして楽しみにしていた地方プログラムにむかいました。

いざ、ホストファミリーとあうと、やはりとても緊張します。ただしこのまま自分を出せずにこの交流を進めていくことはもったいないと感じ。コミュニケーションを積極的にとっていくことにしました。僕はほとんど英語を話すことができなかったのですが、事前にできる限り勉強してみました。その甲斐あって相手が何を伝えようとしてくれるのか聞こえるようになってきました。自分が話したいときは知っている単語を何とかつなぎ合わせ伝えました。公式行事中もそうで無いときもできるだけドイツ人グループの中にいるようにしました。そうしていると向こうも心を開いて沢山話しかけてくれるようになりました。

ドイツの生活、季節のこと、長期休みの過ごし方、伝統料理、お祭り、ビールのこと、方言のこと、山のこと、政治、楽しい話から難しい話まで色々なことを話し合いました。このことは、自分の中で一生の宝物です。

今回の交流の中でいろいろな学びがありました。そこで日本に持ち帰りたいドイツのいいところがいくつも見つかりました。三つ挙げたいと思います。

- 一つ目が、名前を呼んで話しかける、
- 二つ目は、ポジティブシンキング、
- 三つ目は、仲間の挑戦を称えることです。

一つ目の名前を呼んではなしかける、は一見普通のことなのですが、日本人を見ていると、ねえ、あのさ、など名前を呼ばずに始める会話が多いように感じます。しかし、ドイツのグループの人たちは絶対に話したい人の名前を呼んで、反応があつてから会話をはじめていました。そのほうが、僕は君に伝えたいことがある！！みたいに熱意など伝えたい気持ちを分かってもらえると思い、マネしたくなりました。

二つ目のポジティブシンキングは本当にすごいと思ったのですが、こんかいの交流中に何回か雨の中、登山する場面がありました。日本人を見ると結構疲れた表情をしていたのですが、ドイツ人はそんな顔一つせずニコニコで、いい天気だね！とか、上まで競争しようよ！などとネガティブな発言を聞いたことがないくらいずっとポジティブでした。別にネガティブが悪いことだといいたいわけではなく、子供たち楽しくスポーツに取り組んでもらうためには、雰囲気作りなどに大切だと感じました。

最後に三つ目の挑戦をたたえる、です。これはスポーツ交流の際にとってもかんじたのですが、初めてやるスポーツだから、上手くできないから、と遠慮がちな日本団員に対してドイツ団員は、私たちも完璧なプレイヤーじゃないから安心してください、と挑戦しやすい空気作りをしてくれました。もし成功しても、失敗しても、結果ではなくその挑戦によくやったよ！であったり、惜しいもう一回やったらもっとできるよ！など結果ではなく中身を見てくれていることにとても感動しました。

この三つ以外にもいい場面はたくさんありました。これらを僕のこれからのリーダー活動に活用し、共有していきたいです。

今回の交流を機に世界のいろいろな国のことをもっと知りたくなりました。

ここに踏みとどまらず、またドイツを訪れることはもちろん、世界のいろいろな国々の人と交流する場を見つけ、積極的に参加したいと思います。

『挑戦する事の素晴らしさ』 北信越 平澤 桃香

時の流れは速く、ドイツでの18日間はあっという間に終わってしまった。しかし、そこで過ごした一日一日は一生忘れることのないほど濃く、充実した日々だった。活動の中には自分が得意ではなかったり、初めて行うスポーツもあった。しかし、ドイツ

の人々は未体験の事にも果敢に挑戦し、もし仲間が失敗してもそれを馬鹿にするのではなく、「いい挑戦だったよ。」と、挑戦したことを価値づける声掛けをしてくれた。

日本にいたときは、挑戦する事を恐れ躊躇することもあったが、ドイツの人たちの声掛けのおかげで挑戦する事の素晴らしさに気付くことができた。このような考え方の変化は、自分にとっての大きな財産になったと思う。そして、失敗も含めすべての出来事が最高の思い出となった。国籍に関係なく、みんなでスポーツをすることが、こんなにも楽しいものだと思えて実感できた充実した18日間だった。

ホストファミリーをはじめ、ドイツ団の方々、この交流に参加するためにサポートしてくれた家族、そして一緒にドイツに行った北信越グループの人たち、すべての人たちに感謝したい。

『一生の宝物』

北信越 小林 叶和

私は、今回の日独同時交流を通して多くの経験をし、大切な家族、仲間に出会うことが出来ました。

ディスカッションではSDGsに対する日本とドイツの意識の違いがみえました。ドイツでは一人一人が自分に出来ることを考えて実行していたので、私もその姿勢を見習いたいと思いました。

ホームステイでは言語の壁が不安でした。しかし、私の拙い英語を一生懸命聞き取ってくれ、沢山会話をしてくれました。しかし、伝えたいことを伝えられないもどかしさがあったので、英語の勉強を頑張りたいと思いました。また、ファミリーデーを通してより仲良くなることが出来ました。本当に優しく接してくださりとても感謝しています。あっという間に時間が過ぎ、お別れがとても辛かったけど、来年、来日する予定のみんなに必ず会いに行きたいと思います。

『日独同時交流で得た学び』

北信越 辻 望来

様々な不安と緊張、それを上回る期待と共に始まったこの交流で、私は多くのかけがえのない出会いと経験をする事ができました。

私はいつも苦手なことや初めて挑戦することから逃げてきました。しかし今回の交流でそれがとてももったいない事だったと

気づきました。ドイツでどんなことにも挑戦し成功することの喜びや楽しさから、挑戦することの大切さを学びました。また私はもう1つとても大切なことを学びました。それはポジティブに考えてみることです。私はネガティブな考え方をしてしまいがちですが、ドイツ人はいつでもどこでもポジティブでした。そのことに気づいた時はすでに地方プログラムの半分を終えようとしていました。私は、残りの半分のプログラムではネガティブな思考や発言を辞め、ポジティブ思考でプログラムに参加しました。すると様々なことがいつも以上に楽しく充実したように感じました。

他にも、私はドイツで数えきれないほど多くの学びを得ることができました。今回お世話になった全ての方々への感謝の気持ちを忘れず、この多くの学びや経験を今後の活動や将来に活かしていこうと思います。

『ドイツでの学び』

北信越 芦川 陽一

私は今回の交流でSDGsとスポーツについて、日本とドイツでの取り組みの違いについて意識しました。約三週間ドイツで過ごし、現地の人と関わることでドイツではSDGsへの関心が高いことが分かりました。例えば店で食事をしながらSDGsに関することを話していると近くの席の人が会話に混ざり、意見を教えてくれたりしました。このことから日本よりも他人との距離感が近く、一人一人が身近な問題に関して興味を持っていることが分かりました。さらに所属している団体がどのように自然に悪影響を与えていて、改善するためにはどのような取り組みが必要なのかを討論することによってSDGsに対する意識を高めることが出来ました。また、ドイツではスポーツも盛んに行われており、その理由として学校が日本よりも早く終わるためスポーツを行う時間を確保できることや、町中にスポーツ施設が多くあることが挙げられます。同時交流では様々なスポーツ施設に行ってみて日本との大きな違いとして年齢の層が幅広いと感じました。また、様々な種類のスポーツ施設があったため、幅広いスポーツを気軽に経験できます。しかし、日本では何を始めるにしても敷居が高く感じてしまうことがあるため、初心者でも気軽に参加できるように工夫する必要があると思いました。今回の同時交流では多くの人の助けがあったおかげで無事に終わることが出来ました。たくさんの貴重な体験をさせていただ

きありがとうございました。

『ドイツで得たこと』

北信越 芦川 久晃

私はドイツへ行くことにとても不安がありました。SDGsの話し合い、ホームステイ先の家族との生活、言語の違いなどです。しかし実際にはドイツの人達は皆フレンドリーで多少の問題はコミュニケーションで解決でき、自分から自然と話しかけるようになりました。

SDGsについてのディスカッションでは、とても盛り上がり夜遅くまで話し続けました。スキー場の人工雪を作る為に化学薬品が使われ環境に悪影響を及ぼす事、ドイツではペットボトルのリサイクル時にスーパーで使える金券がもらえ、回収率がかなり高いなど様々な事を知ることが出来ました。

また、滞在中はドイツ観光や職場体験を通し文化や生活習慣の違いを感じました。スポーツ施設がとにかく豊富で気軽に取り組めるところが羨ましかったです。

活動中ドイツは日本より気温が低く、体調管理にはとても気を使いましたが、日々当たり前のようにスポーツに取り組むドイツの習慣のおかげで無事カリキュラムをこなすことが出来ました。

このような素晴らしい機会を与えて頂いたこと、そして日独交流関係者の方々にはとても感謝しています、本当にありがとうございました。今後もドイツの皆さんとの交流を続けていきたいと思います。

『実りある経験』

北信越 堀江 七海

私は東京での研修を経て渡独し、ミュンヘンでの全体プログラムの後、バイエルン州のケンプテンで2週間の地方プログラムに参加しました。

最も印象に残っているのはディスカッションです。私たちのグループはディスカッション用のプレゼンテーションを作成するなど様々な準備をしましたが、ドイツの参加者の方々はおらかじめ62項目にも及ぶ意見や提案やSDGsをより身近に感じられるレクリエーションを用意してくださっていました。内容としては両国のSDGsに対する現状を確認するだけでなく、その現状を変えていくために私たちができることまで話し合うことがで

きました。

私は地方プログラム期間中、1人で2週間同じ家でのホームステイをしました。日本人が誰もいない環境で、言葉が伝わらないもどかしさをたくさん感じましたが、英語を使ってコミュニケーションをとったり、ジェスチャーなどの身振り手振りでの交流でホストファミリーと意思疎通をすることができました。2日間のファミリーデーでは、少し遠くへ出かけたり、ハイキングをしたり家族の一員として楽しい時間を過ごすことができました。パートナーとの交流だけでなく、ホストファミリーとの交流の時間も多かったためとても実りあるホームステイ期間だったと感じます。

『スポーツは世界の共通言語』

中国 坂本 真優

私が最も印象に残ったのは、ドレスデンの州議会で行われたディスカッションでの「スポーツは持続可能性を促進し、国境を越えて言語を問わずに交流することができる」という言葉です。私たちの交流がその象徴ではないでしょうか。特に後半の「国境を越えて言語を問わずに交流することができる」ということをこの交流でとても感じました。

私は英語が少ししか話せないし、ドイツ語はまったくないので言語の面でこの交流をとても不安に思っていました。ですが、その不安と一緒にスポーツや生活をする中でどんどん解消されていきました。むしろ、自分が使える英語やいくつか覚えたドイツ語を使って、ドイツ人と会話することが本当に楽しかったです。また、このディスカッションでは、使われなくなったTシャツをエコバッグにするという活動を行いました。こんなことでSDGsにつながるのかと思う人もいるかもしれませんが、世界中の皆がこのような意識を持っていれば、きっとSDGsの17の目標は達成できると私は信じています。

私の団でも体験に来た子や始めたばかりの子が道着を用意しなくて済むように、道着の回収を行っています。この活動をもっと促進し、また新しい活動も考えて実行していきたいと思います。

『日独同時交流を終えて』

中国 中藤 颯大

今回の日独同時交流は、異国の地ドイツに行き、ドイツの歴史や文化を学ぶ良い機会になり、ドイツの人々の日本とは違っ

た考え方や生活を間近で感じることができました。

今回の交流が私にとって初めての海外で、不安なことや心配なことが多くありましたが、現地に着くと通訳の方や受け入れ先の方、プログラムで訪れた場所で働く方など数多くの方々が親切にしてくださり、行く前に抱いていた不安は、いつの間になくなっていました。

ザクセン、ザクセン＝アンハルト両州で、各地の歴史や伝統を学べたことが1番心に残っています。両州に深い歴史があり、それらに強く惹かれ、今以上にドイツについて知りたいと思うようになりました。また、受け入れをしてくれたホストファミリーはいつも私のことを気にかけてくれ、1人のホームステイでも安心して過ごすことができました。唯一の心残りとしてはドイツ語で会話ができなかったことがあげられます。簡単な単語で挨拶やお礼を伝えることはできても、日常会話はどうしても英語や翻訳に頼ってしまうことが多く、もっと勉強して行けばよかったと後悔しています。なので、これから学校の勉強と同時にドイツ語の勉強にも挑戦して、また会った時にドイツ語で会話ができるようにしたいです。

交流テーマである「スポーツとSDGs」についても貴重な意見を聞くことができ、より一層学びが深まったように感じます。ペットボトルの蓋が取り外せない仕組みになっていることが面白く、日本でも導入すれば「蓋だけ落ちている」なんてことがなくなるのかなと考えました。

ドイツに行き、多くのことを学べた今回の交流は、私にとってかけがえのない思い出になり、今後にも良い影響を多分に与えてくれると考えます。

『日独同時交流に参加して』 中国 鈴木 真歩

私が日独同時交流に参加して感じたことや考えたことがある。

まず、語学力や言語力の必要性である。ドイツではスマホを使ってたくさんコミュニケーションをとってくれた。しかし翻訳を使うとうまくコミュニケーションを取ることができなかった。また視線や意識がスマホに移るため話した内容があまり記憶に残らなかった。このことから私はもっと英語やドイツ語を勉強しておけばよかったと感じた。今回交流した人が「来年の日独同時交流に参加して日本へいきたいと考えている」と言ってくれた。

私は今よりも語学力や言語力を高め、日独同時交流へ来てくれた人とたくさんコミュニケーションをとれるようにしたいと考えた。

ドイツではペットボトルはリサイクルをすることでお金が返ってくる制度があり詳しく調べてみると他の国にも似たような制度があることが分かった。日本はSDGsについて遅れているんだと改めて感じた。日独同時交流は外国の状況などを詳しく知ることができ、たくさんのお会いや知識を得ることができた良い機会だった。

『日独同時交流で学んだこと』 中国 勝乗 舞衣子

私は今回の日独同時交流で、学んだことがたくさんあります。

1つ目は、ほとんどのドイツ人はフレンドリーで優しい方達ということです。地方プログラムで移動している時、すれ違った人は笑顔で挨拶をしてくれたり、話しかけてくれたりしました。また、スポーツユースの方達は、気分は悪くないかなど、とても体調を気にしてくれました。

2つ目は、ドイツのきまりです。例えば、乾杯をした時は、飲みたなくても一口飲まなければならないこと、日本では歩行者優先ですが、ドイツでは車が向かってきていれば歩行者は止まらなければならないことなどです。こういった日本とは違ったきまりが様々あり、文化の違いを知るたびに面白く感じました。

そしてドイツ滞在中でも特に強く印象に残っているのは、ご飯です。日本のパスタに比べて麺の形が違っていたり、食べたことないようなものも食べたりすることができました。どれもとてもおいしくて、「こういう食べ方があるんだ」という発見もありました。

約2週間の滞在で、ドイツの方とも仲良くなれたし、日本団の各地方の方とも交流ができて、とてもいい思い出になりました。また機会があればドイツに行きたいと思っているし、来年日本に来てくれるホストファミリーの方達に、次は私が、日本のことをたくさん教えて、私と同じように充実した思い出になれる交流にしたいと考えています。

『日独同時交流で学んだこと』 中国 山下 遼河

今回の日独スポーツ少年団同時交流で、たくさんの事を学

びました。

1つ目は、ドイツと日本の違いについてです。言語はもちろん、文化や建物、食べ物など日本とは様々な所が異なることを感じました。私がホームステイ先でご飯を食べる時、ホストファミリーの方がドイツ語で「召し上がれ」と言ってから他の家族達が料理を食べ始めました。日本では、家庭で食事をする場合、食べる人が頂きますとって食べ始めるので、食事の摂りかた1つでこんなにも違うのだなと思いました。また、食べ物も日本とはかなり違っており、私は2軒の家族にお邪魔したのですが、朝食はパンとサラミとバターがどちらの家庭でも多く出ました。日本では、パンとお米の両方を選ぶことが出来るので、贅沢だなと思いました。

2つ目はスポーツについてです。ライブツィヒにて、私達中国グループはザクセン州のスポーツにかかる予算についてお話を聞きました。そこで、年間数百億というお金がスポーツに使われていると知りました。金額の大きさに驚いたと共に、日本でもスポーツにもっとお金を使えば選手達の技術向上だけでなく、競技人口も増えるのではないかと思います。

これらの他にもたくさんの事を学びました。関わった全ての人に感謝をすると共に、今後の活動に活かしてスポーツ少年団をよりよいものにしていきたいです。

『繋がる絆』 中国 一面 望々香

空港に降り立ってすぐ、日本では見慣れない街並みに感動するとともに、これから始まる交流に大きな期待と不安を覚えました。

初めてのホームステイ。緊張でうまく喋ることができなかった私に、ホストファミリーの皆さんは日本の音楽を流して温かく迎え入れてくださいました。言葉の壁は大きく、コミュニケーションを取るのには容易ではなかったですが、ホストファミリーをはじめとするドイツの方々は、私たちの意見や主張を最後まで聞き取ってくださいました。ドイツの方々と一緒に行ったスポーツ活動では、言語は通じずともスポーツを通して繋がる絆は絶大なものであると学ぶことができました。「日本に帰りたくない」と思うほど、ドイツでの生活は充実し、たくさんの経験を得ることができました。この交流の中で学んだドイツでの環境への取り組み

や、SDGsについての考え方を日本での生活に活かしていきたいです。そして、自分の経験したことを所属団の後輩達に伝え、日独交流について興味をもってもらい、ぜひ参加してもらいたいです。

今回、50年という節目の年に参加させて頂いたことに感謝しています。今後もこの交流を通して、出会った人との絆を大切に、いつか指導者としてこの交流に参加させて頂きたいです。

『たくさんの出会いとつながり』 中国 河藤 大和

東京に集まったメンバーの顔は、少し硬いように見えた。これから始まるドイツでの生活への不安と少しの期待が見え隠れしていた。しかし最終日、フランクフルト空港で号泣するメンバーを見て、本当に夢のように充実した時間を過ごせたのだと、グループリーダーとして安心した。

約30年前、父も参加した日独スポーツ少年団同時交流に、私は第50回という節目に参加することができた。今回の交流で、日本人やドイツ人など関係なく、たくさんの人々に出会い、交流することができた。

私は、地元である山口県の平生町をたくさんの方たちに知ってほしいと思い、たくさんの方々のパッチとオリジナルの手ぬぐいを携えて交流に参加した。日本団の団長団の方々、そしてドイツに渡り、通訳やサポーターの皆さん、ホストファミリーの皆さん、地方プログラム担当者の方々、ドイツスポーツユエグメントの方々など、本当にたくさんの方に渡すことができたと同時に、かけがえのないつながりを作ることができた。

今回体験し、学んだことを単位団やリーダー会、地元の人などたくさんの方々に伝えていきたい。そして今度は指導者として、また携わることができたら幸せである。

『素敵な出会い』 四国 見尾 奈々帆

私は、今回の日独同時交流を経験して挑戦することの楽しさを学びました。

ドイツに行く前は、初めての渡航ということもあり日本とは違う環境や食べ物、文化や言語、お金や時間など様々なことに不安を抱いていました。また、自分から積極的に話すことが苦手で英会話にも自信がなかったため、コミュニケーションを取るこ

とも不安でした。

しかし、実際にドイツへ訪れてみると不安に思っていたことや、悩んでいたことがほとんど無くなるほど楽しい時間を過ごすことができました。そして、ドイツでの交流を通して色々なことに気づくことができました。ドイツの方の何事にも物怖じせず積極的に取り組む姿勢や、言語が違って音楽やダンス、共通の話題などで繋がれること。柔術体験や演武披露は、初めての体験ですごく刺激的でした。その他にもドイツでしか体験出来ない遊びやアクティビティに挑戦することで楽しさに気づくことが出来ました。

ドイツの方との交流だけでなく、全国から集まった参加者や班員とも素敵な時間を過ごすことができ嬉しかったです。これからも、この交流会で知り合うことができた友達やホストファミリーとの繋がりを大切にしていきたいと思います。そして、何度も写真や動画を見返してしまうほど心に残る経験となったので来年も多くの団員にこの交流会へ参加してもらいたいです。

『私を変えた三週間』

四国 勝乗 陽奈

私は7月25日から8月14日までの約3週間、第50回日独スポーツ少年団同時交流に参加しました。ホームステイ初日、今まで生活していたメンバーと離れ、一人でホストファミリー宅に向かうとき不安でたまりませんでした。しかし、移動中ずっと私に質問してくださったり、町のことや家族のこと、ドイツのことなど様々な話をし、盛り上げてくれました。そのおかげで家に着いた時には、不安は全くありませんでした。そして2週間、一緒にBBQをしたり、プールに行ったり、ジップラインをしたり、楽しいことも大変なことも一緒に乗り越えてきました。最終日お別れすることが本当に悲しくて、涙が止まりませんでした。

話す言語が違い、育ってきた環境が全く違って共に繋がり、支えあえるということを強く感じました。この交流で、私の知らない私をたくさん発見することができました。この3週間、何でもないただの日常全てがかけがえのない大切な思い出です。関わってくださった全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

『新たな喜びと出会い in Deutschland And

Japan』

四国 早馬 大凱

初めに今回の日独交流に参加できたことをとてもうれしく思います。僕の思い描いていた日独交流を超える経験ができてよかったです。今回50周年ともあって多くの特別プログラムがありました。その中で一番いいと思ったのがドイツの人と東京観光をするプログラムです。なぜかという、日本をドイツの人達に知ってもらうためにはどうしたらよいか考え実行することができたからです。あの経験は一生忘れることはないでしょう。僕たち四国グループはオッターバッハという都市へ行きました。迎えてくださったドイツ団は全員仲がとてよく、下は10歳から指導者まで全員家族のような感じてました。なので僕たちもすごくなじみやすかったです。日本の単位団もこんな風になれたらいいなと思いました。ホームステイ先で印象に残ったことは、まずみんな歩くことが大好きだったことです。理由は健康にいいからというシンプルな回答で意外でした。次にクラブハウスでのアクティビティで、男女問わずみんなが一体となって楽しむ空間にとっても興奮しました。また、スポーツは言語よりも勝ると実感したことです。スポーツ無しに友情を作ることは不可能でした。最後に、後輩達がこのような経験ができるようにスポ少の活動を続けていきたいと心から思いました。

『日独同時交流で何を学ばか、それを今後のスポーツ少年団活動にどのように活かすか』

四国 中島 斗亜

わたしはこの日独同時交流に参加して良かったと思います。はじめは緊張して話しかけることも出来ませんでしたが、レクなどを通して徐々に話せるようになりました。ホストファミリーも笑顔で快く迎えてくれたので緊張が解けて楽しい生活を送ることができました。そしてドイツの生活や文化、ホストファミリーについて教えてもらいました。実際にホストファミリーの家で生活してみて自分の家と同じこと、違うことをたくさん見つけることができました。私の家との違う点としては湯船に毎日浸かる習慣がなかったことや食事などです。地方プログラムでもホストファミリーの子たちと共にいろんな場所に行ったり、体験をしたりしました。それを通してドイツのことについて知り、ドイツの子たち

と交流を深めることができました。この交流で私はSDGsの討論だけでなく、ホストファミリーとの交流、ドイツについて知ることが出来てとても良い経験になりました。

『涼しい夏』

四国 神原 瑞希

ドイツに到着し、空港から出た時にとても涼しさを感じ、自分が今いるのは日本ではないのだと実感した。ドイツの夏は、とても快適であった。

ホームステイ先の家族は、ドイツ語が理解できない私にわかるように、英語を使って話をしてくれた。喋ることのできない不安はあったが、日常会話程度の英語なら卒無くこなすことができた。

事前に懸念していた言語の壁は、あまり感じることなく自分の話す英語が外国人に伝わることに感動した。今年の夏は他の国に行く予定もあるが、ドイツで英語を使って外国人と会話してきた経験があるため、ひるまずに自信をもって積極的に会話をしていきたいと思う。

今回受入れをしてくれた団体が来年、日独交流で日本に訪れる予定らしく、そのうちの一人であるルーカスに持ち帰らなかった分の荷物を預かってもらい日本で受け取る約束をしたので、ルーカスはもちろん他のメンバーにも会えることを楽しみにしている。

四国 岡本 寧々

今回の交流でドイツと日本の文化の違いはもちろん、SDGsへの取り組み方の違いなど沢山のことを学ぶことができ、また2週間という長いようで短い期間の中で様々なプログラムを通して仲間や友情の大切さを実感しました。ジップラインでは恐怖心が強くなかなかミッションをクリアしていくことが出来ない中、日本団の仲間がお互いに声を掛けて励まし、全てのミッションをクリアすることが出来ました。これでお互いの距離が縮まり、より結束力が高まったと思いました。また、ドイツに行くまでは現地の人達と仲良くなれるかコミュニケーションが取れるのかとても不安でした。言葉の壁はありましたが、翻訳機を使ったりボディージェスチャーのおかげで想像以上に意思疎通ができ、通じ合えたので本当に楽しく過ごすことができました。

自由行動などではドイツのSDGsの取り組み方、例えばペットボトルを捨てればお金が貰えたり、お店で貰える袋が全て紙袋だったり日本ではあまり実践されていない取り組みを行っていて日本よりも一歩前を進んでいるというのを目の当たりにしました。

私がこの交流に参加しようと思ったきっかけは先輩リーダーの報告会です。今後もこの交流にたくさんの後輩達に参加してもらい様々な経験を積んでもらいたいので、自分がドイツで学んだことや得たことを先輩リーダーにしっかり伝えられるようにこれからも積極的にリーダー活動に参加しようと思います。

『積極的な姿勢』

四国 松本 能周

私が今回のスポーツ少年団日独同時交流に参加して学び、考えたことは2つあります。

一つ目は、テーマディスカッションを通して、自分の考えを積極的に表現したり、周りを気にせず自分の意思を強く持ったりすることの大切さです。ただ、ドイツ人メンバーは、決して自己中心で自分の意見を押し通すのではなく、他の人の意見を尊重しながら、善い議論をするために一意見を伝えているように感じました。

二つ目は、ドイツのSDGs に対する取り組みや、一人一人の環境を守ろうとする想いを知り、日本人としてSDGsに対してもっと真摯に向き合わなければならないと実感したことです。ペットボトルのリサイクルが当たり前になっていたり、ホームステイ先の道には、鹿や馬などの生活を守るために街灯は一切なく、反射板のみがおかれていたり、家の中でも電気を灯す場所を限定したりなど、積極的な地球保全活動を行っていることを学びました。

最後に、日独同時交流で学んだドイツ人の積極的な姿勢を目指し、自分の意見を持ち、主体的に行動できるような人材になるとともに、より良いリーダー育成のために学んだことを伝えていきたいと思っています。

『日独交流を通して実感し感じたこと』

九州 牟田口 翔太郎

今回の日独交流を通して自分が実感した事は二つあります。

一つ目は、SDGsに対する取り組み方の違いや、ドイツの方々のSDGsに対する意識の違いを感じることができました。ドイツの方々は、SDGsの取り組み対して一人一人がしっかりと、自発的に行動し、自分の意見を持ったうえで、取り組まれていることを知りました。二つ目は、スポーツをする環境の違いです。ドイツでは、地域ごとにクラブチームがあり、クラブチームには、小さい子供から、大人まで幅広く所属することが出来るようになっておりスポーツを生活の一つとして、身近に感じることが出来るようになっていることを知ることができました。また、ドイツのクラブチームでは、日本とは違い勝利に対して、焦点を置くのではなく、楽しんですることが大切という事に焦点を置いて活動されていることを学ぶことが出来ました。

この二つの事を実感して感じたことは、日本とドイツでは、SDGsに対する取り組みに大きな差があると感じました。またスポーツを身近に置くための環境の違いや、取り組みの違いを身近に感じることが出来ました。その中で、自分は、日本とドイツとのSDGsの取組みの遅れや意識の違いを埋めるには、一人一人の意識を変えることが大切だと感じました。その中で、意識を変えるためには、今の日本とドイツとのSDGsの取り組みの違いを知ることができる場を作ることが大切だと感じました。その中で、大人の方々だけでなく、中学生や高校生にも伝わりやすいような説明をすることにより、より多くの方々に、現状を知ってもらうことが出来て、より多くの方々のSDGsに対する意識を変えることが出来ると思いました。だからこそ自分たちのような若い世代が積極的に取り組んでいかなければならぬいんだと感じることが出来ました。これから自分はもっとスポーツ少年団を通して積極的にこのような取り組みに参加していくことが自分の成長につながり、また、日本全体の成長にも繋げることが出来ると感じることがこの交流を通して感じることが出来ました。

『ドイツ研修を終えて』

九州 廣田 眞子

みんなとくだらないことで笑った時間は大切な宝物だ。17日間、数えきれないほどの驚き、発見、そして大切な友人、思い出が増えた。今も写真を見返すたびに数々のエピソードが浮かんでくる。親切で心温かな方ばかりに恵まれ、感謝で胸がいっぱ

いだ。

活動中、言語の壁に当たることが多かったが、その中で嬉しいこともあった。地方プログラム時、道場で先生方が型を指導してくださり、一緒に道場の子どもたちと練習に励んだ。練習後の会話は練習前と比べて会話が活発だった気がした。スポーツを通して相手を知ろうという気持ちが加速したのだらうと考えた。ペアでの練習では表情、ジェスチャーでコミュニケーションが取れたと思う。スポーツを通じ非言語コミュニケーションでも伝えることが出来たと思うと嬉しい。これからも交流会が続き、沢山の出会いがあると思うと心が弾む。交流会が続くためにも今私がすべきことはこの経験をリーダー会の仲間に伝えることである。

最後に、九州グループのみんな、政岡先生。通訳の美樹さんをはじめこの交流会に関わってくださった皆様、全ての方に感謝したい。ありがとうございました。Danke!

『日独同時交流感想文』

九州 林田 千聖

今回の日独同時交流には、この交流を支えてくださる方々への感謝の気持ちを忘れず、期待にこたえられるような交流にしようという責任感を持ち、望みました。

ドイツ団体との交流ではスポーツを通じて仲を深め、普段の学校生活などを尋ねお互いの国の特徴や違いを知ることが出来ました。「スポーツが持つ力は国境を超える」ことを実感し、改めてこの交流会の意義を確かめることが出来たと感じています。

テーマディスカッションを行った際にも、意見をたくさん出し合うとともに考え方の違いや共通点を発見しました。具体的には「スポーツクラブでの清掃活動」や「クラブ内での洋服などのリサイクル活動」などのSDGsに関連する意見が挙げられました。このような活動をスポーツ少年団が取り組むことにより、結果としてそれぞれの県の団員、地域、学校へ環境の意識を高めることが出来ればと考えました。

そのためにも、今回の交流会で得た経験や新たな視点を、団員を始めとした多くの人と共有していきたいです。

日独同時交流では、普段関わる機会のない他県の団員や、ドイツの団員、そして同じ九州チームの皆さんなどたくさんの素敵な人たちに会うことが出来ました。加えて、この交流会を通

して、私はさらに異文化や他言語に興味を持つことが出来ました。このことが自分の進路を考える際に視野を広げてくれるものだと感じています。

『日独同時交流を終えて』 九州 御手洗 遥心

日本から約9000km、ドイツで過ごした17日間は最高で素敵な出会いに溢れた長くて短い旅だった。多様な価値観に触れ異なるアイデンティティの人々と理解しあえたことは私の成長に繋がった。現地の方々と交流する中で、言語・習慣・食文化の違いを学びオープンマインドな姿勢を養うことができた。また、多様性と対話の経験から、偏見や先入観を克服する重要性を再認識した。大きく異なる文化を持つドイツの人々との対話を通じて私は共通の価値観を見つけ、言葉は通じなくても新たな友人や繋がりを築く基盤となることを実感した。この第50回日独同時交流は、私の人生において貴重な経験であり、生涯忘れることのない友人との出会いに感謝する。

『交流』 九州 中村 洲

私は約三週間ドイツに訪れることができて本当に良かったと思いました。現地の人々と楽しい毎日を過ごせました。最初はホームステイと聞いて不安もありましたが、ホストファミリーが私を笑顔で受け入れてくれてとても嬉しかったです。ホストファミリーとは一緒に博物館に行ったり、他のホストファミリーの家へ行って交流を深めたりしました。

そして最も感銘を受けたのは、ドイツ人の主体性です。移動の最中にも日本団の体調を気にかけてくれたり、人と目を合わせながら挨拶したり、自ら積極的に行動をしていました。ドイツは自己責任という考えが強いので人格者が多く、自分の職業や人生に誇りをしっかり持っていて感銘を受けました。

ドイツを訪れて今までの価値観が変わり、文化の異なる人たちと言葉や心で繋がることはとても貴重な経験でした。これからは自分を磨いて、繋がりや出会いを大切にしたいと思います。

テーマレポート

北海道

私たちは、今回のテーマである『スポーツ×SDGs』について5つの項目から考えてみました。

1 つ目は「スポーツ×SDGsの前にすべきこと」です。SDGsには17個の目標があり、全てが持続可能な社会を実現するうえで大切なものです。しかし、優先順位があり、貧困や飢餓などの命にかかわる目標を先に達成しなければ、スポーツを行う精神、身体、金銭の余裕は生まれないと考えました。

2 つ目は「与える効果」についてで、スポーツを通じて健康や心の安寧、仲間を得ることができます。

3 つ目は「悪影響」に触れました。競技場の設立のため森林を伐採する、大会で多くの人が集まり、ごみのポイ捨てや騒音被害が起こるなどよい面だけではないことを頭に入れました。

4 つ目は「副産物」です。スポーツをすることで直接得られるものではありませんが、平等に対する考えや経済をまわすきっかけになるのではないかと考えました。

最後はスポーツ×SDGsの「実際の例」としてプロギングをあげました。ジョギングとごみ拾いを掛け合わせたもので誰でも簡単にできるものでした。

また、ドイツ人と日本人で日々取り組んでいること、挑戦しようと思っていることを発表し合いました。ユニフォームや道具をおさがりにしたり、公共交通機関で大会へ移動したり、飲料を買うのではなく水筒で持っていくようにしたりなど自分の意識で変えられるものがたくさんありました。問題は、国際的交流が少ないことや資金がないとスポーツを始められないこと、スポーツでの男女差などがあがりました。住む地域・国が違っていても、直面している問題は似たようなものだと感じました。それぞれの案を共有していくなかで、実行した案がうまくいかなくても他の人や地域では成功する可能性があることや新たに意見を得る場になることから、多くの人の考えを聞くことが解決に繋がると私たちは思いました。スローガンの「エラムアン・ミナ・ウタリ ポロンノ学ぶ・笑う・仲間たくさん」にふさわしい3週間の交流ができたと思います。

『We Are One

～誰1人取り残さない未来をめざして～ 東北

今回の交流テーマが「スポーツとSDGs～スポーツが拓く社会の持続性～」ということで、私たちはディスカッションのはじめに、スポーツ×SDGsにとっていちばん重要だと思う開発目標を、日本側・ドイツ側に分かれて話し合い、出た意見を全体で交換した。

日本側では、17の目標のうち3番(すべての人に健康と福祉を)と12番(つくる責任つかう責任)の2つが、スポーツと深く関わっていて特に重要な目標であるという意見にまとまった。私たちが3番を選んだ理由は、健康にも福祉にも、スポーツが関係しているからだ。子どもからお年寄りまで、スポーツを通して皆が健康になることができる。また、障がいがあってもできるパラスポーツがあるから、スポーツは健康と福祉の両方に関係していると考えた。そして、動ける年齢の時からスポーツを続けることで健康寿命を延ばし、年齢を重ねたときに医者に頼らない、健康で丈夫な体でいることがSDGsの他の目標にも繋がると考えた。

もう1つ、12番を選んだ理由は、スポーツをする私たちにとって「つかう責任」は常に意識すべき責任であると感じたからだ。スポーツで施設や道具を使う側として、道具や練習場所を大切に使うことは当然のことであり、とても大切なことだと思う。具体的には、こまめに道具の手入れを行うなど普段から物を大切に扱うことや、自分が使わなくなった道具やユニフォームなどは捨てずにおさがりにすることなどが挙げられる。高価な道具を何回も買い替えるのではなく、1つの道具を長く大事に使うとする意識がとても大切だと考えた。

ドイツ側からは、1番(貧困をなくそう)が特に重要な目標であるという意見があった。それは、まず1番を解決することによって他の目標も解決できると考えたからだ。経済が充実すればすべての目標は問題を解決しやすくなり、貧困問題を解決することが、すべての目標の達成に繋がるというのがドイツ側の考えだった。

このディスカッションを通して、日本側は自分たちが取り組みやすい目標と現実的な対策を考えた一方で、ドイツ側は非現実的であっても最も重要だと考える目標を選んだところに、目指すゴールは同じだが、そこに辿り着くまでの考え方に違いがあると感じた。考え方や見方が違うことで、私たちからは出なかった新鮮な意見がドイツ側からたくさん上げられ、とても有意義な時間だったと思う。また、普段何気なく目にするだけだったSDGsについて、掘り下げて考える良い機会になった。

『スポーツを通じた SDGs の目標実現に必要なこと』

関東Ⅰ・近畿

関東Ⅰ 近畿グループは ETV 柔道部のメンバーとバルト海に面した街 Schönhofen にあるハンブルクスports少年団のホリデーハウスで、「スポーツと SDGs」～スポーツが拓く社会の持続性～についてディスカッションを行いました。

ディスカッションは、ETV で柔道の指導者をしながら、ハンブルクスports少年団の「チームリーダー」を務めているミリアム・コルンブルーさんのワークショップから始まりました。その中の持続可能性に関する単語を自由に発言し合う場面では、参加者から出た単語を原因と解決策に分類することで、私たちはSDGs に対するイメージを膨らませました。

共通の認識が出来たところで、事前に準備していた両国が纏めたテーマについての考えを、PowerPoint を用いて発表しました。少し緊張しましたが、共通していると思ったことは、スポーツを通じた SDGs の目標実現に期待していることとして、スポーツ選手・大規模な大会の影響力や発信力に着目している点でした。

一方で、スポーツをする際にゴミを増やさない工夫や、試合会場への移動に公共交通機関を積極的に利用する取り組みをしているところは違っているように感じました。

その違いからドイツでは環境や SDGs に配慮してそれぞれが行動しようとする気持ちや意欲が日本よりも強く実際に活動もしていると感じました。

発表後にはミリアムさんが用意してくれた SDGs とスポーツに関する写真を見て、その中にある事柄のポジティブな面とネガティブな面について持続可能性の視点から更に全員でディス

カッションを行いました。それにより、持続可能性については多様な側面から考えることが重要であるということに気づきました。今回のディスカッションを通して感じたことを日々の生活やスポーツ少年団での活動に活かしていきたいと思いました。

さらにスポーツクラブやスポーツイベントの活動では、どのような取り組みが、持続可能な社会の実現に少しでも貢献できるかを一人ひとりが考え、行動に移すことが重要であると痛感しました。

『ドイツと日本の男女格差を通して考えたこと』

関東Ⅱ・東海

私たちの班では、スポーツ上での男女格差について話したいと考えていました。

このスポーツ上での男女格差の問題は、SDGs の 5 番目の目標、「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」、10 番目の目標である、「国内および国家間の不平等を是正する」の二つの目標と絡み合っていると考え、この二つを基軸に考えました。

日本の男女格差の現状は、ジェンダーギャップ指数が¹ 146 か国中 125 位ととても悪い水準となっています。

その背景には教育現場での男女差など様々な根深く残る刷り込み的な男女差があります。例えば、小学校、中学校では体育の時間に男女別の授業があることが挙げられます。また、スポーツでの男女格差では、男女で賞金額が違う、与えられるスポーツの環境が男子のほうが優位であることも挙げられます。この男女の差というものに対して議論している中でトランスジェンダーのスポーツ選手の問題になりました。男性が女性の心を持っているとして大会に出場し記録を更新したりなどの様々な現実が挙げられました。このようなことから、男女の差という壁を与えない、どちらの性別でも分け隔てなく行えるスポーツを考えていくべきだと考えました。

ドイツの男女格差の現状は、ジェンダーギャップ指数が¹ 146 か国中 6 位という日本と大きく異なる数値でした。

ドイツを訪れ、話をしているとドイツにも男女格差があるようでした。しかし、日本の現状を話してみるとそれに対して原因や現状を知っているのにもかかわらずなぜ行動しないのかという

喝を入れられてしまいました。

実際に競技スポーツを行っているユースに配属され、競技スポーツとしての男女の問題はどのようなべきなのかを考えたと思いました。私たちはそれまで新しく作り上げていくべきだという志向が強かったです。しかし、今ある記録にむかって男女隔てなく切磋琢磨して毎日进行している姿を見ていると今ある競技の男女性を考えていくべきだと思いました。そして、この問題は誰かではなく自分たち、指導者になっていくだろう私たちが身近から変えていくべきだと考えました。

『挑戦と成長』

北信越

私たちは、日本側は主に環境とジェンダーについて5個の課題、ドイツ側は様々なジャンルで62個の課題について、事前に資料を用意しディスカッションを行いました。

日本側、ドイツ側ともにスキースキの単位団に所属している人が多かったこともあり、特にスキースキ場について時間をかけて議論を交わしました。

日本側からはスキースキ場で撒かれる硫黄の危険性について、雪解け水が環境汚染に繋がることから上限を決める必要があることなどの課題をドイツ側に伝え、ドイツ側からは、ドイツでは環境に配慮した圧雪機を使用しているが、その圧雪機は電力で動いているため太陽光発電を使うとより持続可能な環境作りに繋がると聞きました。さらに日本側から、日本ではドイツと違いリサイクルしてもお金が返ってこないことについてドイツの人はどう思っているのか質問したところ、資源があつてこそ人間は地球上で長生きでき、また資源は全ての人のものであり、誰もが資源を使うことができるのでリサイクルはとても重要なことで、お金はそれほど気にするべきではないと言われました。確かに日本ではデポジット制度がありませんが十分にリサイクルがされていると感じます。それは資源の重要性を十分に理解しているからだ気付かされました。

またドイツ側に環境問題解決のために日常生活で心掛けている事を質問したところ、節水や節電、リサイクルトレイーパーを使用している職場で働いている人がいました。他にも森林伐採を防ぐために熱帯雨林の一部を買っている人もいました。今地球上で起こっている問題について、他人事にせず自分に

できることを考え実行する事は大切と分かっていても、それは簡単にできる事ではありません。

私たちは今回の日独交流を通して、挑戦することの大切さ、自分に自信を持つことの重要性、コミュニケーションを積極的に行うことの大事さ等、様々な事を学ぶことができました。私たちが成長できたこの貴重な学びを今後の活動の様々な場面で生かしていこうと思います。

『SDGsの意識を高く持つ』

中国

私たち中国グループは、ザクセン＝アンハルト州とザクセン州の地方プログラムに派遣されました。そこで印象に残ったディスカッションについて、レポートにまとめます。

ドレスデンの州議会で行われたディスカッションでは、どのようにしてザクセン州にスポーツを普及させるか、また温暖化やジェンダーなどの世界的問題について、パラス社会民主党議員の貴重な見解を聞くことができました。ドレスデンは第二次世界大戦の際に空爆を受けました。同じ惨劇を繰り返さないために、若者にその戦争の歴史を知ってもらう必要があります。そこでスポーツを通じて交流することを1つの手段として活用することがあげられているそうです。また、温暖化により雪が少なくなっているザクセン州でウィンタースポーツを継続するために、人工雪を使った大会を検討・実施するなど、温暖化対策を講じているそうですが、「世界問題として、本当にそれでいいのか」という疑問点も浮かび上がっています。そしてジェンダーについて、法の前では平等であるものの、賃金格差などがあるように、スポーツにも男女の間で格差があり、その構造を崩さなければならないと考えているそうです。

また、さよならパーティーの際に、家庭で実施できるSDGsを自ら考え、取り組んでいるホストファミリーの方の話聞くことができました。例えば、地産地消の実践やフェアトレード商品の購入、庭にミツバチなどの動物を飼育し、共存できる植物を植えるなどです。これらは一見、小さな取り組みに見えますが、一人一人が実践すれば、貧困の撲滅や国家間の不平等をなくすことにつながっていきます。

今回の交流のディスカッションを通して、ドイツの方々がSDGsの意識を高く持っていると感じました。日本も、個人が

意識して、小さなことから、世界とともに積み上げていかなければならないと痛感しました。

四国

私たちは、SDGsの5番目の目標である、「ジェンダー平等を実現しよう」に重点を置いて話し合いをしました。まず1番に話題になったことは、ドイツで一番の人気を持っているサッカー競技で、プロリーグにおいて男女の賞金に大きな差があることです。そして、メディアでの取り上げ量でも差があることです。男女同じルールで全く同じことをしているにも関わらず、賞金とメディアに取り上げられる量だけ女子のほうが少ないことが問題であるということを話し合いました。世界中で人気であり、話題になるスポーツであるサッカーで、このような差があからさまにあっては、人々の考えは変わらないと考えました。世界に影響を与えることができるほどの競技であるのに、このことについて何も触れられないのが残念だという意見も出てきました。それに対して、私たちがお世話になった柔術のスポーツユエグントでは、男女の差が練習でも試合でもあまりないと聞き、このようなスポーツがもっと増えるべきだと思いました。一方で、男女の差があって当然だという意見も出ました。「体格や体力、どうしても男女で差ができてしまうのは仕方のないことだ。」確かに、そこに関しては、女子が不利になってしまうため、分けるのはいいと思います。しかし体力などが劣るからと言って、扱いを変えるのはおかしいという意見が出ました。

そしてもう1つ話題となったのは、日本の伝統的スポーツである相撲についてです。先日、倒れた力士を助けるため女性が土俵に上がったところ、怒られ下ろされてしまったという出来事についてです。土俵には、女性が上がってはいけないという昔からの伝統があり、女性が上がることが許されていません。このことに対して、伝統をまもることも大事だと思うが、今の時代に寄り添って、変えていくほうが大切だという意見が出ました。

約1時間話し合っ、お互いにとても深い意義のあるディスカッションになったと思います。国は違っても今の問題に対する考えや意見はほとんど一致して、これから世の中を良くしようと思える人がもっと増えたらいいと思いました。とても素晴らしいディスカッションでした。

『ドイツから学んだこと』

九州

私たち九州グループはトラウンロイトとバートメルゲンハイムで「SDGs×スポーツ」についてディスカッションを行った。まずSDGsが盛んな佐賀県についての概要と、どのような取り組みが行われているかを始めに発表した。また問題点として、「SDGs×スポーツ」が結びついていないことと、楽しさより勝利を優先しているところが多いということを挙げた。ドイツ側は「日本と同様にドイツでも勝利を目標に練習に取り組むが、楽しむことが基盤にありそこで社交性やコミュニケーション能力を高めていく」と語った。

九州グループはまず、新型コロナウイルスの影響でSDGsの取り組みはどのくらい影響したかという質問を投げかけた。それに対しドイツ側は「生活に支障が出るほどの影響だった」ということを述べた。日本側ではSDGsの目標達成度がドイツより数段下であるが、SDGsの取り組みは以前より浸透してきていると話した。

次にドイツの「SDGs×スポーツ」について話した。ドイツではクラブチームの団体や個人でスポーツを通して持続可能なことをしている人たちに対し、SDGsの評価の基盤に従って「サステイナブル賞」というものを与えている。具体的には川や水辺のごみ拾いや、水を守るためにごみ拾いの情報データを集めて専門家に提出する、街全体でSDGsに取り組み少しでもエネルギーを持続可能にできるようにしている。この方法は環境教育が優れているドイツ全体で行われていて、とても感銘を受けた。日本の「スポーツ×SDGs」についてはスタジアムに植林や、団体のバリアフリー化、学校の授業の中でニュースポーツを行うなどの取り組みを紹介した。

最後にディスカッションを通して学んだことは、ドイツでは自己責任が育まれた国家でそれぞれが自主性を持ち、スポーツを通して社交性や交流を盛んに行っている。そのためボランティアも多く日本のスポーツの仕組みとまったく異なることだ。日本はドイツから見習うべきところ多くあることを実感した。

お世話になった方々

北海道

受入団体: Sportjugend Berlin

(ベルリンスポーツユース)

Brandenburgische Sportjugend

(ブランデンブルクススポーツユース)

責任者: Maria Acs(マリア・アークス)

Marie Kloppenburg(マリー・クロッペンブルク)

Benjamin Wienke(ベンヤミン・ヴィーンケ)

Andra Friedniece(アンドラ・フリエドニツェ)

Claas Scheil(クラス・シャイル)

通訳: 児玉はるか

東北

受入団体: BSJ Oberpfalz

(バイエルン・スポーツユース オーバープファルツ)

責任者: Birgit Daschner(ビルギット・ダッシュナー)

通訳: 中澤ムラス美穂

関東Ⅰ・近畿

受入団体: Deutscher Judo-Bund e.V.

(ドイツ柔道ユース)

EIMSBÜTTELER TURNVERBAND e. V.

(アイムスビューッラー・スポーツクラブ)

責任者: Vanessa Harloff(ヴァネッサ・ハーロフ)

Sascha Costa

Lea Holz(レア・ホルツ)

通訳: 鹿沼輝与志

関東Ⅱ・東海

受入団体: Motor Sport Jugend

(モータースポーツユース)

Gewichtheber Jugend(重量挙げユース)

責任者: Iris Engel(イーリス・エンゲル)

Lili Oesten(リリー・ユーステン)

通訳: Max Häfner(マックス・ヘフナー)

北信越

受入団体: Haus des Ski Deutscher Skiverband

(スキユース)

責任者: Richard Kracker(リチャード・クラッカー)

Roland Lowinger(TVK ｽｰﾊﾟｰｸ代表)

Thomas Kiechle(ケンプテン市長)

通訳: ラガッセ佑香

中国

受入団体:

Sportjugend Sachsen im LSB Sachsen Julia

Schmidt(ザクセン・スポーツユース)

Sportjugend im Landessportbund Sachsen-

Anhalt e.V. Christian Schild

(ザクセン=アンハルト・スポーツユース)

SG Blau-Weiß Gerwisch e.V.

(SG ブラウ・ヴァイス・ゲルウィッシュ)

USV TU Dresden e.V.

(ドレスデン工科大学の大学スポーツクラブ)

責任者: Holger Aliche

Heiko Taubenreuther

Paul Grünler

通訳: Florian Weidert(フローリアン・ヴァイダート)

四国

受入団体: ラインラント=プファルツ・スポーツユース

責任者: Fabian Scherer(シェラー・ファビアン)

通訳: Mareike Hümmerich(ヒュムメリッヒ・マライケ)

九州

受入団体: バイエルン・スポーツユース

ヴェルテンベルク・スポーツユース

責任者: Philipp Weißbacher

(フィリップ ヴァイセンバッハー)

Reinhold Balbach(ラインホルド バルバッハ)

通訳: 内田美樹

第Ⅱ章 ドイツの友を迎えて

●ドイツ団受入の記録



全体プログラム（前半・東京）

7月26日(水) (新宿区:国立オリンピック記念青少年総合センター)

ドイツ団東京国際空港到着(LH716)

歓迎式

基本レクチャー(JJSAの組織と概要について、共通テーマについて)

JJSA-団長団ミーティング

JJSA-グループリーダーミーティング

日独団員交流会

7月27日(木) (新宿区:同左)

都内自由研修(日独派遣団合同)

通訳ミーティング

グループ別ミーティング(第1訪問県担当者/グループリーダー/通訳)

50周年記念式典

役員懇親会

7月28日(金) (新宿区:同左)

各グループ地方分散



基本レクチャー



日独団員交流会



歓迎式 記念品

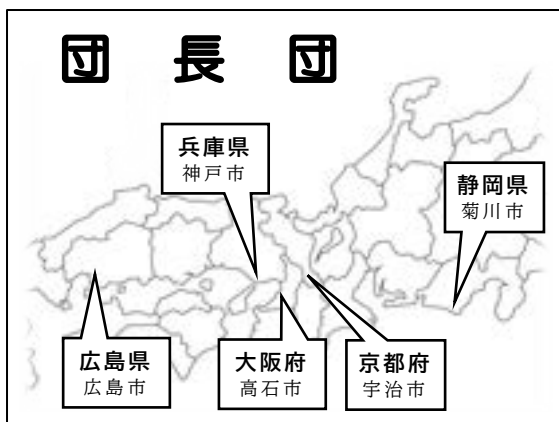


第一訪問県へ出発



50周年記念式典 日独派遣団集合写真

団 長 団



菊川市長表敬訪問(「ブラザキくる」市役所東館)



陶芸体験(文化パーク城陽)



マツダスタジアム

日 程

7月28日(金) 静岡県(菊川市:ホテルルートイン)
菊川市へ移動／市長表敬訪問／Welcomeレセプション

7月29日(土) 静岡県(同上)
柔道・剣道・バスケットボール交流／温泉

7月30日(日) 兵庫県(神戸市:相鉄フレックスイン)
神戸市へ移動／自由研修

7月31日(月) 兵庫県(同上)
柔道・空手道交流／さよならパーティー

8月 1日(火) 京都府(宇治市:宇治第一ホテル)
宇治市へ移動／表敬訪問／テーマディスカッション／歓迎パーティー

8月 2日(水) 京都府(同上)
野球・ソフトボール交流／茶道・陶芸体験／温泉

8月 3日(木) 京都府(同上)
市内自由研修

8月 4日(金) 京都府(同上)
体操交流／平等院鳳凰堂見学／さよならパーティー

8月 5日(土) 大阪府(高石市:ホテルルートイン)
大阪市へ移動／あべのハルカス見学／空手道・ボッチャ交流／夕食会

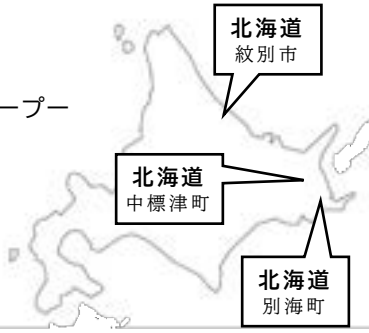
8月 6日(日) 広島県(広島市:ベッセルイン)
だんじり見学・体験／広島市へ移動／歓迎パーティー／プロ野球観戦

8月 7日(月) 広島県(同上)
テーマディスカッション／市長表敬訪問／ジ アウトレット広島見学

8月 8日(火) 東京都(港区:品川プリンスホテル)
厳島神社参拝／弥山登頂／もみじ饅頭づくり体験／杓子づくり体験など／品川プリンスホテルへ移動

柔道

ー北海道グループ



日 程

7月28日(金) 北海道(紋別市:生涯学習センター)
紋別市へ移動／市長表敬訪問

7月29日(土) 北海道(同上)
ストレッチポール体験／ガリコ号釣りクルーズ／歓迎会

7月30日(日) 北海道(同上)
柔道協会と合同練習／温泉／モノづくり体験

7月31日(月) 北海道(同上)
オホーツクタワー・流水科学センター・スカイタワー見学
／記念撮影／買い物

8月 1日(火) 北海道(同上)
パークゴルフ体験／海水浴／柔道協会と合同練習／温泉

8月 2日(水) 北海道(同上)
出塚水産工場・オムサロ原生花園見学／流水公園／さよならパーティー／カラオケ

8月 3日(木) 北海道(別海町:別海町町民体育館)
別海町へ移動／スポーツ交流／歓迎レセプション／温泉

8月 4日(金) 北海道(別海町:ホームステイ)
野付半島見学／柔道少年団と交流／和服着付け・茶道体験／温泉／ホストファミリーと交流



紋別市表敬訪問(紋別市役所)



カニの爪オブジェ(紋別市元紋別)



柔道体験(武徳殿)

8月 5日(土) 北海道(同上)

管内地域交流事業参加／町内散策／プール／ホストファミリーと交流

8月 6日(日) 北海道(中標津町:ホームステイ)

ピザ作り体験／ディスカッション／標津町水キラリ見学／中標津町へ移動／ホストファミリーと対面・交流

8月 7日(月) 北海道(同上)

表敬訪問／町民とのスポーツ交流／開陽台・ミルクロード見学／中標津町夏祭り会場準備見学

8月 8日(火) 北海道(同上:マルエー温泉依橋)

柔道交流／ゆめの森公園見学／絵手紙・ゴム印づくり体験／さよならパーティー

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

法蘭寺／東武サウスヒルズ散策／品川プリンスホテルへ



スポーツセンター祭りでドッジボール(別海町町民体育館)



ピザ作り体験(農漁村加工体験施設)



ディスカッション(農漁村加工体験施設)



ホストファミリー



フットサル交流(中標津町総合体育館)



オホーツク流氷科学センター

7月28日(金) 時差の為、若干疲れは見えた。

(紋別市:門馬 理人)

7月29日(土) ドイツにはないトレーニング方法に団員は興味津々だった。釣り体験がなかった団員がフグを釣れた事に大変喜んでいて様子。夜の歓迎会では多くの日本人と交流出来た事で、今事業の意味があったと思う。

(同上)

7月30日(日) 日本の柔道がどういうものかを経験し、団員は真剣に取り組んでいた。物づくり体験も初めての経験で個人の個性がでて楽しかった。ドイツでは日本でのスタイルの焼肉はなく、初めての経験だった。また味の方も大変満足していた。

(同上)

7月31日(月) 海水浴に馴染みがないドイツでは経験できない紋別ならではの経験を行い、地元人とも交流が出来た事が大変意味があった

(同上)

8月1日(火) 講師を依頼した渚滑パークゴルフ協会の会長 清水さんを中心に講師の方々に大変丁寧に指導していただいた。また、柔道協会との合同練習を行い、柔道の技のかけ方などの指導を受けた。

(同上)

8月2日(水) さよならパーティーにて団員より、今回のスケジュールには大変満足していると感想がでた。担当としてはいかに団員たちを喜ばせるかを考え、スケジュールを作った意味があったと思った。今回初めてこういう事業を担当して大変自分にもいい経験になった。受入前は長いスケジュールだと不安はあったが、終わってみれば大変早く感じた。今後機会があれば、また担当したいと思った。

(同上)

8月3日(木) 出会った当初は、お互い緊張しておりコミュニケーションをとることが難しいように感じたが、逆に彼らから積極的にコミュニケーションを取ろうとしてくれており、申し訳なく感じた。リーダーのカイをはじめ、全員がとても礼儀正しいグループであり、とても明るく気持ちのいい団体であった。日本語を(「話す」「書く」ことを)学ぼうとする団員もいるなど、とても勤勉なグループであり、日本の文化を学ぼうとする積極的な姿勢が随所に見られ感心した。

(別海町:梅岡 幸太)

8月4日(金) 野付半島見学は、天気は良かったが、気温が高く散策路では蚊が多かったので、急遽トラクターバスを利用した。蚊に刺されて嫌な思いもしていたと思うが、こちらを気遣ってか嫌な表情を見せることもなく好感が持てた。昼食中、事前に「肉なしの料理」をお願いしていたが、店員のミスによりベーコンが入っていたことがあった。食べる前に自分で確認していたため、大事には至らなかった。柔道交流では、道着に着替えると表

情が一変し真剣な表情をされており、普段から真剣に柔道に打ち込んでいる様子がうかがえた。ドイツ団はスポーツ後には直ぐにシャワーを浴びる習慣があるが、交流した施設にシャワー設備がなく道着を着たまま体育館へ戻り、シャワーを浴びた。本日よりホームステイ開始。ドイツ団も受入家庭も互いに楽しみにされていた。今回、受入家庭を決定するのが遅くなり、ドイツ団に対し不安な思いをさせてしまったことに申し訳ないと感じている。受入家庭を決定することが大変であったが、最終的には各家庭がとても快く迎え入れていただき感謝している。移動手段としてマイクロバス、または、大きめのワンボックスカーを借用したかったが、本町のイベントと重複していたことや、近隣地区で開催されたバレーボール競技のインターハイのためレンタカーも手配できず苦慮した。(同上)

8月5日(土) (前日に)ドイツ団が海水浴を希望され、別海町では水が冷たいため泳げないことを伝えたが、ドイツでは10℃くらいの水温でも泳いだことがあると聞いて驚いた。(今回は時化で実現できなかったが)8年前に来町されたドイツ団も海で遊ぶと時間を忘れて楽しんでいただけたとの記録が残っており、湖や川ではなく海で泳ぐことが楽しみな様子であり、可能であれば次の交流事業の際にプログラムに組み入れることを検討したい。初日に比べ、メンバーとのコミュニケーションも図れるようになり、我々スタッフも楽しく過ごさせていただいている。

(同上)

8月6日(日) 別海町最終日となり、民泊受入家庭との別れの時間がやってきたが、別れを惜しんでなかなか離れられず、涙ぐむ家族もあり、とても濃厚な2日間を過ごされたのだと推察される。当初、(別海町滞在する)3泊4日の民泊は受入家庭に負担が大きいのではと心配し、2泊3日に設定したが、全ての家庭がもっと「一緒に過ごしたかった」と言ってくれており、受入家庭との交流の時間をもう少し多く取れば良かったと感じている。ビザ作りとディスカッションが予定より1時間ほど伸びてしまったが、地元高校生とドイツ団のディスカッションはとても充実していた。高校生たちも英語で発表や、積極的に質問しており、地元高校生にとっても貴重な時間になったと感じている。標津町のお祭りでは、ステージショウが行なわれているのを見て、「私もステージで歌えないか?」と真顔で言われ、日本人とメンタリティーの違いが垣間見えた。今回この事業を引き受けた際は不安でいっぱいであったが、ドイツ団の礼儀正しさと勤勉さ、異文化や日本人にはない感性などに触れることができ、我々スタッフ一同、大変貴重な経験をさせていただきま

した。

(同上)

8月7日(月) 中標津町での受入2日目であったが、どのプログラムにも意欲をもって取り組む団員たちと感じた。雨が降ったり止んだりと不安定な天候の中でも、プログラムを楽しもうという意欲を感じ、感心させられた。中標津町の夏祭り会場準備では、6000個ものちょうちんが飾られる様子を見学し、中にはやぐらに上がり歌を歌い始めるなど、様々なことに興味を持つ団員たちと感じた。

(中標津町:玉沢 陸)

8月8日(火) 中標津に到着し3日目となったが、連日の雨がとても残念に思えた。紋別、別海町でも柔道のプログラムがあり、疲れているのではないかと思ったが、さすがの体力で難なくこなしていた。さよならパーティーではドイツ団、事務局、民泊家庭が集まり会食をした。会場にはカラオケ設備があり、団員が民泊家庭の子どもとデュエットをするなど、終始和やかな雰囲気で終えることができた。今回協力いただいた民泊家庭の皆様は、国際交流の経験が豊富で関心が高く、そのおかげもありドイツ団員は楽しく過ごすことができたと思う。

(同上)

8月9日(水) 日本人の若者は(私の偏見かもしれないが)宗教に対し、興味は薄いと感じるが、今回来町した団員たちは、様々な文化の下暮らししているからか、物事に対する好奇心が旺盛で、今回のお寺見学だけではなく、何事にも真剣に取り組む方たちと感じた。大量にチョコレートを買収む様子が見られ、なんでそんなに買うの?と聞いたところ、日本のチョコは格別に美味しいらしい。受入の前は不安が大きかったが、受入が始まると3泊4日はあっという間だった。指導者や通訳の方含め、全員が前向きな方たちで救われた部分が大きかったと思う。今後は今回の経験を活かし、国際交流に積極的に関わっていきたいと思う。

(同上)

シュレスビツヒ＝ ホルシュタイン

ー東北 I グループー

青森県
南部町
八戸市

秋田県
にかほ市

岩手県
滝沢市

日 程

7月28日(金) 秋田県(にかほ市:ホームステイ)
にかほ市へ移動／郷土資料館見学／市長表敬訪問／
レクリエーション／歓迎会／ホストファミリー宅へ

7月29日(土) 秋田県(同上)
ジュニア・リーダースクール参加／角館散策

7月30日(日) 秋田県(同上)
ファミリーデー

7月31日(月) 秋田県(同上)
仁賀保高校見学／海水浴／ディスカッション／白瀬記
念館見学／BBQ

8月 1日(火) 岩手県(滝沢市:ホテル大観)
羽子板づくり／滝沢市へ移動／表敬訪問／歓迎レセプ
ション／ミーティング

8月 2日(水) 岩手県(同上)
八幡平国立公園トレッキング／温泉入浴／観光地見学
／施設見学／ミーティング

8月 3日(木) 岩手県(同上)
スポーツ交流／滝沢南中学校訪問(ハンドボール部)／
施設見学／さんさ踊り見学・体験

8月 4日(金) 岩手県(同上)
文化活動／スポーツ体験(カヌー)／御所ダム見学／さ
よならパーティー



eスポーツ体験(秋田県立仁賀保高校)



羽子板づくり(象潟公民館)



滝沢市歓迎レセプション(ビッグルーフ滝沢小ホール)



スポーツ交流(滝沢市立滝沢南中学校)

8月 5日(土) 青森県(南部町:ホームステイ)

ショッピング(盛岡イオンモール)／南部市へ移動／ホームステイ打合せ／歓迎レセプション／南部夜市見学

8月 6日(日) 青森県(同上)

桃狩り体験／フルーツパーラー体験／ディスカッション
／ホームステイ先へ

8月 7日(月) 青森県(八戸市:八戸パークホテル)

弓道体験／法光寺見学／八戸市へ移動／市長面会
／YSアリーナ見学／スピードスケート練習見学／スケート体験

8月 8日(火) 青森県(同上)

是川縄文館見学／勾玉作り体験／葦毛崎展望台・燕島観光／八戸市美術館見学／兜・お面作り／中心市街地ウォーキング

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

八戸市博物館／八食センター観光・昼食／お別れセレモニー／品川プリンスホテルへ



南部町 歓迎アトラクション(バーデハウスふくち)



ディスカッション(名久井農業高等学校)



文化体験 さんさ踊り(盛岡市)



スケート体験(YSアリーナ八戸)



御所沼カヌー(岩手県立御所湖広域公園艇庫)



高校生と桃狩り(名久井農業高等学校農園)

7月28日(金) 初めはドイツ団とのコミュニケーションに困っていたものの、ジェスチャーなどを交えながら積極的に話そうとしていたのでこれからの活動への不安が少し消えた。ドイツ団は英語が話せるようだったので通訳の方に協力してもらいながらも、英語で会話しようとする姿勢に感心した。表敬訪問で庁舎に入るときはにかほ市の職員がお出迎えしてくれてドイツ団と職員の交流もあってよかった。歓迎会は両者若干の緊張はあったものの会話を弾ませていて安心した。後半の方の時間が少し押してしまったのが反省点として挙げられるが、みなさん柔軟に対応してくれていたのも無事に1日目の日程を終えることができた。(にかほ市:村上 彩乃)

7月29日(土) 集合時間が7:45で、全員45分よりも前に集合したので、田沢湖スポーツセンターに予定より早く到着してしまったが、こちら側のリーダーとドイツ団員同士とで各々交流を深められていたのでよかった。リーダースクールに参加していた団員ともたくさん話しているいい時間を過ごせたのかなと感じた。角館では、暑かったため心なしか冷房の効いている部屋にいる時間が長かった気がしたが、「暑い」と言いながらも楽しんでいるように感じた。写真を撮り合ったりしていたので、それで仲を深められたのではないかなと思う。(同上)

7月30日(日) 各家庭で楽しい時間を過ごされていたようだった。特に事故やケガもなくこの一日が終わって安心した。(同上)

7月31日(月) 仁賀保高校に関しては、お願いしていた時間より早めに集合してしまい、気を遣って早めに校舎内に入れてくれたが、結果的に急かしてしまうような感じになってしまったので、事前に集合時間なども伝えておけばお互いスムーズに進めることができたのではないかなと思う。この日は予定を詰め込みすぎたかと思ったが、案外スケジュール通りに進んだのでよかった。雨は降らなかったものの、風が強くて船が出せなかったのも急遽白瀬記念館の見学に変更したが、事前に雨天時などのことも考えて、施設の予約をしておくべきだと思った。BBQは、ドイツ団も日本側も全員楽しんでいたのが充実した時間を過ごしていたように感じた。(同上)

8月1日(火) 引継ぎの日に別の活動をスケジュールに組み込まないほうがよかった気がした。時間通りには進んだものの、私に余裕がなく、最後の最後で少し焦った。本人たちは羽子板作りを楽しんでいたようだったのでその点はよかった。駅のホームでの見送りでは涙ぐんでいる人もいて、期間は短かったもののみなさんの中で思い出に残る時間を提供できてこちらまで嬉しい気持ち

になった。県の担当の二階堂さんにはたくさん迷惑をかけてしまったが、たくさんの方の協力があったからこそ成功させることができたし、感謝の気持ちでいっぱいです。大きな問題もなく、無事に終了してよかったです。(同上)とても元気で、積極的にコミュニケーションを図ろうと行動して頂いた。歓迎レセプション内の食事の提供について多少不安があったが、「おいしい」と言ってたくさん食べていたので安心した。事前に提供いただいたアレルギー情報について(特にベジタリアン)はもう少し詳細が欲しかった・・・。(滝沢市:吉田 将之)

8月2日(水) グランドセイコーススタジオでは専任の時計師が組立・調整を行う専門工房を見学し興味津々でした。ブランドの歴史、背景を知り非常に満足な様子であった。(同上)

8月3日(木) 午前中のスポーツ交流、午後の施設見学、夕方のさんさ踊りと濃い一日となった。日中の気温も上昇し熱中症が心配されたが体調を崩す団員もなく活動できた。スポーツ交流では非常に楽しそうに交流していた。部活動訪問は急遽のリクエストだったが学校側も快く受け入れていただき、中学生にとっても非常に有意義な時間となったようだ。(同上)

8月4日(金) 最後の夜はさよならパーティー(BBQ)を行い、滞在期間の振り返りやお互いの家族のことなど自然と会話が弾み、終始和やかな雰囲気であった。花火も楽しんでくれて良かった。日中は熱中症警戒アラートが発令中でカヌー体験ができるか心配であったがプログラムを入れ替えるなど時間を早めるなど対応した。施設の方にも柔軟に対応いただき非常に助かった。(同上)

8月5日(土) 5日間の日程を予定通り行うことができホッとしている。ドイツ団にはスポーツ交流や文化活動などを通じて滝沢市、岩手県の魅力を感じていただけたと思う。(同上)

歓迎レセプションでは、ほぼ予定どおり進行したが、これまで2県で交流を続けてきたドイツ団にはアトラクションの時間が長すぎたように感じた。事前に秋田県、岩手県からベジタリアンの情報を得て対応したが、ベジタリアンの程度などの確実な情報が必要であった。

(南部町:上田 隆昭)

8月6日(日) ディスカッション相手の名久井農業高等学校生徒と他プログラムも一緒に活動したことにより、ディスカッションにスムーズに移行できたように感じた。準備していた昼食が他県での食事と同じ場合があるため、事前に食事の情報が必要と感じた。(同上)

8月7日(月) 弓道体験では、弓を射ることが新鮮で

あることと上達していることから、非常に楽しんでいる様子であった。スポーツや武道など、体を動かす体験を好むように感じた。（同上）

市長面会では、日本語を交えた自己紹介をするなど、終始和やかな雰囲気であった。市長との会話を楽しんでいる様子であった。施設見学では、疑問点等を積極的に聞くなど興味を示していた。また、スケート体験では、持ち前の身体能力を発揮し、すぐに滑られるようになり、上達が早かった。リンクを何周も回ったり、フィギュアスケートの技の習得に励んだりと時間いっぱいまで楽しんで活動していた。体を動かすことが好きだという印象を受けた。（八戸市：岩淵 真樹）

8月8日（火） 新聞に記事が載っていることを教えると、写真を撮影し、みんなで嬉しそうにしていた。勾玉作りでは、「家族に作ろう」という声が聞こえ、材料選びから真剣だった。講師からやり方を聞きながら、ほとんどの作業を1人で終えており、手先が器用だと感じた。また、他のワークショップでも黙々と取り組んでおり、完成後は写真を取り合うなど楽しそうな様子だった。昼食後に自由行動の時間を設けると、暑い中ではあったが海の方まで行くなど元気いっぱいに行動していた。（同上）

8月9日（水） 見学では、難しい内容もあったが、積極的に質問するなど、熱心な様子が見られた。お土産選びでは、これまでの訪問先での思い出を振り返り、美味しかったものを購入しており、それぞれの活動が充実していたことが分かった。暑い日が続いたが、体調を崩す方もなく、無事にプログラムを終えることができ安堵している。講師や運転手など関わった全ての方へ、毎回みんなで感謝の気持ちを伝えている様子が印象に残っている。八戸市でのプログラムを楽しんでくれたようだったので、良かった。（同上）

体操Ⅰ／ フェンシング

—東北Ⅱグループ—

山形県
鶴岡市

宮城県
大郷町

福島県
いわき市

日 程

7月28日(金) 福島県(いわき市:いわきワシントンホテル)

いわき市へ移動／市長表敬訪問／ウェルカムパーティー

7月29日(土) 福島県(同上)

泉青祭(文化祭)オープニングセレモニー／ディスカッション／バスケットボール交流／書道体験

7月30日(日) 福島県(同上)

暮らしの伝承郷見学／遠野和紙紙漉き体験／スパリゾートハワイアンズ

7月31日(月) 福島県(同上)

白水阿弥陀堂・アクアマリン福島見学／小名浜周辺自由行動／お別れ会

8月 1日(火) 山形県(鶴岡市:ホームステイ)

鶴岡市へ移動／ウェルカムパーティー／ホームステイ家庭へ

8月 2日(水) 山形県(同上)

いでは文化記念館見学／羽黒山石段ウォーク／三神合祭殿見学／最上川船下り／フィッシュギャラリー見学

8月 3日(木) 山形県(同上)

鶴岡市長表敬訪問／致道博物館・致道館見学／鶴岡北高生との交流／ホストファミリースポーツ交流

8月 4日(金) 山形県(同上)

サップ体験・海水浴等／加茂水族館・バックヤード見学／庄内観光物産館



ウェルカムパーティー記念写真(クレールコート)



ディスカッショングループ発表(いわき秀英学園)



書道体験(いわき秀英学園)



流しそうめん(パストラル縁の郷)

8月 5日(土) 宮城県(大郷町:パストラル縁の郷)
ショッピング(盛岡イオンモール)／大郷町へ移動／ウェルカムパーティー

8月 6日(日) 宮城県(同上)
乗馬・流鏑馬体験／収穫体験／流しそうめん／和太鼓の演奏鑑賞・体験／とみやど観光／スーパーで買物

8月 7日(月) 宮城県(同上)
パークゴルフ体験／タカカツ万葉パークゴルフ場／万葉茶屋／松島海岸／瑞巖寺見学・松島観光

8月 8日(火) 宮城県(同上)
抹茶体験・窯見学／ディスカッション(利府高等学校／剣道体験／茶道体験／さよならパーティー／花火／ミーティング

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)
青葉城址内見学／品川プリンスホテルへ



ウェルカムパーティーでダンス披露



致道博物館の庭園



結構なお手前で(宮城県利府高等学校)



ホストファミリーとの休憩



羽黒のお土産屋さんにて



最後の夜に花火(大郷町役場 パストラル縁の郷)



しおりのプレゼント(山形県立鶴岡北高等学校)

7月28日(金) お迎えの為に前日入りをし、グループリダーのLeaさんと通訳の土屋さんと打合せができたことで、不安が軽減されました。ただ、Leaさんは前日に顔を知ることができたので良かったですが、他のメンバー(団員)の顔が当日まで分からない状態だったので、過去と同様に顔つき名簿を事前にいただけると助かるなと思いました。また、市長表敬訪問やウェルカムパーティーでは、ドイツ団が積極的にお話をしてくれたことで、言語の壁がありながらも盛り上がり、とても有意義な時間になりました。(いわき市:鈴木 千夏)

7月29日(土) 29日の実施の内容については、文化祭期間に被ってしまったり、秀英生の力量等も不鮮明だったため、個人的にうまくいくか不安な気持ちがありました。が、ドイツ団及び秀英生の優秀さと、担当の先生プランニングのおかげで大成功に終わることができました。交流後にドイツ団と生徒たちは、ツーショットを撮ったり、お互いにInstagramをフォローし合ったりしていました。短い間での交流でしたが、生徒たち、ドイツ団、どちらにとっても濃密な時間になったと思います。彼らはSNSで繋がっているの、今回に限らず、これからも交流を深めていって欲しいと思います。(同上)

7月30日(日) 暮らしの伝承郷は、ハワイアンズに比べると喰らいつきが悪そうだったので心配でしたが、みんな興味津々な様子で見学してくれたので良かったです。紙漉き体験では、1人2枚ポストカードを作成したので、いいお土産になったと思います。また、本来であればハワイアンズは、ホストファミリーデーとしていたところですが、今回はホームステイがないプランのため自由行動としました。夏休み期間+日曜日だったため、乗り物やプール自体もかなり混んでいたのが申し訳なかったです。

(同上)

7月31日(月) いわきでのプログラムも既に折り返しを迎え、今回はいわきの観光スポット巡りプランとなりました。行く場所全てにいいリアクションをくれたので、連れていく側としても嬉しかった気持ちになりました。特に印象的なのは、白水阿弥陀堂で鯉に餌やりをしたのに、アクアマリンふくしまでもまた餌やりをしていたことです。次の場所に行くよ!と言ってもずっと鯉に釘付けで、見ていて面白かったです。夕食はリクエストに応じてラーメンにしましたが、全員見事に完食していて、こちらも嬉しかったです。また、最後にお別れ会ということで、急遽、事務局メンバーとボウリングをするというプランができましたが、とても盛り上がり、私たちもしっかり楽しませてくれました。(同上)

8月1日(火) あっという間に5日間が過ぎてしまい、送り出す側としても少し情が湧いてしまいました。無事にいわきでの行程が終了できたのは、いわき秀英高生や様々な方々の協力があったことで、とても感謝しきれません。山形、宮城のプログラムも楽しんでもらい、日本を満喫してもらえればと思います。個人的には、楽しかったと言ってもらえたことが何よりでした。いざ話してみようと思っても、英語が全く出来ずに思うように話せなかったことが心残りですが、とても良い思い出になりました。

(同上)

真面目な団員という印象を受けた。指示をしっかりと聞いて行動する、分からないこと、疑問があれば随時質問し、質問を受けて行動するなど、自分の行動に責任を持つという姿が見られた。ウェルカムパーティーでは初めは硬さも見られたが、アトラクションのゲームを通して打ち解ける様子が見られた。ホストファミリーの方が緊張している様子であった。(鶴岡市:小関 孝幸)

8月2日(水) 疲れもあったと思うが、プログラムを1日こなすことができた。一晩ホームステイ先に宿泊したことで、ホストファミリーと非常に仲良くなっている様子が見られた。福島県でたくさん虫に刺されてきた様子で、蚊に対してナーバスになっていた。虫除けスプレーをかけてあげたら「アリガトウゴザイマ〜ス」と全員が上手な日本語で返してくれた。驚くとともに、礼儀正しい態度に日本人とドイツ人の共通する「魂」を感じた。天気が良く、とても暑かったものの、全員が石段を登ることができ、良かった。かなりつらかったであろうドイツでは見ることができないであろう杉林に興味津々であった。何事にも興味を示し、ポジティブに活動する姿に感心した。(同上)

8月3日(木) 3日目となったが、元気にプログラムをこなすことができた。昼プログラムは、市長表敬や高校生との交流など市内中心の活動だったので徒歩移動であった。更にこの日はとても蒸していたため、ドイツ団員にとってはかなり暑そうであった。しかし、常に笑顔でポジティブに活動する姿はとても素晴らしく、関わっている人を笑顔にさせる大きな力があった。夜プログラムのスポーツ交流では、ホストファミリーとドイツ団の絆の深さを感じた。初日から3日間という短い期間しか経過していないが濃密な時間を過ごしていることが伺われた。(同上)

8月4日(金) 4日目、この日はサップ体験、カモンマーレで食事、加茂水族館見学など海沿いでの体験であった。サップ体験では慎重な姿が見られたものの持ち前のチャレンジ精神でどんどんパドルをこぎ、先に進みたがることが見られた。加茂水族館を見学する時間が少な

かったように感じた。見学だけでも1時間程度確保したかった。お土産購入時には緑茶を購入する団員がいた。ドイツ人は炭酸水を好み、お茶は飲まないと聞いており、「その通りだ」と感じていた。鶴岡に来たばかりの時はお茶を飲む団員はいなかったが、日本文化に触れ、お茶の美味しさを知ったのだろう。日本文化の浸透を感じた。

(同上)

8月5日(土) 鶴岡市役所での見送りに、大勢のホストファミリー、関係者が駆けつけてくださり、ありがたかった。ドイツ団員、ホストともに涙するなど感動的な場面が繰り広げられた。自分の1年間を通した業務の中で、感動して涙が止まらない体験はあるだろうか。たぶん、無いであろう。それほど大きな経験になり、忘れられないものになったと思う。大きな怪我、体調不良、トラブルもなく、無事に全日程を終えることができ良かった。(同上)

山形県鶴岡市からの引継ぎを受け初めてドイツ団と対面した。こちらの緊張を察してかドイツ団も少し緊張している様子が見て取れた。私はドイツ語だけでなく英語も話せないため、ドイツ団とコミュニケーションが取れるか不安であったが、通訳の方に間に入っていただいたことで、ドイツ団との距離が近くなったように感じた。

(大郷町:鈴木 照)

8月6日(日) 乗馬・流鏑馬体験や流しそうめん、和太鼓の演奏など日本ならではの体験をドイツ団に提供することができた。二日目ということもありドイツ団とも片言の英語、ジェスチャーを使って意思疎通が取れるようになった。また、お互いの名前を覚え、名前を呼び合うことができ、より親密度が増したように感じた。太鼓体験では、開始時刻が14時と一日でも最も暑い時間帯での実施となったが、適宜休憩を挟み、無事に実施することができた。ドイツ団が「日本についたときに聴いた太鼓を体験する機会があって嬉しい」と言っていたのがとても嬉しく、印象に残っている。

(同上)

8月7日(月) 真夏日を超える気温が続き、参加するスポ少団員やドイツ団の熱中症が心配であった。しかし、当日は気温が少し下がり、予定通りパークゴルフ体験を実施することができた。体験が始まると、最初のうちは会話が少なかったものの、時間が経過するごとにお互いのショットに対して声を掛け合うようになり、楽しくコースをまわっていた。ニュースポーツであるのパークゴルフは、運動量が少なく子供でも気軽に楽しめることや、通訳が常時つけない状況でも身振り手振りでコミュニケーションをとることができることから親睦を深める適切なプログラムであったと感じた。

(同上)

8月8日(火) プログラム調整で難儀したこともあり、実際に絵付け等の陶芸体験ができなかったことや、前プログラムや同日で抹茶体験が重なってしまったことは大変悔やまれた。さよならパーティーでは盛大に催すことはせず、感謝と労いの意を込め、夕食を共に過ごすように行った。最後にした花火では童心に返ったような表情を見せており、こちらも何だかほっとしたような気持ちであった。

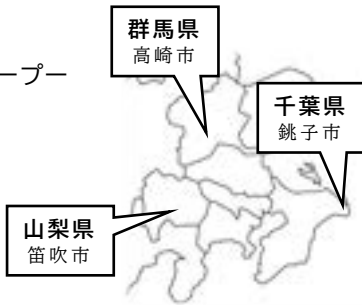
(大郷町:伊東 史典)

8月9日(水) ドイツ団のメンバーは、慣れない国で連日に渡ってプログラムをこなしており、疲労もあるなか何事にも真剣に取り組んでいただいた。至らない点が多々あったと思うが、当町をはじめ、プログラムの受け入れ先となってくれた周辺市町村としても初めての試みとなり、大変貴重な経験を数多くさせていただいたことは感謝の念に堪えない。ドイツ団メンバーの今後益々のご健勝とご活躍を願っている。

(同上)

ヴェルテンベルグ

一関東 I グループ



市内観光(市田商店(氷))



夏祭り(若宮八幡神社)



東京ディズニーランドにて

日程

7月28日(金) 千葉県(銚子市:大新旅館)

銚子市へ移動／地球の丸く見える展望台／市田商店
／犬岩見学／歓迎会／歓迎花火大会

7月29日(土) 千葉県(同上)

市立銚子高等学校弓道部と交流／犬吠崎自由散策
／銚子ジオパーク会場視察(シーカヤック)／スイカ割り
／夏祭り

7月30日(日) 千葉県(千葉市:ホテルポートプラザ
ちば)

合気道稽古・琴体験／ディスカッション／BBQ／花火

7月31日(月) 千葉県(同上)

東京ディズニーランド自由研修(リーダーズクラブ有志
参加)

8月 1日(火) 群馬県(高崎市:ホームステイ)

朝食兼お別れパーティー／高崎市へ移動／オリエンテ
ーション／歓迎パーティー／ホストファミリーへ

8月 2日(水) 群馬県(同上)

染色体験／東京農業大学第2高等学校視察・部活動
見学・体験(華道・書道・茶道・弓道・バレーボール部)
／箕郷レクとの交流

8月 3日(木) 群馬県(同上)

ファミリープログラム

8月 4日(金) 群馬県(高崎市:塚越屋七兵衛)

榛名湖畔散策／おもちゃと人形自動車博物館見学／
テーマディスカッション／さよならパーティー



人間知恵の輪(東京農業大学第二高等学校)

8月 5日(土) 山梨県(甲府市:ホテル平安)

歓迎レセプション

8月 6日(日) 山梨県(同上)

アイスブレイク・テーマディスカッション

8月 7日(月) 山梨県(笛吹市:ホテル平安)

富士山展望スポット／富士急ハイランド自由行動

8月 8日(火) 山梨県(同上)

笛吹高等学校交流(茶道部・剣道部・すいれき太鼓部)

桃狩り体験／少林寺拳法スポーツ少年団と交流

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

博物館見学／お別れ会／品川プリンスホテルへ



桃狩り(見晴らし園)



染色体験(染料植物園)



ファミリーデー



釈迦堂遺跡博物館視察



ファミリーデー



剣道記念撮影(山梨県立笛吹高等学校)

7月28日(金) 今回の訪問はスポーツ交流、文化習慣の体験、特に高校生が夏休みに体験したら楽しいであろうコンテンツを選び計画しました。氷や花火はドイツでは体験できないことだったのでかなり喜んでもらえました。ただラゲッジの大きさを予想してなかったのでワゴンが荷物でいっぱいになったので計画変更して宿舍入りを早め荷物を置きに行き事なきを得ました。また食事の嗜好の偏りがあったので事前に悩みましたが、通訳の秋山氏の協力で乗り越えられました。(銚子市:滝田 靖)

7月29日(土) 秋山氏から朝食完食と聞き安心。弓道部視察にて、道場へ近づくに従い、横一列で弓道着に青の鉢巻き姿で出迎える生徒たちの姿を見て、ドイツ団は妙に緊張の面持ちに。お互いに整列してしっかりと挨拶をしていました。練習見学中も場内に漂う緊張感に真剣に食いつく様子。矢が的に当たると部員が「よし!」と気合を入れると、一緒に「よし!」と声出しをしていた。弓を弾く体験では代表でハンナが道着を着て、それぞれ顧問先生から指導を受け、近くの的に弓を打ち込む体験を行いました。その後団員と部員は車座になって英語で国際交流。顧問の先生もその姿に感嘆。その後のシーカヤックでは、1時間半びしょぬれになりながらも楽しんでいました。その後のスイカ割りでは、こんなにおいしいスイカは初めてと口を揃えて喜んでおり、食べ過ぎてしまったようです。その後近所の夜祭会場へ。真夏を堪能した一日となりました。(同上)

7月30日(日) どんな物事にも興味を持ち、積極的に参加してくれる様子に安心した。歴史をさらに掘り下げた、成り立ちや物事の意味合いについて学べたことが、非常に満足だったとのこと。琴体験では笑顔を交えながらも、真剣な様子で取り組んでおり、最後の合奏は見事だった。タイトなスケジュールにも笑顔で参加してくれた為、万全の状態楽しんでくれて良かったと思う。また、ディスカッションではドイツ団側がクイズ番組を模して、テーマ(SDGs)に沿ったクイズゲーム形式のプレゼンを用意してくれていた。指導者のリカルダさんが優先していた、子どもたちの自主性を尊重したディスカッションは今後も継続していくべきだと思う。(千葉県:金子 可奈)

7月31日(月) 揃いのカチューシャや帽子をつけて晴天の下、笑顔で写る様子は非常に楽しげだった。

体調なども問題なく楽しめたようで良かったと思う。

昨日の充実した交流のおかげか、非常に穏やかで楽しげな表情だと写真からも伺えた。(同上)

8月1日(火) 体調も全員問題はなく、無事千葉での日程を終えることが出来て安心した。お別れパーティー

は、合気道で講師を勤めて頂いた五月女先生や、リーダーズクラブの子たちとのひと時を楽しんでくれた。最後に笑顔でみんなと写真を撮ることが出来て良かったと思う。長距離の移動になるバスは、少人数でも旅行バスを借り上げたことが十分な休息に繋がったと思われる。荷物の心配をせず、リラックスした空間は長距離移動の際は必須だと感じた。(同上)

今まで、メールでやりとりをしていたが、初めて通訳者の秋山氏にお会いし、直接お話ができ、少し不安が解消された。ドイツ団を受け入れるにあたってのプログラムや食事等の留意事項の引き継ぎもあり、一安心した。歓迎パーティーでは受入家庭のテーブルごとに通訳の方が会話に入り、すぐに打ち解けた様子で、とても和やかな歓迎会になった。歓談中に折り紙を折るレクリエーションを行い、受入家庭との交流もでき、団員はとても楽しそうに取り組んでいて、大いに盛り上がった。

(群馬県:高橋 舞)

8月2日(水) 部活動の見学・体験においては、教頭先生のご厚意もあり、華道部・書道部・茶道部・弓道部・バレー部の計5つの部活動にご協力いただき、ドイツ団も目を輝かせながらそれぞれの体験に臨んでいた。もともとこの学生との交流というものをドイツ団が楽しみにしていたこともあってか、予定時間を1時間も超過してしまうなど時間が足りなかった。時間の大幅な超過については、プログラムの詰め込み過ぎが原因のため、今後の反省事項とし、次回に活かしたいと思う。(同上)

8月3日(木) 後日、提出された受入家庭感想文を拝見するかぎり、各受入家庭で本人たちの要望に沿うよう過ごしてくれた様子。ドイツ団の要望の中で全員一致したので意外にも「カラオケ」であった。全家庭で「カラオケ」に行ったそうでかなり好評であったよう。(一番印象に残ったことで「カラオケ!」と言うほど。)(同上)

8月4日(金) 宿泊について、「通訳1名」、「男性団員20歳2名」、「女性指導者25歳、女性団員15歳・19歳3名」の計3部屋で調整していたが、彼らの出身地であるヴュルテンベルク州の州令?により、「成人と未成年者は例え同性であっても同部屋での宿泊をしてはならない」ということが現地で発覚した。今回は何とか旅館側にご尽力いただきもう1部屋確保いただけたので何とか切り抜けることができたが、今後また受入機会があった際には1つ事前に確認・検討しなければならない事項としていきたい。(同上)

8月5日(土) 時期的な問題もあり、全体を通して非常に暑い中での受入プログラム実施となり、熱中症始め、

慣れない環境下での体調不良が懸念されたが、特段何事もなく全プログラムを終了することができたのは非常に良かった。食事に関して一番の不安要素で、ベジタリアンであったり、ほとんどのドイツ団の方が魚を食べられなかったりと聞いており、非常に懸念していた部分であるが、魚を食べることにほぼ全ての方が挑戦し、普通に食べられる方もいたので、日本の食文化を体験してもらったという点では非常に良かったと思う。（同上）

山梨県として数年ぶりのドイツ団の受入だったため、彼らからどのような反応があるか不安でした。8月5日は歓迎レセプションのみでしたので、ドイツ団それぞれのキャラクターまでは把握できませんでしたが、楽しんでいただいていたように見受けられました。翻訳アプリや通訳である秋山様に御協力いただき、コミュニケーションを図りました。

（山梨県：雨宮 裕太）

8月6日(日) テーマディスカッションの方法について、これまでパワーポイントを使用して、双方で発表形式により実施をしていましたが、今回、双方がより活発に意見が出せるようファシリテーターを招聘しましたが、ドイツ団としては納得いかない様子でした（事前に日本スポーツ少年団に連絡済み）。理由として、ドイツ団としてはテーマディスカッションを双方のやり方で行い、且つ、大人は介入せず実施するよう指導を受けていたとのことでした。テーマディスカッションは共通のテーマにより意見交換することを目的としており、それぞれのやり方にこだわる必要はないかと考えます。（同上）

8月7日(月) ドイツに限らず、外国人との交流経験が少なかったため、最初は不安が大きかったところへ、悪天候により、最初のプログラムFUJIYAMAツインテラスでの富士山展望の中止を余儀なくされ、先行きが心配になりました。午後からの予定であった富士急ハイランドを繰り上げ、対応した。駐車場到着時に降っていた雨も、入園時には止み、蒸し暑い中での自由行動であったが、十分楽しんでいただけました。宿舎へ移動途中、富士山絶景ポイントである大石公園に立ち寄り、午前に中止した富士山展望を明瞭ではなかったですが楽しめたようです。（笛吹市：土屋 雄一）

8月8日(火) 昼食から桃狩りと食事が続いたり、スケジュールの調整に検討の余地があったと感じました。それでも、朝から夜まで楽しそうに活動されているのが印象的で、安心しました。また、ドイツ団からも交流した方全員へ記念品が贈られ、お互いに良い思い出となりました。この日に限らず、ベジタリアン等、食事が合わない場合、どうしても体調不良の心配があると感じました。何

が食べたいのか、何が食べられるのか、具体的な情報が必要と感じました。（同上）

8月9日(水) 博物館見学では、想像以上に興味を示されていたのに驚きました。また、説明が専門的であり、通訳が難しかったのではないかと感じました。お別れ会には、市関係者だけでなく、県スポーツ協会からもご臨席いただき、成功裏に終了できました。3日間と短い期間ではありましたが、貴重な経験をさせていただきました。言葉が通じないということは想像以上に大変でしたが、充実した3日間でした。県と市の合同受け入れでありましたが、県担当の雨宮さんにはご指導、ご協力をいただき感謝を申し上げます。（同上）

メクレンブルク・ フォアポンメルン

ー関東Ⅱグループ

埼玉県
小鹿野町

茨城県
坂東市



日 程

7月28日(金) 埼玉県(小鹿野町:ホームステイ)

小鹿野町へ移動／秩父ミュージアム散策／歓迎レセプション／小鹿野町表敬訪問／ホストファミリー対面式／歓迎パーティー

7月29日(土) 埼玉県(同上)

おがの・文化くらし体験／お手玉づくり／書道体験／秩父銘仙体験／スポーツ交流(おがの女子バスケットボール)／三味線・琴体験／ドイツ団・スポーツ少年団食事会／担当者・ホストファミリー連絡会

7月30日(日) 埼玉県(同上)

ホストファミリーDAY

7月31日(月) 埼玉県(同上)

高校生とディスカッション／歌舞伎体験／温泉体験

8月 1日(火) 埼玉県(同上)

ムーミンバレーパーク／サイボクハム／川越散策／野球観戦／ミーティング

8月 2日(水) 埼玉県(同上)

八幡平国立公園トレッキング／温泉入浴／観光地見学／施設見学／ミーティング

8月 3日(木) 茨城県(坂東市:ホームステイ)

お別れ会／坂東市へ移動／表敬訪問／歓迎レセプション

8月 4日(金) 茨城県(同上)

野菜収穫体験／そば打ち体験／牛久大仏



ファミリー対面(小鹿野町役場)



お手玉づくり(小鹿野文化センター)



歌舞伎体験(小鹿野文化センター)



竈登山神社にて参拝

8月 5日(土) 茨城県(同上)

スポ少加盟団体との交流(武道体験・カレー作り体験・ボウリング体験)

8月 6日(日) 茨城県(同上)

ホストファミリーDAY

8月 7日(月) 茨城県(同上)

茶道体験／華道体験／テーマディスカッション

8月 8日(火) 茨城県(同上)

筑波山登山(散策)／プリクラ体験／お別れパーティー

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

自然博物館見学／品川プリンスホテルへ



武道体験



テーマディスカッション



剣道クラブ師匠と一緒に(小鹿野町総合運動公園)



茶道体験(岩井公民館)



筑波山神社参拝



ネギ収穫体験(坂東市内農家さん)



最後の昼食

7月28日(金) 西武秩父駅の改札で初めて顔を合わせたときに、これから一週間サポートできるのか、大変不安な気持ちでいっぱいでしたが、彼らは非常に礼儀正しくて、しっかりと受け答えができたので安心しました。小鹿野町役場では、町職員のほとんどが国旗を振って出迎えてくれたので、町全体として歓迎していることが伝わっているようでした。ホストファミリーとの対面式では、お互いにプレゼントを用意していたので、それについて盛り上がっていました。(小鹿野町：田端 祐也)

7月29日(土) 小鹿野町に来町して2日目ということで、緊張している感じが見受けられたが、朝からのプログラムには、女子バスケの子供たちも一緒に参加しており、だんだんと打ち解けているようでした。特にスポーツ交流をしているときには、手加減をしながら一緒に試合をして楽しそうでした。夜に食事会をしている時に、ホストファミリーと通訳さんと、小鹿野町国際交流協会の方で、連絡会(困りごと相談会)を行ったので、各家庭での様子や、問題点などを共有し、対処について話し合いができたのでよかったです。(同上)

7月30日(日) 座禅体験をしたり、買い物や旅行に行ったりと、家庭に任せてのプログラムをさせました。事務局に問合せが来るので、誰か一日対応できるような人がいると安心です。(同上)

7月31日(月) 午前中の高校生との、テーマディスカッションは、お互いの文化交流から始まり、全体的に盛り上がっている様子でした。ただ、お互いにどういう進め方で、内容をもう少し具体的に教えていただければ、高校に説明するのによかったですとおもいます。歌舞伎体験は指導者の方に熱心に指導していただいたので、ドイツ団の方も質問したりと、一生懸命に頑張っていました。温泉体験では、事前にある程度温泉マナーを学習しているようで、問題なく入浴しておりました。疲れがたまってきたと思うので、適宜休みをとるように心がけました。(同上)

8月1日(火) 一日小鹿野から出て、県内の観光施設見学をしました。ムーミンバレーパークでは、buffet形式での昼食をたべましたが、すごい量を食べていたので、今までのお弁当とかが足りなかったのかなと少し心配になりました。好きなものを好きなだけ食べられる方が本当は良かったのかもかもしれません。川越は蔵造りの町並みなどを自由に散策してもらい、お土産などを買い込んでいました。西武ドームでは、ユニフォームをきて、雰囲気味わっている様子でした。(同上)

8月2日(水) 終盤ということもあり、疲れが出てくる

のではと思いきや、充実している気持ちが大きく、「もう少しで終わってしまうのか」という感じであった。また、ホストファミリーとの関係も強くなっているように感じとれた。また、長滞でスタックしている車両を見つけた際の、積極的な行動は、日本人にはあまりないのでは、と感じた。(同上)

8月3日(木) 最終日であったが、あっという間に過ぎてしまった感覚であった。お別れ会等でホストファミリーが触れあっている姿を見ると、準備や段取りがとても大変な労力であったが、この事業を行って本当に良かったと感じた。最初は言葉も通じないのにコミュニケーションが取れるのは不安であったが、全く問題なく過ごすことができた。また、ドイツ団の思考が、日本人の同世代とは全く違うと強く感じた。とても有意義な時間を過ごすことができた。(同上)

早い段階で、ドイツ団の方の好きな食べ物、嫌いな食べ物等が分かれば、ホストファミリーの方に教えることができた。またドイツ団に対し、対応職員及び関係者の名札があった方が良かった。(坂東市：稲毛田 新吾)

8月4日(金) 暑さにより疲労感が見受けられたため、所要所で休憩等を長めに取るようにした。(同上)

8月5日(土) カレー作り体験は、屋外での活動であったため非常に暑かったため、今後は屋内で行うようにしたい。ドイツ団は、カレーが好きだったようでお代わりをしていた団員もいた。また、人数が多数となったため飲物の補充が大変だった。ボウリング体験では、ドイツでもボウリングを行った団員が数名いたため非常にスムーズにできていた。しかし、足のサイズが非常に大きくボウリングシューズのサイズがなかった。(同上)

8月6日(日) やりたいこと等がある団員は、早い段階で相談があれば希望に添える可能性があるため、早めに聞き取りした方が良かった。(同上)

8月7日(月) 足のサイズが大きいため、下駄が履けない団員がいたので事前に確認が必要であった。また、テーマディスカッションでは準備不足があったので、事前に高校生と打合せをし、パワーポイント等を駆使して分かりやすくすべきだった。(同上)

8月8日(火) 筑波山登山にて汗を流したが、団員が着替えの用意をしていなかったため事前に話しておくべきだった。プリクラ体験で寄らせて頂いたショッピングセンターでは、あまり時間に余裕がなかったため、自由時間をもう少し取りたかった。(同上)

8月9日(水) 全ての日程において、活動を詰めすぎたため時間に余裕をもって行動をすることがで

きなかった。また、日程を確定する以前に団員・指導者の身長や足のサイズ、食べ物の好み、日本で行いたいこと等を聞き取りし、教えて頂ければ良かったと思いました。

(同上)

南バーデン

一北信越グループ

石川県
志賀町

富山県
高岡市

長野県
小諸市
上田市

日 程

7月28日(金) 石川県(志賀町:ホームステイ)

志賀町へ移動／歓迎昼食会／金沢市見学／オリエンテーション／町長表敬訪問／ホストファミリーとの歓迎夕食会

7月29日(土) 石川県(同上)

遊覧船観光／相撲体験／シャワー・着替え／柔道練習試合見学／太鼓体験／ホストファミリープログラム

7月30日(日) 石川県(同上)

ホストファミリープログラム

7月31日(月) 石川県(志賀町:ロイヤルホテル能登)

マリンスポーツ体験(バナナボート・ソファボート・サップ等)／領家町会館・富来八幡神社観光／貝細工体験／さよならパーティー

8月 1日(火) 富山県(高岡市:角久旅館)

高岡市へ移動／瑞龍寺・古城公園・高岡大仏観光／歓迎夕食会

8月 2日(水) 富山県(同上)

ものづくり体験／ティーボール／ディスカッション／柔道

8月 3日(木) 富山県(同上)

海水浴／ビーチバレーボール／スイカ割り／座禅体験／勝興寺見学／BBQ／キャンプファイヤー

8月 4日(金) 富山県(同上)

ソフトテニス／イオンモールで買い物／花火大会



兼六園散策



梢家(ホストファミリー)



相撲体験(柴木運動公園 角力場)



能作ものづくり体験(株式会社能作)

**8月 5日(土) 長野県(小諸市:小諸グランドキャッ
スルホテル)**

小諸市へ移動／市長表敬訪問／懐古園散策／小諸
市民祭り(浴衣・ハッピー)

8月 6日(日) 長野県(小諸市:ホームステイ)

ドイツ団ダンス披露・レスリング見学／小諸高校レスリン
グ部員とディスカッション／弓道体験／対面式／

8月 7日(月) 長野県(上田市:上田第一ホテル)

上田市へ移動／歓迎会／別所温泉街散策／市長表
敬訪問

8月 8日(火) 長野県(上田市:民泊 おみやど)

乗馬体験会(厚紙鎧着)／BBQ／習字体験／夕食作
り／手持ち花火

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

花瓶敷体験会／お別れ会／品川プリンスホテルへ



甲冑隊と一緒に



花火法被姿(庄川 高岡大橋上流河川敷公園)



柔道(富山県営高岡武道館)



キャンプファイヤー(上和田緑地キャンプ場)



北向観音足湯体験



上田乗馬体験(上田乗馬倶楽部)



甲冑を着て(左同)

7月28日(金) 新幹線を降りて、バスに乗り込むまでがスムーズに行き、キャリーケース運搬用に、バスとは別にハイエースを用意しておいて良かったなと思いました。食事が一番の心配どころでしたが、皆積極的に日本食に挑戦していました。箸の使い方も上手で驚きました。歓迎会では、ホストファミリーと初対面し、会話に苦戦しているファミリーもいましたが、ジェスチャーや翻訳アプリを使って、何とかコミュニケーションが取れていた様子でした。(志賀町:村中 未蘭)

7月29日(土) スイカの食べっぷりには驚きました。柔道見学は急遽きまり、バタバタしましたが、練習試合の様子を観られて良かったです。ただ、事前に教室の方にスケジュールを聞いていれば、練習試合に参加するプログラムを作れたかなと反省しています。(同上)

7月30日(日) ホストファミリーの皆様には、色々プログラムを考えて頂き、本当に感謝しています。暑さはありませんでしたが、皆さん大体のプログラムは実行できたようで安心しました。(同上)

7月31日(月) マリンスポーツでは、休憩なしで楽しむドイツ団に少し心配でしたが、満足した様子が見られて良かったです。スイカ割りも初めての体験だったようで、笑顔で楽しんでくれました。スイカがすぐに割れてしまったので、軽い棒で行えばよかったかもしれません。さよならパーティーでは、ドイツ団の出し物で盛り上がりました。ドイツ団とホストファミリーとの距離も縮まっており、初日に見た風景とはまた違うものが見られて、嬉しかったです。ホストファミリーの皆様には、感謝の気持ちでいっぱいです。(同上)

8月1日(火) 皆疲れた様子もなく、笑顔で高岡市へと出発しました。マクシミリアンは、ホストファミリーに買ってもらった下駄を、嬉しそうに履いていました。(同上)

とても暑い日となったため、予定よりもたくさん飲み物を追加した。飲み物を冷やすための氷を、身体を冷やすためにドイツ団に渡すと大好評だった。スポーツ飲料も準備していたが好みではなかったようで、飲料水と炭酸水に変更した。歓迎夕食会では柔道だけでなく、なわとび・ダンス・ボール投げ・綱引きなども披露してくれて賑やかな会となった。(高岡市:砺波 美沙子)

8月2日(水) ものづくり体験では専門用語や馴染みのない道具が多く作業工程も少し難しかったが一生懸命に作業をしていて、出来上がりを見て喜んでいる様子が見られた。ティーボールでは、ドイツ団に向けて日本団員が大きな声で「いけー!」「ホームランダー!!」と声援を送っている姿を見て、言葉は通じなくても全力で

応援している姿がとてもいいなと思った。ティーボールが盛り上がったため、時間をオーバーしてしまった。そのため、ディスカッションの時間が短くなり、予定していた内容も一部変更となった。柔道では、ドイツ団が積極的に稽古に打ち込んでいたのでスケジュールに組み入れてよかった。(同上)

8月3日(木) 活動を詰め込みすぎドイツ団員に疲れがみられたため、もう少し余裕をもったスケジュールを組みよかったと思った。どの活動にも地元の少年団、高校生と一緒に活動してくれてよかった。やはり、団員同士で会話をし活動している時がドイツ団も楽しそうだった。(同上)

8月4日(金) ソフトテニスは屋外を予定していたが猛暑日となったため、雨天対応の体育館に変更し、冷房をかけての活動に変更した。午後屋外で船の見学を予定していたが、あまりの暑さに予定を変更し、午後はイオンモールで買い物と自由時間とした。買い物したり、デザートを食べたりしてとてもいい笑顔が見られた。花火大会では、法被を着用した。夜でも暑かったので着用しなくてもいいかと思ったが、ドイツ団は是非、着たい!とのことだったので、やはり日本文化を味わいたいのかと思った。法被の着用のおかげで、人ごみの中でも分かりやすかった。法被を着たり、目の前で花火を見たりして良い体験ができたと思う。(同上)

8月5日(土) 暑さで少し疲れがあるように思えたが、皆時間通りに新幹線に乗ることができ、本部長を含め交流した指導者や団員も来てくれて新幹線の見送りすることができてよかった。(同上)

ドカンショは、小諸市スポーツ少年団に参加者を募り、野球・柔道・駅伝3単位団が参加し、関係者とドイツ団含め70名になりました。小諸は、スポーツ団の構成が小学生が75%で、今回の参加は全員小学生です。ドイツ団員との交流は、本来はディスカッション・スポーツ体験での交流が良い機会とは思いますが、小学生では年齢的な違いがあり、楽しく参加でき交流ができるドカンショにしました。しかし、同時交流の将来ドイツに派遣される(希望する)団員は、小諸市スポーツ少年団に高校生登録者がいませんので、今後の一番の課題です。

(小諸市:小林 友喜)

8月6日(日) ディスカッションは、小諸スポーツ少年団は高校生が登録(中学生は若干登録あり)しておりますので、本部長の力でレスリング合宿中の高校生8名との機会が実現出来ました。一時間ドイツ団指導者の助言を受け3組に分かれ、通訳・翻訳アプリを利用し共

通のテーマの答えが出たようでした。ドイツ団の最初150名の生徒の前でのダンス披露は、ドイツの文化と日本の柔道を組み合わせたインパクトの強いものでした。日本の高校生にも強い印象が残ったでしょう。弓道体験は体育協会弓道部部長に依頼し実施して頂いたが、指導者の助手としてドイツ団員と同じ高校生3人に参加して頂き、弓で矢を的にあてる所作を見せてもらい、袴の着付けから矢を射るお手伝いをして頂き、友好・親善を深めることが出来ました。（同上）

8月7日(月) ホームステイは、高校生が最低1名いる家庭を探すのに大変苦勞しました。ホームステイの募集は、スポーツ少年団と、こもろ観光局に依頼しました。早速少年団の理事の家庭の高校生が是非ドイツ団員と交流したいとのことで一家族見つかりましたが、観光局紹介の3家族には、高校生がいませんでした。高校生のいる家庭を観光局の担当の方に、1ヵ月間八方手を尽くして探して頂き、何とか小諸市と東御市で見つけて頂きました。また、ドイツ団は日程等について必ず要望が出るので、余裕を持った計画が必要でした。

〈要望〉①交付金のアップ②事前(2ヵ月)にディスカッションの具体的方法の連絡③弓道体験で袴の着付けで事前に団員の身長と足のサイズ連絡

今回体育協会会長、スポーツ少年団本部長・関係者、市スポーツ課の全面協力・応援で無事終了できました。終盤にきているので、夕食後はゆっくりしてもらうように自由時間としました。枝豆、鶏のから揚げ、スイカを初めて食べたようで、とてもはまったようです。

(小諸市:小林 友喜、上田市:小林 邦朗)

8月8日(火) 乗馬体験や習字体験をととても真剣に行っていました。温泉が好きなことには驚きましたがサウナや水風呂を堪能していました。(上田市:小林 邦朗)

8月9日(水) 指導者、団員がすべてのプログラムを無事終えられたことが良かったです。とてもまとまりがある素晴らしいグループであつたと感じました。みんなが仲良く、協力しながらなれないことに一生懸命取り組んでいたと思います。（同上）

ヘッセン

—東海グループ—

岐阜県
大垣市

静岡県
菊川市

三重県
明和町

日程

7月28日(金) 静岡県(菊川市:ホームステイ)

菊川市へ移動／常葉大学付属菊川高等学校施設見学(書道部・華道部交流)／市長表敬訪問／ウェルカムレセプション

7月29日(土) 静岡県(同上)

小笠高校弓道試射見学／剣道部・柔道部交流／岳洋中学校バスケットボール交流／さがら子生まれ温泉

7月30日(日) 静岡県(同上)

ファミリーデー

7月31日(月) 静岡県(同上)

お茶体験(手揉み・煎れ方体験)／アーチェリー体験／ウォーターパーク(つま恋)／さよならパーティー

8月 1日(火) 三重県(明和町:ホームステイ)

引き渡し式／明和町へ移動／内宮参拝／おはらい町・おかげ横丁散策／顔合わせ式(ホストファミリー)

8月 2日(水) 三重県(同上)

忍者衣装着用(だんじり会館)／伊賀みひも作体験(伝承館)

8月 3日(木) 三重県(同上)

海水浴／BBQ／プール水泳／ミニゴルフ体験／ディスカッション／祭り囃し方たちと流しソーメン／バスケット交流

8月 4日(金) 三重県(同上)

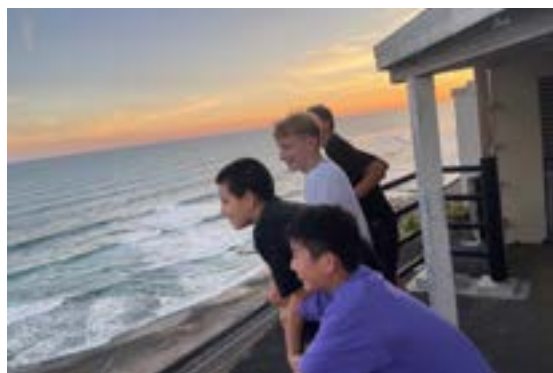
ナガシマスパーランド／鳥羽湾遊覧船クルーズ／伊勢志摩名所観光／さよならパーティー



柔道(静岡県立小笠高等学校)



お茶体験(菊川市茶業振興センター サエリア)



ファミリーデー



ディスカッション(大淀西海岸ムーンビーチキャンプ場)

8月 5日(土) 岐阜県(大垣市:ホームステイ)

大垣市へ移動／サツキレオクラブ交流会(習字体験・かき氷・スイカ)／大垣市剣道協会居合道見学・体験／対面式(ホストファミリー)

8月 6日(日) 岐阜県(同上)

民泊プログラム／MJバスケットクラブ交流(一部団員)

8月 7日(月) 岐阜県(同上)

畳作り体験(大垣畳商組合)／弓道体験(大垣市弓道協会)／自由時間(イオン大垣)

8月 8日(火) 岐阜県(同上)

市長表敬訪問／平野学園清凌高等学校きもの茶道体験／枺づくり体験／和菓子作り体験／アクアウォーク大垣自由時間／さよならパーティー

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

大垣城・軸(山車)見学／品川プリンスホテルへ



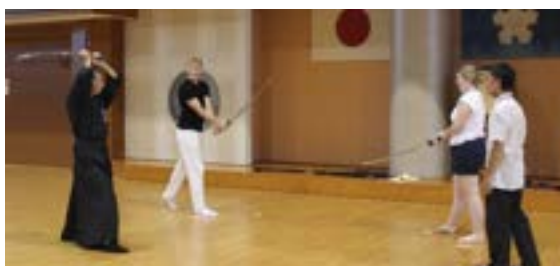
大垣市へ最後の見送り(いつきのみや地域交流センター)



習字(大垣市武道館)



地元ケーブルテレビインタビュー



居合道体験(大垣市武道館)



斎宮小学校ミニバスケット少年団との交流後集合写真



弓道体験(大垣市武道館)

7月28日(金) 交流受け入れに当り、初日がとても重要であると考えていました。常葉高等学校での文化交流は、ひとつの教室で行い、とても暑い日でしたが冷房も効いており良かったです。特に、出迎えからお別れまで、常葉高校の学生さんが笑顔で楽しんで交流していただき、おもてなしの気持ちが伝わりました。市長表敬訪問は、人数が多く市長応接室では狭いため、お忙しい中、市長が東館までお越しいたいただき、菊川茶のお土産もいただき感謝しています。休憩も兼ねての夕食では、「ザ・日本食」をテーマにJA遠州夢咲の協力で、おにぎり、味噌汁、サラダなど和室での提供でしたが、全員で楽しそうに食事、歓談していました。お稲荷が人気があり少し驚きました。ウェルカムレセプションも含め、概ね予定通りに終了しました。(菊川市:深谷 泰司)

7月29日(土) スポーツ交流ということで、大変暑い中、会場も武道場、体育館でしたので、怪我と熱中症を心配していました。朝、冷水タオル(首かけ)と緑茶ペットボトルを渡しました。自分でも水筒を持っていましたが、飲料と冷却タオルシートは、全日程の中で一番消費、使用しました。また、柔道着の借用に際し、御前崎市浜岡中学校より借用しましたが大変助かりました。バスケットボールでは、休憩中も練習していて、改めてバスケットボールが好きなのだと感じました。さがら子生まれ温泉では、入浴で汗を落とすことができ、サウナも楽しんだようでした。湯上りでリラックスして1日の疲れが少しは取れたかと思います。(同上)

7月30日(日) 3日目(中日)に、ファミリーデーが設定できたことは日程的にもとても良かったです。ホームステイ先ファミリーからの万一の緊急連絡に対応するため、スポーツ協会事務室に職員が交代(AM・PM)で待機しましたが、連絡は一切ありませんでした。また、飲料、氷などの備品の買い出しや、改めて明日からの準備体制を整えることが出き、職員にとってもとても良い休養日となりました。(同上)

7月31日(月) 菊川市としてお茶のPRは欠かせない、絶対入れようと考え、JA遠州夢咲にお願いしお茶体験を設定していただきました。また、体験では手揉み保存会の方にも丁寧にご指導いただき感謝しています。プールは当初からスケジュールに入れるつもりで計画をしました。菊川市内には適切な施設が無いため、掛川市ですが移動に時間が掛からなく、移動なくパーティーも出来るつま恋を選択しました。こちらがドイツの食文化も体験したく、話がはずむと考え、あえてドイツ料理を提供させていただきました。全員、食事と話が大変盛り上が

っていました。(同上)

8月1日(火) 三重県さんとは、事前に連絡方法等を確認、打合せをしていたため、大型バスの菊川ICからの誘導、引き渡し式、出発の交通整理までほぼ予定通りにできました。余談ですが、子供が別れを惜しんで泣いているのを見てうろときてしまいました。(笑)※連絡ノートを忘れる家庭があったが、集合時間を早めにしたのと、近所であったため特に支障は無かった。《全体を通して》実行委員会を立ち上げ、静岡県、菊川市、学校、JA等、関係機関の全面的サポートをいただき、暑い中でしたが、怪我や病気、事故も無く、無事に務めることができました。ありがとうございました。(同上)

菊川市との別れの場面を見ていて、明和町においても同様な場面がみられるようにしっかりと受け入れようという気持ちが高まりました。ドイツ団の指導者が急遽変更になり不安もありましたが、全体の副団長であったモリスさんがこの団の指導者として来ていただき、とてもしっかりした方で、親しみやすく安心して受け入れることができました。通訳さんに、ドイツの団員たちは水遊びが好きと事前に聞いていましたが、五十鈴川に入りたいとの要望に応えたことは、ドイツ団との信頼関係につながったと思います。事前の日程表に、顔合わせ式の記載がなく、岩間通訳さんにはとても迷惑をかけましたが、ドイツ団の臨機応変な対応に感心させられました。挨拶の内容を通訳していただいたが、急遽挨拶をすることになった団員も堂々とあいさつしてくれ、ドイツの方々の大人としての成長を感じることができました。

(明和町:濱口 行生)

8月2日(水) 伊賀市で1日忍者に変身して過ごし、日本の伝統に触れあいました。忍者衣装では、ナルト、ワンピース、ドラゴンボールなどなどのモノマネをし、楽しんでいました。一部忍者では無いような...海外でも日本の漫画・アニメ文化は人気と知っていましたが、ドイツ団の様子をみて実感しました。モクモクでは、バイク方式で昼食をとりました。敷地内移動中には他団体の大学生とフレンドリーに写真撮影など交流を行い、また偶然あった竹馬やなわとびなど実践して注目を浴びていました。昼食後は忍者屋敷に行き、忍者ショーで多くの忍術に盛り上がっていました。伊賀忍者を感じてもらえたと思います。(同上)

8月3日(木) 海では、とても活発に活動をしていました。少し波が高く不安ではありましたが監視を行いました。リーダー会と地元の大学生と海水浴・BBQで交流し、打ち解けていきました。ディスカッションでは、SDGSをテ

ーマに日本側は、リーダー会と大学生の合同で発表を行い、スポーツ少年団の活動や地元での活動など事例から議論を展開しました。ドイツ団側は、実際に日本に来て感じたことに問題提起を行いました。例えば、スーパーでのトレーの乱用など普段からあたりまえと思っていたことに指摘があり感心しました。この夜に、ホストファミリーが協力して、ミニバスケットチームとの交流を行ったが、その際、団員の1名がバスケットゴールのボードでケガをして、ホストファミリーの一員である看護師さんに手当を受けたとの連絡が入ったが、出血も止まり受診の必要はないということであったのでそのまま様子を見てもらうことにしました。このことについては、事前の研修会で連絡手段の確認ができていたため、スムーズに対応ができたと思います。(同上)

8月4日(金) ドイツ団の一人ひとりが、さよならパーティー会場に入ってきたとき、とても良い表情をしていました。今日一日は、ホストファミリーの方々楽しい時間を過ごしたことがよくわかりました。さよならパーティーでは、ホストファミリーの子どもたちと楽しそうに話したり食事をしたりしている様子が印象的でした。パーティー途中のドイツ団のスピーチの中で、ホストファミリーの子どもの誕生日の紹介をしてくれ、会場全員でパースディソングを歌い、とても感激しました。また、ドイツ団にとっても初めての音色とおもわれる明和町の三味線の演奏では、ドイツ団からアンコールの声も上がりよい文化交流になったと思います。(同上)

8月5日(土) 受入時に、心配していたことがまったく嘘のようにホストファミリーとドイツ団員との交流が深まったことが感じられる別れの時であった。ホストファミリーの皆さんには、受入前から様々な準備をしていただき、感謝の気持ちでいっぱいである。ホストファミリーにとって、一番心配されたことは食事の面である。今回の団員には、ベジタリアンやひどいアレルギーをもった団員はいなかったが、朝食は簡単に済ませるなどドイツ人の普段の食習慣などの説明が必要だったと思われる。受け入れた家庭の子どもたちにとって、とても良い体験になったという感想が多くみられ、今後もこの交流を是非とも続けてほしいという意見が多く寄せられた。今回、明和町が4回目の受入れを行いますが、他市町のスポーツ少年団も、この貴重な体験を積極的に受け入れ、スポーツ少年団活動の活性化につなげていってほしいと思います。(同上)

全体的にドイツ団への説明が足りておらず、ドイツ団はストレスがあったと感じた。通訳を通じて話をする分、

時間はかかるがそれでもしっかりと事細かに指示をすることがドイツ団にとってもストレスなくプログラムを行えると感じた。プログラム自体は、青少年同士の交流ができたのは良いことだと感じた。しかしながら、もう少し時間を設けたほうが有意義な交流ができると感じた。スイカは思いのほか好評であり、移動時間も長くお疲れのところ、一息つく時間が取れていたと感じた。居合道は見学のみならず模擬刀を振れたことは、ドイツ団にとって良い経験になったと感じた。模擬刀を持てるとなった時のドイツ団員の嬉しそうな顔が見られて良かった。対面式ではドイツ団も慣れていることもあり、スムーズに進められた印象である。(大垣市:遠藤 剣)

8月6日(日) バスケットボール交流は、急遽ではあったが、受け入れしていただいた団体や送迎をしてもらった受入家庭の方に感謝するとともに、ドイツ団員が好きなスポーツをし、楽しそうにプレーしている姿が見られて良かった。(同上)

8月7日(月) まず、受入家庭の急遽変更にご協力いただいた家庭には感謝しかない。このようなトラブルも今後の参考事例となると感じた。昼作成は普段触れ慣れない物を作成するにあたり、興味を持って体験でき、良いお土産ができたと感じる。弓道体験では、ドイツ団が普段見ているアーチェリーとの違いも楽しんでいただけたと感じる。実際に的にあたる感覚も味わってもらえたことで楽しさが倍増したと感じる。イオン大垣の自由時間は、様々なプログラムを行ったドイツ団にとって気楽に過ごせる大切な時間だと感じた。(同上)

8月8日(火) 市長表敬は通訳を介して実施されたため、普段より長い時間となった。想定内であったが、もう少し短時間でできるよう今後、調整が必要かと思われる。本日のプログラム全体を通して、和食が多かった(昼食、和菓子作り、夕食)のが反省点である。日本を満喫していただくために良かれと思って和食にしたが、今回のドイツ団が和食を食べられない団員も多かったこともあり、ドイツ団もストレスを感じた部分があったと感じた。全体のプログラムを通じて、和食も一部取り入れつつ、自分で選択できる食事を多くする必要があった。一方、体験プログラムについては、きものや栞づくりなどドイツでは中々触れられない日本の文化を体験していただき、楽しんで体験している姿が見れて良かった。(同上)

8月9日(水) 急な雨によりプログラムの開始時間が遅くなってしまった。事前準備として、傘の準備などしておく必要があった。また、日本特有の蒸し暑さにより集中力を奪われ、プログラムに望んでしまったことは反省

点である。状況によって車移動などの判断が必要であったと感じた。しかし、最後に笑顔でいてもらえたことは、充実した時間を大垣市で過ごせてもらえた証明だと感じる。

（同上）

体操Ⅱ

一近畿Ⅰグループ



神戸市役所表敬訪問



書道体験出来栄の披露(翠鳳書道教室)



柔道体験(王子スポーツセンター)

日程

7月28日(金) 兵庫県(神戸市:ホームステイ)

神戸市へ移動/表敬訪問/歓迎レセプション

7月29日(土) 兵庫県(同上)

バス観光(布引ハーブ園・中華街・水族館)

7月30日(日) 兵庫県(同上)

書道体験/BBQ/園内散策(フルーツフラワーパーク)

7月31日(月) 兵庫県(同上)

柔道体験/空手道体験/さよならパーティー

8月 1日(火) 京都府(城陽市:ロゴスランド プライムイン城陽)

城陽市へ移動/表敬訪問/テーマディスカッション/歓迎パーティー

8月 2日(水) 京都府(同上)

野球・ソフトボール・バレーボール・バドミントン体験/茶道体験/陶芸体験/温泉入浴

8月 3日(木) 京都府(同上)

ホストファミリープログラム(ニュースポーツ・料理体験等)

8月 4日(金) 京都府(同上)

体操交流/平等院見学・自由時間/さよならパーティー



ディスカッション(ロゴスランド)

8月 5日(土) 滋賀県(彦根市:サンルート彦根)

彦根市へ移動／歓迎セレモニー／平和堂HATOスタジアム見学／万灯祭(多賀大社)

8月 6日(日) 滋賀県(彦根市:彦根 キャッスルリゾート&スパ)

彦根城見学／キャッスルロード散策／ファンタジア体操教室／ゆかたまつり

8月 7日(月) 滋賀県(同上)

セーリング体験／弓道体験／なぎなた体験

8月 8日(火) 滋賀県(彦根市:グリーンホテルYes 近江八幡)

ディスカッション／ブルーメルの丘自由行動／さよならパーティー(BBQ)

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

品川プリンスホテルへ



万灯祭(多賀大社)



文化体験(文化パーク城陽)



彦根城玄宮園



スポーツ体験(城陽市総合運動公園)



弓道的中/練習(プロシードアリーナHIKONE)

7月28日(金) ホストファミリー側も積極的にコミュニケーションを取ろうとしており、安心した。

(神戸市:高田 幸博)

7月29日(土) 暑さに参ることなく、神戸の名所めぐりを楽しんでいた。

(同上)

7月30日(日) 書道には、かなり真剣に取り組み、フルーツフラワーパークでは楽しんでいた。

(同上)

7月31日(月) 担当者は柔道講師も兼ねており、業務に忙殺されて、視察に来た団長団をもてなしする余裕が無かった。

(同上)

8月1日(火) 熱中症対策に重点を置き、最後まで気を抜かず心身ともに良好な状態で引き継ぐことが出来た。

(同上)

兵庫県からのドイツ団引継ぎもスムーズに行うことができた。テーマディスカッションでは日本側の参加者とも仲良くなり親交を深めている様子であった。歓迎パーティーには3日目にお世話になるホストファミリーを招待し、コミュニケーションを図る機会があったことで後のプログラムにつなげることができた。

(城陽市:吉川 篤基)

8月2日(水) スポーツ体験では大きく体調を崩す団員がいなかったのが良かった。茶道体験では茶道の成り立ちなど、深いところまで質問しており、関心の高さが伺えた。夕食では好きなメニューを選んでいただくことができたので日本の食事を楽しんでいただくことができたと思う。

(同上)

8月3日(木) この日は団長団が帯同していたことから役員とグループリーダーは団長団とともに行動していた。午後に団長団が役員との別行動を希望し、団長団とグループリーダーのみでの行動となった。その後、団長団の許可のもとグループリーダーが単独で行動することとなった、集合の時間になってもグループリーダーが現れず、プログラムの終了が大変遅れた。このグループリーダーの行動は大変無責任であり、受入側としては責任を取れない問題であると感じている。

(同上)

8月4日(金) 体操を専門としているグループと事前に聞いていたが実際には専門種目は様々であった。ドイツ団の方も演技をみせてくださり、日本の団員達も喜んでいる様子であった。平等院の見学では予想以上に関心を持っていただけだと感じている。

(同上)

8月5日(土) 無事に滋賀県へ引き継ぐことができた。

(同上)

移動日であったが、日本の夏祭りをメニューに入れたのはよかった。全行程終了の際印象に残ったプログラムを聞くと、「万灯祭」がよかったという声が多かった。人

出が多く、迷子等が心配になるが夏の時期だと、祭りや花火等のイベントにうまく日程が合うと喜んでもらえるプログラムが組めると感じた。ただ、土曜日であったため市長への表敬訪問は実施できず、神戸や城陽市で歓迎を受けてこられたと思うが十分意を尽くせたか気になるところである。また、たいへん暑い時期であり3つ目の訪問県ということで団員の健康面も心配である。

(彦根市:北村 功)

8月6日(日) この時期の受入は、暑さと疲労による熱中症が心配である。健康管理は任せられる年齢の団員とはいえ母国との気候の違いは大きく受入時期も考慮しなければならないと感じた。5月8日に提出したプログラムから午後は変更したのであるが、変更したプログラムが滋賀県→京都→通訳→ドイツ団へと伝わっておらず、団員が「○○のプログラムは？なくなったの？」と通訳に話していたようであった。情報の共有が大切であると感じた。午後から体操教室へ出向いたが、団員が取り組んでいる競技種目をこちらの体験種目に入れておくと、団員も積極的に競技者と関わっていけると感じた。「ゆかたまつり」も伝統的な祭りではないが雰囲気を楽しんでいた。

(同上)

8月7日(月) 先日体調を心配した団員も早めにホテルで休んだこともあり元気を取りもどすことができた。同行できない団員が出ていたら当方のスタッフも少なく対応しかねる場面になったかもしれない。スポーツを体験していくことや日本独自の競技を行うことは団員にとって貴重な経験となった様に感じた。比較的時間にはゆとりを持たせて設定したつもりであったヨットでのクルージングは準備から後始末まで考えるともっと時間も必要であった様に感じる。実施前は団員たちが疲れてしまうのではないかと心配する声も多かったが意欲的で多くのメニューを楽しんでくれた。ただ施設や競技者の方の大会日程など、こちらの都合だけでは決めていくことができないので調整には苦慮した。

(同上)

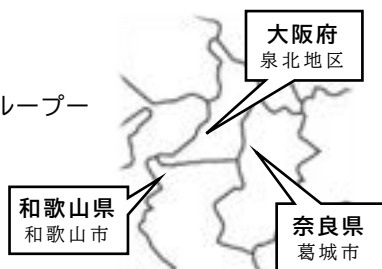
8月8日(火) 事前にいただいていたディスカッションのテーマについて紙面で説明を行っていった際「そこまで深いディスカッションになる自信が無い」ということで敬遠されるところが多かった。テーマも大事であるがその説明についてはもっとハードルを下げて日本の高校生が交流を持ちたいと思う表現にして提示していただけるように変えていった方がよいと感じた。事前にいただいた「ディスカッションテーマに関する情報」は当方にとって難解であるのと同時に日本の参加者との打ち合わせは1回程度であるので深い内容のディスカッションは難しい。

高校生は自主的にパワーポイントを作ってくれました。高校生との打ち合わせの際にパソコンは使えるか問われていたので用意をした。ただ、ドイツ団については聞いていなかったが、当日USBを使いたいといわれたので準備物は明確に伝えていただきたい。（同上）

8月9日(水) 最終日まで時間をまもり熱心に活動してくれる団長・団員であったので当方も心配することも少なく予定通りの日程を消化することができた。コロナの影響も考えホームステイを計画しなかったが受け入れ家庭を見つけることから行わなければならない難しさや受け入れ家庭との調整等大きな困難となる様に思われる。ホームステイの意義もわかるがホームステイを研修の狙いのひとつとしホームステイを必ず実施しなければならないとするならば、ホームステイを計画・調整するのは旅行業者等に任していただきたい。また、4月から行程を組み関係各所と連絡調整を取っていたがスポーツ協会の力を借り、各種スポーツ団体の協力を得られたことに感謝します。（同上）

ベルリン

一近畿Ⅱグループ



日程

7月28日(金) 和歌山県(和歌山市:ワカヤマ第2富士ホテル)

和歌山市へ移動／表敬訪問／和歌山城散策

7月29日(土) 和歌山県(同上)

三味線体験／お茶体験／剣道体験

7月30日(日) 和歌山県(同上)

紀州東照宮／ディスカッション／紀三井寺見学／蒸しダイニング

7月31日(月) 和歌山県(同上)

海水浴／BBQ／わかやまスポーツ伝承館見学／お別れ交流会

8月 1日(火) 奈良県(葛城市:THE・KASHIHARA)

葛城市へ移動／受入式・表敬訪問／オリエンテーション

8月 2日(水) 奈良県(同上)

市スポーツ少年団(バドミントン部・ドッジボール部)・市体育協会(合気道クラブ)と交流／合気道体験／バドミントン・ドッジボール交流試合／ディスカッション／イオンモール橿原自由行動

8月 3日(木) 奈良県(同上)

餅つき体験・見学／東大寺参拝／奈良市観光／ならまち散策

8月 4日(金) 奈良県(葛城市:葛城市コミュニティセンター)

葛城市相撲館けはや座見学・相撲体験／當麻寺観光(抹茶体験)／梅乃宿見学・梅シロップ作り体験／さよならパーティー



市長・市議会議長表敬訪問(和歌山市役所)



剣道体験(和歌山市立砂山小学校)



三味線体験(先生ご自宅)



海水浴(片男波海水浴場)

8月 5日(土) 大阪府(泉北地区:大阪国際ユースホテル)

泉北地区へ移動／あべのハルカス16階の庭園見学／
空手道見学・体験／ボッチャ体験／ホームパーティー

8月 6日(日) 大阪府(同上)

高石市消防団の訓練風景見学／だんじり見学・体験
／ボート体験／羽衣駅周辺七夕まつり見学／グループ
ディスカッション

8月 7日(月) 大阪府(同上)

市長表敬訪問／部活動体験会／たこやきパーティー／
部活動体験／カラオケ体験／工場夜景見学

8月 8日(火) 大阪府(同上)

大阪市内観光／戎橋・心斎橋 観光(自由行動)／さ
よならパーティー

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

品川プリンスホテルへ



難波散策



相撲体験(葛城市相撲館けはや座)



だんじり体験(綾井自治会館)



ディスカッション(大阪国際ユースホテル)



消防放水体験(高石市旧図書館前)

7月28日(金) コロナの影響で3年延びた本市でのドイツ団の受入がいよいよ始まりました。初めは、不安もありましたが、駅でのオリエンテーションでこちらの説明を笑顔でワクワクしながら聞いてくれたのでとても安心しました。表敬訪問では、素晴らしい内容の挨拶、自作の絵を贈呈する等真面目に準備してきてくれたことが伺えました。和歌山城でも、本隊は杖をつきながら元気に天守閣まで登って歴史と文化を学んでくれたことでしょう。この日、体調不良で別行動となった指導者は翻訳アプリを使うことで症状を知り、対応することができました(ホテルで翌日まで療養)。(和歌山市:西本 裕輝)

7月29日(土) 午前中は、三味線を体験しました。ドイツ団は呑み込みがすごく早く、先生から持ち方や弾き方の説明を受け、すぐに習得する姿には驚きました。最後には、先生が用意した楽譜を見ながら、1曲息ぴったりに演奏できるほどになり、楽しんでくれました。また、正座でチャレンジした団員が、足がしびれて苦笑いしている姿にほっこりしました。剣道体験では、ワクワクしながら道着を着て、みんな一生懸命に体験していました。熱中症の心配をしていましたが、無事楽しく体験を終えてくれて良かったです。夜ご飯では、誕生日の子にサプライズでケーキをプレゼント。今日一番の笑顔が見られて大成功でした。(同上)

7月30日(日) 体調不良で別行動となっていた指導者も今日から復活し、初めからみんなでエンジン全開でした。東照宮では、全員が急な階段を登りきるなど元気でいっぱいでした。本殿の説明を聞きながら描かれた絵などに興味津々でした。また、甲冑も着せてもらい、昨日剣道体験で学んだ握り方を思い出しながら写真撮影をして、楽しそうでした。ディスカッションでは、ドイツ団の要望で、2グループに分かれて行いました、お互いの文化の違い、スポーツの違いを共有し合い、SDGsについて考えていました。初めは、通訳が一人しかいないのでうまくいか不安でしたが、翻訳アプリや実際の活動の映像や写真を見せ合うなどうまくコミュニケーションをとっていたのでほっとしました。(同上)

7月31日(月) いよいよ本市での主なプログラムは最後の日となりました。海水浴では、楽しみにしていたのか、終始笑顔で泳いでいました。地引網体験の時間になるともう海水浴が終わりかと悲しそうにしていました。次は、本市少年団と共に地引網でとれた魚などの職を満喫していました。本市の子供たちと一緒にたくさん写真も撮っていて、ドイツ団にも本市少年団にもいい交流となり良かったです。その後、もう一度海水浴を行うことに

しました。2回目ですが、余程海水浴が楽しいのか最後まで遊びつくしていました。4日目でも体力が有り余っていました。夜のお別れ交流会では、手巻き寿司を体験し、同じテーブルの子どもたちに教わりながら思い思いにつくって食べている姿は、これも日独お互いにいい経験になったと思います。また、ドイツ団で準備したダンスは会場みんなで参加し大盛り上がりを見せていました。いよいよ明日でお別れです。(同上)

8月1日(火) あっという間の5日間でした。初めは、どうなるか想像もつきませんでした。何より、ドイツ団のみんなに楽しんでもらえて良かったです。(同上)

受入式ではしっかりと挨拶や自己紹介をされており、素行も良く一安心。とりあえず、自分のスマートフォンに翻訳アプリをインストールしておきました。ヴィーガンの女性が一人いるとの情報が事前にあったので、食事面が心配。到着日1人で通訳の方と和歌山からの随行者とともに昼食に行きましたが、通訳を通してしか会話ができず、和歌山の随行者は英語で会話されていたことに感動しました。(葛城市:西井 満良 他)

8月2日(水) 今日は市内のスポーツ少年団や体育協会のクラブ、中学生との交流会。子どもたちのとの交流は私たちが心配するほどのことはなく、年齢は違えどあっという間にドイツ団と仲良くなってくれたことに一安心。イオンモール橿原では、ドイツ団の一人(キラ・パルケさん)のスーツケースが壊れたので、買い物に同行して壊れたスーツケースと引き換えで10%割引があったので翌朝届けることで割引交渉ができ役に立った気持ちになりました。(同上)

8月3日(木) 屋外でも餅つき体験、奈良市の観光と日中かなりの高温となる中での屋外イベントで、熱中症など発生しないよう祈っていたが、随行者も含めて誰もならずに一安心。ホテルに訪問してヤコブ・ライツェンシュタインと通訳アプリで会話をしました。体温計をフロントで借り、身振りで使い方を説明しました。不思議なひと時でした。(同上)

8月4日(金) 相撲館での廻しを巻いたり、本物の土俵にあがることは貴重な体験。相撲館の職員も元相撲国体選手で衣服を着ずに廻しだけを巻いて実演、館内展示物の説明をしてくれたことに感謝。さよならパーティーでは、ドイツ団との楽しいダンスを行い、年齢関係なく夜遅くまで楽しいひと時を過ごされ最後は中学生と時間を過ぎるのを忘れて会話をされていました。この日は、市体育協会、市スポーツ少年団からの記念品であるポロシャツを着て参加いただいて送ったことを喜んでおりま

す。(同上)

8月5日(土) あっという間の5日間、最初の受入式から駅での見送りまで本当にあっという間でした。大きな事故、病気もなく無事にこの交流事業が終わったことも、たくさんの人たちの協力があったからこそと思う。5日間、ずっと随行してくれた役員の皆さまや県の職員の方々に感謝。本当にありがとうございました。最後の駅のホームでは何か長いような短いような楽しい5日間を振り返り、無事に事故もなく見送ることができて良かった。

(同上)

団長団の視察と通訳含め9名で受入を開始しました。ドイツ団の皆さんは、日本の武道である空手道の演武見学と体験をしました。空手道体験を通じて緊張もほぐれたようで、団員たちと笑いも交えながら交流ができ、終盤にはドイツ団の皆さんも迫力のある空手を披露していました。空手道スポーツ少年団のみんなにとっても良い体験になったと思います。また、ニュースポーツのボッチャも一緒に交流をはかれて大変良かったと思います。今回はホームステイがないため、日本家屋に触れる機会として夕食会を私の自宅でドイツ団含め総勢18名で行いました。相撲部屋をお願いしたちゃんこを中心に食事を用意しましたが、とても美味しいと喜んでいただきホッとしました。和気あいあいと終始和やかに話ができ、緊張もお互いにほぐれて親近感を感じました。

(泉北地区：小谷 恵美子)

8月6日(日) 2日目は屋外での活動がメインでした。朝から消防団の放水体験を真剣に行い、その後だんじり囃子で賑やかな鐘や太鼓を体験し喜んでいました。午後のボート体験では、高石高校ボート部にご協力を頂きボート部の皆さんと3艇に分かれての100m競争も行い楽しんでいました。夕食後のディスカッションでは、野外活動スポーツ少年団と少林寺拳法スポーツ少年団のリーダーに協力してもらい、SDGsについて真剣にいろいろな話し合いで盛り上がり短い時間でも同世代の親睦がはかれて大変良かったと思います。プログラムが多くドイツ団に少し負担があったかもしれないと思っていますが、大変有意義な一日を全員元気で過ごせたのが何よりです。(同上)

8月7日(月) 市長表敬訪問は、和やかな雰囲気が進められ、その後大阪府立高石高校へ部活動体験に向かいました。高石高校では、ドイツ団を迎えるためにスクールバディ(海外の友だちづくり)を募集し15名の参加があり、生徒会の皆さんも含め約20名の協力を得ました。まず、日本の武道(剣道)体験を行い短時間で驚く

ほど竹刀を上手く使いこなしていました。昼食では、高校生の皆さんとたこ焼きパーティーで一緒にたこ焼きを焼いて食べて美味しかったようです。午後からの書道体験では、ドイツ団の皆さんの筆使いの上手さにびっくりさせられました。その後高校生と一緒にドイツ団から要望のあったカラオケに行きましたが、言葉の壁もなく大きな声で楽しく歌う声が聞こえました。同世代の人達との交流をすごく喜ばれていました。高校生の皆さんとメール交換をしたり新しい繋がりができています。カラオケがよほど楽しかったのか夜の工場夜景見学のタクシーの中でもカラオケの続きが始まりました。楽しく、有意義な一日を過ごすことができたと思います。(同上)

8月8日(火) 大阪観光の移動をすべてチャーターバスで行ったので疲れも軽減できたのではと思います。海遊館では涼しく見学ができ、難波観光では、ドイツ団の要望を聞きながら、戎橋から心齋橋辺りまでいろいろな店を覗くことができましたが、もう少し時間的に余裕がとれたら良かったと思いました。さよならパーティーは大阪府の日独特別委員会委員をはじめ、泉北地区役員、パトントワリングスポーツ少年団、少林寺拳法スポーツ少年団等の皆様に参加してもらい、より多くの方から今回の日独の受入について理解を得られたように思います。前日にお土産としてプレゼントした、浴衣、甚平をさよならパーティーに着てきてくれたことがとても嬉しく良い思い出となりました。とてもよく似合っていました。(同上)

8月9日(水) 短い期間でしたが、全てのプログラムに同行し、ドイツ団の皆様と心温まる交流ができたことが、私自身にとって忘れることのない思い出として残りました。そして何よりも期間中ドイツ団の皆様が体調も崩さず元気で活動できたことが一番良かったと思います。様々なプログラムに協力頂いた皆様に改めて感謝申し上げます。(同上)

潜水ユーゲント

ー中国グループー

鳥取県
鳥取市

広島県
広島市

岡山県
岡山市

日程

7月28日(金) 鳥取県(鳥取市:ホームステイ)

鳥取市へ移動／鳥取県教育長表敬訪問／仁風閣 見学／歓迎レセプション

7月29日(土) 鳥取県(同上)

そば打ち体験／ボッチャ体験／砂の美術館見学

7月30日(日) 鳥取県(同上)

ホストファミリーデー

7月31日(月) 鳥取県(鳥取ワシントンホテルプラザ)

弓道体験／ディスカッション／海水浴／送別会

8月 1日(火) 岡山県(岡山市:ピュアリティまきび)

駅周辺自由行動／岡山市へ移動／岡山状観光(着物着付け体験)／歓迎夕食会

8月 2日(水) 岡山県(同上)

倉敷美観地区観光(くらしき川舟流し)／お茶タイム／後楽園 幻想庭園観光

8月 3日(木) 岡山県(同上)

岡山県立総社南高等学校交流(SDGsディスカッション・ランチ交流・レクリエーションゲーム・書道体験)／イオンで自由行動

8月 4日(金) 岡山県(同上)

陶芸 皿に絵付け体験／流しそうめん／ウォーターシューティング／スイカ割り／ヨガ／夏祭り体験／さよならパーティー



歓迎レセプション(TREES COFFEE COMPANY)



ボッチャ体験(ヤマタスポーツパーク 鳥取県民体育館)



弓道体験(鳥取県立鳥取西高等学校)



きよねスポーツクラブとウォーターシューティング

8月 5日(土) 広島県(広島市:ホームステイ)

広島市へ移動／ホストファミリーと対面(合同昼食)／
安スポーツ少年団とのバレーボール交流会

8月 6日(日) 広島県(同上)

広島市平和記念式典参列／平和学習(昼食含む)／
歓迎パーティー&プロ野球観戦

8月 7日(月) 広島県(同上)

テーマディスカッション／広島市長表敬訪問／厳島神社見学

8月 8日(火) 広島県(同上)

ホームステイプログラム／ジアウトレット広島見学／柔道体験／さよならパーティー

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

品川プリンスホテルへ



安バレーボールスポーツ少年団との交流試合
(広島市立安小中学校体育館)



歓迎パーティー&マツダスタジアムパーティールーム



夏祭り



絵付け体験



スイカ割り



平和記念式典(平和記念公園)



さよならパーティー(相田集会所)

7月28日(金) 自分自身初めての受入ということでとても不安な面が多くありましたが、潜水グループの皆さんは、指導者のノルベルト氏を中心にととてもまとまりが良く、集合時間を伝えるときちゃんと5分前には集合してくれるなど、とても好印象でした。仁風閣見学の際、皆さんがとても暑そうにしていたので、ドイツの気候を伺ったところ、例年より気温は高いが日本ほど暑くはないとのこと、明日以降砂の丘見学や海水浴などの野外活動が控えており体調を崩す人が出ないかとても心配。歓迎レセプションでは、オードブルの他にちらし寿司やサンドイッチを準備していたが、ちらし寿司にはあまり手を付けず、多く残っていた。事前に聞いていた通り小食な印象。

(鳥取県:伊藤 優)

7月29日(土) 団員の中に魚を食べない団員がいると事前に聞いていたので、手打ちそばと海老の天ぷらならと準備していたが、海産物は全く食べないという事実を知らされ夕食までお腹がもつか心配だったが、時間に余裕ができて立ち寄った道の駅で菓子パンを買って食べており安心した。ポッチャ体験や砂丘観光も皆さんとても意欲的に参加しており、受入側も一緒に楽しむことができた。中には、体調を崩す団員もあったが休憩を十分にとり大事には至らなくてほっとした。(同上)

7月30日(日) 3日目は、ホストファミリーデーとし、受入家族とより充実した交流が出来たのではないかなと思う。(同上)

7月31日(月) 弓道体験からディスカッションと鳥取西高校弓道部に協力いただき、同世代での貴重な交流となった。ディスカッションのテーマ範囲が広がったことやドイツ団側の内容を伝えられた時期が受入れ間際になったことで、ディスカッションというよりは、両国の現状や取組についての発表会となった気がする。もう少し絞り込んだテーマになるとスムーズにできるのではと感じた。学校に関する話題になると質問や意見が多く出ていた。潜水グループだけあって、海水浴は必須と思いプログラムに組込んだが、団員の中にケガの治療中ということで海に入れない者もあり海水浴以外の準備をしていなかったため、浜辺で待機と可哀そうな思いをさせてしまった。送別会では、受入れに関わっていただいた方々、総勢57名が参加し、事務局側で作成したスライドショーや潜水グループの活動紹介などもありとても盛大な会となった。(同上)

8月1日(火) 大きな事故や事件もなく4日間を終えることができてほっとしている。別れ際に「今回のプログラムはとても良かったありがとう」と言ってもらい、これ

までの苦労が報われたような思いがした。終始天候に恵まれた一方で、熱中症等の体調不良を懸念して、飲料や塩分チャージタブレットを準備し、1つのプログラムが終了するたびに必要かどうか声掛けを行った。意外にも炭酸水はほとんど手を付けず水を好んで飲んでいて。追加でコーラを用意するととても喜んでいたので印象的だった。思い返せばあつという間で、とても貴重な経験ができたと思います。本当に楽しい4日間でした。(同上)

通訳の方より、よくまとまったチームで良い子ばかりだと聞いていたので、会うのが楽しみだった。実際にあってみると本当にとっても仲の良いチームで、こちらの説明もしっかり聞いてくれ、公共交通機関で動く岡山としてはとてもありがたかった。当初の予定は、岡山城と後楽園を観光する予定だったが、暑さと時間の関係で、後楽園は翌日の夜に変更した。(岡山県:西田 佳代)

8月2日(水) 毎日、厳しい暑さのなか、徒歩移動が多く申し訳なかったけれど、JR、バス、路面電車と公共交通を体験してもらうのもいい経験になっていれと思う。倉敷美観地区は、観光より買い物メインになっていたようだが、お箸への名前入れは良いお土産になったようだ。前日に行けなかった、後楽園は、幻想庭園の期間中だったので、夜行くことができ、日中とは違う、日本庭園の魅力を感じてもらえたと思う。後楽園の帰り道、岡山神社を通り抜けた際に、茅の輪があり、竹之内さん<通訳>に倣って、皆、グルグル回っているのが、なんともシュールな光景だった。夜の神社で茅の輪をくぐるドイツ団。私にとっても良い思い出になりました。(同上)

8月3日(木) ホテルに交渉し、朝食を洋食に変更してもらった。やはり朝は、ご飯よりパンが良い団員が多く、対応して下さったホテル側に感謝しかない。

総社南高校の国際課の生徒は、英語力が高く、コミュニケーションが充分にとれていた。高校生が、レクリエーションゲームの企画運営をしてくれ、総社南高校の担当教諭から、生徒にとってとても貴重な事業になったと報告を受けた。この日独同時交流は、スポーツ少年団事業であっても、やはり同世代の高校生との交流は欠かせないと思う。(同上)

8月4日(金) 丸一日、盛りだくさんの内容で、きよねスポーツくらぶさんにお世話になった。私自身もアテンドでありながらも楽しませてもらい、きよねスポーツくらぶさんのドイツ団に楽しんでもらおうという数々の細やかな対応がとてもありがたかった。ドイツ団も岡山のプログラムの中でも一番笑顔が多く楽しんでいったようだった。また、各プログラムに参加してくれた皆さんが、嬉しそうに

ドイツ団と写真撮影をしていたのが印象的だった。ここでも総社南高校の生徒さんにお世話になり、昨日とは違う生徒だったが、休憩室から大きな笑い声が聞こえてき、芝ではじゃれて遊んでいたのも、仲良くなるのに言葉の壁は無いのだと、1日の交流でも今後にも繋がる友情が育めたのであれば、この交流事業の意味があると感じた。(同上)

8月5日(土) 皆から、ありがとうとプレゼントをもらい、炎天下の中、ひたすらに歩かせたプログラムにも関わらず、楽しんでもらえたようで、とても嬉しかった。広島でのホストファミリーにも引継ぎができ、細かな情報を教えてもらえるのは助かると言われたので、受け入れて初めて知る情報と一緒に過ごして知る個々の性格などは、情報共有できるとありがたいのではないかと思う。岡山滞在は日本滞在のちょうど中間にあたる期間だったので、自由時間を多めにとれるようプログラムを組んでいた。ホテルの和室ものんびり過ごせたようで、他の2県がホームステイだったので、ホテル滞在で良かったのではないかと思う。団員同士でホテル目の前のイオンに行ったり、岡山駅周辺を散策したり、お土産や各々が欲しい物を買えたようだ。(同上)

バレーボール交流会では、明朝に安バレーボールスポーツ少年団が第43回全日本バレーボール小学生大会男子の部初出場のため上京するので、その壮行会を兼ねさせていただいた。県大会決勝戦のラストシーンを映像で見てもらうなどの演出もあり、最後の握手会は大変盛り上がった。(広島市：竹本 久男)

8月6日(日) 広島平和記念資料館の展示内容が「原子爆弾による被害の甚大さ」よりも「未来志向の平和」へという観点に移行しているというのが私自身の感想である。結果的には、ドイツ団に平和の尊さを理解してもらえたようだ。(同上)

8月7日(月) 前回の受け入れ時もテーマディスカッションがあったが、テーマはちがうものの今回も中・高校生団員には大変よい企画であった。わがスポーツ少年団もスポーツをするだけでなく、今後は世の中の変化に対応できる社会性も身につけた団員を育成していきたい。(同上)

8月8日(火) 最後のさよならパーティーでは広島市スポーツ少年団から本部長をはじめ事務局長にも参加していただき、歓迎パーティー以上の盛り上がりがあった。ホームステイ先の家族も名残惜しそうで、今回は本当によいみなさんにホームステイを受けていただいたと感謝した次第である。(同上)

8月9日(水) 九州地方への台風接近で帰京を心配したが、新幹線のダイヤも乱れることなく、無事ドイツ団を最終目的地の東京へ見送ることができた。また、ドイツ団員を受け入れていただいたすべての家庭から、今後も機会があれば協力したいとのことばをいただき感謝！感謝！(同上)

バーデン/ ヴェルテンベルク



ウェルカムパーティー(トRESTA白山 瀬戸の間)



うどん打ち体験(中野うどん学校 琴平校)



空手道スポーツ少年団との交流(B & G海洋センター)

日 程

7月28日(金) 香川県(三木町:トRESTA白山)

三木町へ移動/栗林公園散策/三木町長表敬訪問
/ウェルカムセレモニー

7月29日(土) 香川県(同上)

讃空会三木町空手道スポーツ少年団交流/ふるさと盆
踊り大会

7月30日(日) 香川県(同上)

JSPO-ACP体験/ディスカッション/ゆめタウン高松
ショッピングセンターフリータイム

7月31日(月) 香川県(同上)

カヌー・SUP体験/うどん打ち体験/こんぴらさん散策
/さよならセレモニー

8月 1日(火) 高知県(高知市:ザクラウンパレス新
阪急高知)

高知市へ移動/高知県立牧野植物園自由見学/副
知事表敬訪問/歓迎セレモニー

8月 2日(水) 高知県(同上)

スポーツ活動(レクリエーション・ドッジビー)/桂浜散
策・桂浜水族館見学

8月 3日(木) 高知県(同上)

土佐和紙手漉き体験/木曜市見学/高知城歴史博
物館見学/高知見城見学

8月 4日(金) 高知県(同上)

龍河洞見学/ハウスフルーツ/イオンモール高知フリー
ライム/高知県スポーツ協会事務局員との懇親会



アクティブ チャイルド プログラム体験(三木町防災センター)

8月 5日(土) 徳島県(阿波市: 徳島グランヴィリオホテル)

阿波市へ移動／国指定天然記念物 阿波の土柱視察
／徳島県・阿波市合同受入式

8月 6日(日) 徳島県(同上)

徳島県内観光(ドイツ館・大麻比古神社・一番札所 霊山寺・大塚美術館・鳴門海岸)／吉野川市花火大会

8月 7日(月) 東京都(ホテルマンデー)

ドイツ団・民泊家庭さよなら交流会／東京へ移動(※台風の影響で2日早く帰京)

8月 8日(火) 東京都(同上)

都内自由研修

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

都内自由研修／品川プリンスホテルへ



高知城歴史博物館



受入式(鳴門市ドイツ館)



いの町紙の博物館



空港で見送り(徳島阿波おどり空港)



スポーツ交流(高知市総合体育館)

7月28日(金) 団員たちは、空港到着時、とても明るく元気にあいさつをしてくれ、気持ちの良い印象でスタートしました。梅雨明けで高温が予想されたので、団員たちの水分補給や活動時間には気を遣いました。事前の情報として「炭酸水」を日常的に飲むと聞いていましたが、個人差があって日本の強炭酸水は口に合わないようでした。「微炭酸水」または水が良いと思いました。この日は、栗林公園を見学し、表敬訪問とウエルカムセレモニーという予定でした。栗林公園では、暑さのためにあまりゆっくりと楽しむことはできませんでした。今回の三木町の課題はホームステイなしで、若者と交流をすることが大きな目標でした。ウエルカムセレモニーには期間中にお世話になるスポーツ少年団や中学生・高校生に参加してもらったのは大変良かったと思います。

(香川県：香西 ジョアン)

7月29日(土) この日は、讃空会三木町空手道スポーツ少年団と交流をしました。ドイツ団は、「ミニ先生」の小学生から色々な空手の型を教わって楽しそうでした。しかし、蒸し暑い日本の気候に不慣れなため大変疲れた様子でした。体育館には冷房設備がありませんので、熱中症対策として冷風機や業務扇風機を準備し、しっかり水分補給をするように声掛けをしました。昼に予定していた流しそうめんは、待ち時間が1時間(予約は不可)と言われ、急遽ファミリーレストランに変更しました。ファミリーレストランには、メニューの写真があったため、簡単にメニューを理解できていたようでした。また、夜は地元の居酒屋に行きました。店員さんが浴衣姿でおもてなしをして下さり、ドイツ団員たちは大変喜んでいました。居酒屋のメニュー(唐揚げ、枝豆、ラーメンなど)はとても人気がありましたが、ししゃもなど魚料理は苦手なようでした。夕食後には地元のふるさと盆踊り大会に参加して、はっぴを着て踊り多くの町民と交流ができました。(同上)

7月30日(日) この日は香川県スポーツ少年団主催の「令和5年度四国ブロックスポーツ少年団リーダー研究大会」がありました。午前中はアクティブチャイルドプログラム体験、午後は地元の高校生、四国各県スポーツリーダーたちとのディスカッションでした。高校生や学校教員などと連携がうまく取れるか、心配な点もありました。今回は「『スポーツ×SDGs』スポーツが拓く社会の持続可能性」という大変難しいディスカッションのテーマが設定されていました。ディスカッションが始まる前に、引率指導者らを部屋から追い出し、若者が自由に発言できる雰囲気を作ったのはとても面白く、結局、とてもいいディスカッションになり、多くの意見が発表されました。

ドイツ団の1人に「どうだった?」と聞かれましたが、大変すばらしかったと伝えました。夜はショッピングセンターで自由行動でした。食事では、マクドナルドや広島風お好み焼きを楽しんでいました。(同上)

7月31日(月) 今朝、ホテルへ迎えに行ったら、昨日のディスカッションに参加していた高校生がドイツ団員1人と話していました。SNSの情報を交換し、ネット上で連絡を取る約束をしていたようです。色々なアプリが普及しているお陰で、国や言葉が違って、このように絆が深まることを実感しました。この日のプログラムは、体力的に負担が大きく心配していましたが無事終わることができました。午前中のカヌー・SUP体験は、暑さに配慮して時間を短縮しました。みんな、とても楽しそうでした。ただ、プールで実施しましたので、少し物足りない感じがしました。午後は讃岐うどん打ち体験をしました。皆さん、大変真剣な顔つきでうどんを切っていました。味はとても美味しかったようで、うどんは完食しました。うどん打ち体験後は、酷暑のため自由行動としましたが、金毘羅散策をし、石段を登り切った団員は、大変よい経験ができたと言っていました。夜は、地元のイタリア料理店で「さよならセレモニー」をして、町関係者や団員が翻訳アプリを利用してコミュニケーションを取りました。いろいろな世代の人たちが参加して、和やかな時間を過ごすことができました。(同上)

8月1日(火) 毎日酷暑でしたが、事故もなく全員が無事にプログラムを終え、高知県へ移動することができました。今回は民泊がありませんでしたが、地元のスポーツ少年団や高校生らと交流ができ、大変良かったと思います。次の受入の際には、反省点を活かして、準備万端で受け入れたいと思います。(同上)

香川県より引き継ぐ際、日本の暑さと室内外の温度差で体調を崩し気味であると事前に連絡を受けていたので心配であったが、昼食のとんかつは楽しみにしていたみたいでみんな自分でゴマをすって思い思いに食べていた。歓迎セレモニーでは、各テーブルに翻訳アプリを入れたiPadを準備していたので、積極的にコミュニケーションが取れていたと思う。刺身などの生魚は全く食べないと聞いていたが、数人は「かつをのタタキ」に挑戦しており、中には食べられない団員の分まで食べている団員もいた。また、柚子はドイツでは高価らしく、柚子シャーベットや柚子ドリンクは大変好評であった。ドイツ団の出し物のダンスは、体調を崩しているドイツ団員が多いため、中止となってしまう残念であった。(高知県：山下 晃)

8月2日(水) 諸事情により、お昼過ぎまで通訳と指

導者が不在の状態となってしまったが、スポーツ活動や桂浜散策時に翻訳アプリで要件を伝えたとすぐに他の団員に共有してくれたりなど、とても心強くありがたかった。スポーツ活動時の施設は、冷房付きの施設を予約することができなかったため、蒸し暑い中での活動となつてしまい、とても暑そうで申し訳なく感じた。桂浜での散策は、あまりの暑さに時間を短縮したが、海を見たときはとても喜んで写真を撮っていた。桂浜水族館では大きい魚を見ると「これは昨日食べたかつをのタタキか？」と聞いてきた団員もあり、気に入っていただけたのかと微笑ましかった。ホテルではランドリールームで洗濯できることに大変喜んでいた。(同上)

8月3日(木) 土佐和紙手漉き体験では、ポストカード8枚を各々が手漉きで作成した。出来上がったポストカードにハンココーナーで楽しそうにハンコを押しており、個性あふれるポストカードが出来上がっていた。木曜市では焼き鳥の屋台から流れる魅惑の香りに負けてしまい、昼食前にもかかわらず1人3～4本を購入し喜んで食べていた。高知城歴史博物館では、日本刀を目の前で解体して構造の解説を聞き、一人一人兜を被った状態で日本刀を持ち写真撮影を行った。また、実際に甲冑を4人に着用してもらい好評であったが、時間の関係で全員が着用することができず残念だった。その後、実際に高知城に行き天守閣まで登った後、フリータイムとなった。なお、この日の夕食は「幻の和牛、土佐あかうし」のサーロインステーキをメインとした鉄板焼きで一人1万5千円の豪華ディナーであった。それを聞いた団員は、腕を組み肩を抱いて喜んでおり、恐らく本県滞在中で一番の笑顔ではなかっただろうかと思う。(同上)

8月4日(金) 本来であれば、団員交流で剣道体験とクルージングを行う予定であった。しかしながら、台風の影響とコロナ陽性者が出ってしまった関係で、プログラムが急遽大きく変更となった。特に剣道体験はとても楽しみにしていると聞いていたため大変心苦しかったが、変更となった龍河洞見学は「とてもきれい」と好評だったみたいで良かった。メロンとスイカはみんな喜んで食べていた。ドイツでは普段からフルーツをよく食べるため、多様なフルーツが比較的安価で販売されていると団員から聞き、もっと食事にフルーツを取り入れるべきだったと思った。フリータイム(ショッピング)では、アニメのグッズやガチャガチャなど思い思いに見て回り楽しんでいるようだった。フリータイムは、定められた時間と場所に帰って来られるのか心配だったが、全員きちんと時間通りに帰ってきており杞憂であった。(同上)

8月5日(土) 本年度は、新型コロナウイルスの影響により前年度時点での先行きが不透明であった為、市町村での受入は困難であると判断し県本部で受入を行った。受入経験者が退職しており受入のノウハウが全くなく、手探り状態での受入準備や言葉が通じない外国人のアテンド、さらには受入中にドイツ団の半数がコロナ陽性者になるなど、中々にやりごたえのある事業であったが自分自身にとっても良い経験となった。また、様々なイレギュラーにも柔軟に対応して下さった通訳の竹内様には感謝の念に堪えない。今回、新型コロナウイルスの影響により高知県では民泊を準備することができなかったことや、団員交流(剣道体験)が中止になったことなどドイツ団が楽しみにしていた従来の受入プログラムが実施できなかったことを非常に残念に思う。また、ドイツ団は日本の暑さや室内外の気温差にだいぶ堪えており、特に屋外での活動はあまり楽しめていないような印象を受けた。来年度以降、本県で受け入れる際に今回の反省点を活かしていきたいと思う半面、受入プログラムや受入市町村が限られてくるため事業継続は厳しくなってくると感じた。最後に、本事業が無事に終了したことに安堵しているとともに少しでも高知県の魅力や日本独特のわびさびに触れ、もう一度日本に行きたいと思ってもらえたら幸いである。(同上)

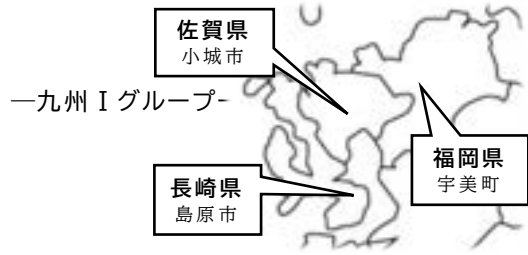
新型コロナウイルス感染症に伴い、四国で徳島県のみが民泊プログラムを予定をしておりましたが、苦渋の決断により中止となり、受入式も人数を調整しての式典になりました。翌日からの受入プログラムの変更や台風接近により、目まぐるしい初日になりました。

(阿波市:野口 新介)

8月6日(日) 当初の受入予定プログラムから大幅に変更になり、団員に説明をし、ホテル待機組と県内観光組と2組に別れての活動プログラムになった。主に鳴門市方面の施設視察となりましたが、施設視察終了後、団員から海が見たいとの要望があり、宿泊先への帰り道に海岸があり小休憩も兼ねて視察を行いました。ドイツ団の出身地区には、海がなく、久しぶりの海体験でもあり貴重な経験ができました。台風接近のため、プログラムを1日早めての全てのプログラムが大幅な変更や楽しみにしていたホームステイの中止。今回で2回目の阿波市受入でありましたが、残念な結果でありました。しかしながら、民泊家庭のサプライズで徳島空港で短時間ですが、会話とお見送りができました。今も、メールやラインなどで交流をしている家族があると聞いております。次回、同時交流事業がありましたら、今回事業の経験を活

かし、通常の受入体制ができますよう準備していきたい
と思います。(同上)

ノルトライン ヴェストファーレン



小城市歓迎会(小城市生涯学習センター)



ディスカッション(佐賀県立小城高等学校)



少年団と交流

日 程

7月28日(金) 佐賀県(小城市:ホームステイ)

小城市へ移動／市長訪問／桜城会館歴史資料館・呉竹記念館見学／歓迎会

7月29日(土) 佐賀県(同上)

なぎなた体験／クールダウン／牛津高校調理科による昼食／ニュースポーツ会体験(卓球バレー)／ディスカッション

7月30日(日) 佐賀県(同上)

ホストファミリーデー

7月31日(月) 佐賀県(同上)

羊羹見学・体験／座禅体験／カキ氷休憩／須賀神社参り／お別れ会

8月 1日(火) 長崎県(島原市:ホームステイ)

引継式／島原市へ移動／島原城見学／歓迎レセプション／ホストファミリーとの打ち合わせ

8月 2日(水) 長崎県(同上)

第三東駅散策／和蠟燭づくり体験／島原高等学校校舎案内・茶道体験／グループディスカッション／島原市スポーツ少年団との交流会(ドッジビー大会)

8月 3日(木) 長崎県(同上)

両子岩見学／足湯温泉体験／雲仙地獄散策

8月 4日(金) 長崎県(同上)

バスケット・ソフトテニス交流(島原商業高校)／雲仙岳災害復興記念館見学／イオン島原店(買い物)／さよならパーティー



武家屋敷見学(島原城)

8月 5日(土) 福岡県(宇美町:阪国際ユースホテル)
宇美町へ移動／阿蘇山見学／温泉体験／ホストファミリー引継ぎ対面式・歓迎レセプション

8月 6日(日) 福岡県(同上)

和太鼓体験／宇美町歴史民俗資料館見学・勾玉づくり体験／弓道体験

8月 7日(月) 福岡県(同上)

宇美町役場表敬訪問／テーマディスカッション(宇美町リーダー会)／ホストファミリープログラム

8月 8日(火) 東京都(ホテルマンデー)

東京へ移動(※台風の影響で2日早く帰京)

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

都内自由研修／品川プリンスホテルへ



阿蘇山観光



ファミリーデー



スポ少ドッチビー大会(島原市営平成町人工芝グラウンド)



ディスカッション(長崎県立島原高等学校)



勾玉づくり
(歴史民俗資料館)



弓道体験
(宇美町立弓道場)



島原商業高校スポーツ交流集合写真(島原復興アリーナ)



さよならパーティー(島原市キャンプ場 舞岳山荘)

7月28日(金) 空港で迎えの際、第三訪問県の福岡県宇美町の担当者などが来てくださり当会スタッフの緊張が和らぎました。しかしそんな緊張も杞憂で、指導者フレデリックの気さくな人柄とドイツ団の素直な気持ちのおかげで言葉の壁はあったものの当日のプログラムは円滑に進めることができました。小城市の歴史に触れてもらいたい思いから歴史資料館へお連れしましたが、そもそも日本の歴史になじみがないので、ガイド内容が難しかったようでしたが、その後書道体験を入れたことで説明するスタッフらとの距離が近くなったと思っています。「体験」することが「学び」になり「親睦」となると私自身学びました。歓迎会ではホストファミリーとの積極的に会話をされており、指導者フレデリックは自身のホストファミリーともそうですが、当会が集めたボランティアスタッフへ感謝の気持ちを伝え、親睦を図ってくれました。小城市はホストファミリーにしてもボランティアスタッフにしても有志にて集まってくれました。なので、もてなす気持ちや相手を知らうとする気持ちがドイツ団にも自然と伝わっていたようで、その様子をみてとても誇らしかったです。

(小城市:野田 由貴)

7月29日(土) まずは、この日交流を行った高校2校に地元新聞社が取材をしていただき、滞在中に掲載されたことが何より良かったと思っています。なぎなた体験の際は事前にいただいていたドイツ団の身体的情報が不足していた為、袴等のサイズがギリギリでした。身長などはもっと早めに聞いておいた方が良かったと思いました。食品調理科の昼食のふるまいは和食を中心に旬の地元野菜を利用し、見た目も美しくまたベジタリアンの2名にも考慮されたもので、日本人の我々も感心する内容となっていました。学校ではwi-fiもなく、また高校の生徒も活動中なのでスマートフォン等持っておらず初めは会話が難航していましたが、生徒側も度胸がだんだんついてくると片言の英語とジェスチャーでコミュニケーションを楽しそうにっていました。また午後の小城高でのディスカッションはSDGs×スポーツのテーマに対し、エネルギー問題がほとんどであったドイツ団でしたが、日本の原発事故を外の国が非常に厳しくとらえているのがよくわかりました。またホームレスの取扱いとして、疎外的にとらえる日本人に対して、ドイツ側は非常にインクルーシブな考えを持っており、ホームレスも社会の仕組みに組み込んだ考えを持っていたことはとても感心しました。

(同上)

7月30日(日) 幸いにも小城市は日曜日を挟む日程だったためホストファミリーデーを入れることができました。

これは令和元年に佐賀県白石町の視察に行った際に、担当者よりホストファミリーからの要望があった事を記録していたことが実施のきっかけでした。朝と夜だけではコミュニケーションを図るのが少ないので、この日を一日入れたことはホストファミリーより本当によかったと言ってもらえています。ホストファミリー側も日本文化を調べ、佐賀の名所を調べ、再度自国を見つめるきっかけになったようでした。

(同上)

7月31日(月) 日本の方々とのコミュニケーションを図りたいと指導者フレデリック氏が思いをしっかりと伝えてくれたので、この日の後半は訪問先やスタッフとの会話を積極的におこなうことを心掛けました。そしてお別れ会ではホストファミリーを招き、また料理を持ち寄っていただきまして、ドイツ団も喜んでいたので本当に良かったと思っています。お別れ会後半ではドイツ団の出し物で炭坑節を輪になって参加者全員で踊ったり、かかる音楽にみんなでダンスをしながら老若男女盛り上がりました。「日本の人とコミュニケーションを図りたい」という考えからか、言葉や文化を越えた「音楽」「ダンス」をドイツ団が選んでくれたこと、本当にありがたかったです。予定より30分も終了が遅れましたが、素敵な夜になりました。

(同上)

8月1日(火) あまりかしこまった引継ぎ式を準備していませんでしたが、ドイツ団より記念品等を贈呈していただき胸が熱くなりました。言葉はなかなか届きませんでしたが、「日本を知ってほしい」「小城市のたくさんの人と出会ってほしい」との思いが伝わってくれていたと思うと、涙があふれてきました。それに対して「大丈夫だよ、泣かないで」との英語でのドイツ団の声掛けで、心が通じ合ったという満足感で溢れました。小城市でのこのひと夏は、ドイツ団と小城市の関係者の皆様の心に刻まれたものになったと思っています。

(同上)

佐賀県での引継ぎを終えて、島原市に向かったが、車内では歌を歌ったり写真をとったり、元気であったが、さすがに疲れていたのか、昼食会場へ到着するまで、6人とも寝ていた。慣れない環境で疲れがたまっていると感じたので、プログラムについて、夏の暑さも考慮し、なるべく体力的に負担がないようなプログラムにした方がいいと感じた。歓迎レセプション前には、時間的余裕をとっていたため、ゆっくりドイツ団、通訳、担当者で打合せを行うことができた。歓迎レセプションでは、ホストファミリーにも参加してもらい、ドイツ団の疲労を考慮してなるべく簡素化して行うことが出来た。また、ドイツ団の情報も限られた情報しかなく、ホストファミリーの不安を取り

除くために、通訳もいるので、ドイツ団に聞きたいことがあれば聞くようにホストファミリーへ伝えていたが、歓迎レセプション終了後にドイツ団とホストファミリーとの打ち合わせも行うことができ、みんな笑顔で解散することが出来た。

(島原市: 森 貴司)

8月2日(水) 涼しい午前中に、散策や体験型のメニューを組んだが、午前中から非常に気温が高かったので、屋外での活動や屋内でも空調があるのかなど、事前に確認が必要だったと感じた。また、熱中症対策でこまめに水分補給をするように水などをドイツ団に勧めるよう心掛けた。夕方は幾分気温も下がり、天候にも恵まれ、市内スポーツ少年団とのドッチビー大会を行った。このドッチビー大会は、ホストファミリーにスポーツ少年団指導者の方がおられ、ホストファミリーみなさんと企画や、参加単位団との調整などご協力をいただいて実現することが出来た。ドイツ団の年齢と市内単位団の子どもたちは小学生が主で年齢差があったため、当初はどうかと思っていたが、ドイツ団と子どもたちが楽しくドッチビー大会しているのを見て、大変よかったと感じました。(同上)

8月3日(木) 当初受入れ日程を検討する際に、ホストファミリーデーを受け入れ期間中のどこかで、1日設けるか検討しましたが、本市で受入れする曜日に日曜日が含まれていなかったため、ホストファミリーへの負担を考慮して、ホストファミリーデーを設けませんでした。今回は、ホストファミリーの中でバス旅行に参加できる方を募ったところ、21名の方に参加していただきました。ドイツ団一人を一家庭で受入れしてもらいましたが、他のドイツ団の方とも交流ができ、皆さんが楽しく過ごされている様子であったので大変良かったと思いました。足湯体験もこの日の気温が高く、無理して体験している様子うかがえた。雲仙地獄散策でも気温が高かったので、屋外での活動には配慮が必要であったと感じました。

(同上)

8月4日(金) スポーツ交流では、空調設備のある屋内施設で行うことができ、好評であった。昼食時間については、ドイツ団の疲労も考慮し、大幅に長くすることとなったが、当初から省くことが可能な日程としていたので、うまく対応できた。さよならパーティーでは、パーベキューを行ったが、ドイツ団の中にベジタリアンの方もいらっしやったので、食べれそうなもの(サラダやピザ、ポテトなど)を準備していた。ドイツ団、ホストファミリーともにスイカ割りや花火を楽しんでいる様子で最後の夜を楽しく過ごせたと思います。

(同上)

8月5日(土) 乗船して熊本まで行き、福岡県宇美

町への引継ぎを行い、無事に受入れが終了でき、安心しました。帰りは一人となり、とても寂しい気持ちになりました。今回の受入れを通して、ドイツ団とともに行動し、ドイツ人の人柄にも惹かれるものがあり、またホストファミリーの皆さんや高校のみなさんなど、多くの方とかわりができたことなど、貴重な経験をさせていただきました。機会があれば、ぜひドイツにも行ってみたいと思っています。

(同上)

ドイツ人は火山に触れる機会が少ないため、阿蘇山の雄大な大自然に触れることができ、良い経験になったと感じた。ホストファミリーも歓迎レセプションに全員が参加し、交流を深めることができた。

(宇美町: 丸山康夫)

8月6日(日) 和太鼓体験は一番楽しめたようだ。大変暑かった離脱することなく最後まで楽しめたようだ。弓道体験も弓道部の協力で、武道体験としては成功だった。

(同上)

8月7日(月) 「スポーツ×SDGs」というテーマでのディスカッションは大変難しいと思う。日本スポーツ少年団がなぜこのテーマを設定したのか甚だ疑問だ。誰がテーマ設定したのか知らないが、日本スポーツ少年団の担当者(役員)の独りよがりと思えない。そもそも普段の活動でSDGsはほとんど意識していないので、テーマはそれぞれの受け入れ団体で決めても良いと思う。

(※交流テーマはJJSAとdsjで協議の上決定しています)

(同上)

8月8日(火) 台風接近により、二日前倒しという連絡が来たときは、日本スポーツ少年団に対して不信感しか抱けなかった。受け入れ市町村団の事は何も考えていない。そもそも県団を通してしかやり取りができない仕組みが最悪で、受入市町村の責任者と直接やり取りができるようにしなくてはいけない。また、帰りの飛行機も10時発など正気の沙汰ではない。受入市町村団のことを全く考えていない。また、航空チケットも当日出発時間になっても送ってこなかった。どれだけ危惧したが想像して欲しい。担当者は謝罪の連絡すら一切してこない。また、延泊して新幹線を利用することもできたのではない。日本スポーツ少年団の担当者や役員は土日は仕事をしていないのだろう。旅行会社も最悪で、このような旅行会社は二度と使うべきではない。とにかく日本スポーツ少年団本部の危機管理能力は最低レベルであり、大いに反省すべき。

(同上)

ブランデンブルク

—九州Ⅱグループ—

大分県
杵築市

鹿児島県
霧島市

宮崎県
三股町

日 程

7月28日(金) 鹿児島県(霧島市:ホームステイ)
市長表敬訪問／交流団歓迎パーティー／ドイツ団ミーティング

7月29日(土) 鹿児島県(同上)
ホストファミリーとの交流

7月30日(日) 鹿児島県(霧島市:霧島自然ふれあいセンター)

ホストファミリーとの交流／スポーツ科学における体力測定とフィードバック・学生との意見交換会／スポーツレクリエーション活動／自由時間

7月31日(月) 鹿児島県(霧島市:ホテル京セラ)
錫皿作り体験／和服で参拝・ぶらり霧島神宮／キリンマ祝祭管弦楽団リハーサル鑑賞／花火

8月 1日(火) 宮崎県(三股町:スポーツ合宿所TCY)
お別れセレモニー・ホストファミリー歓談／三股町へ移動／しゃくなげの森(ヤマメ養殖・施設見学)／長田峡見学／茶販売所・ジャンカン馬見学／小倉邸・生け花体験／町三役訪問／歓迎レセプション

8月 2日(水) 宮崎県(同上)
三股町スポーツ少年団とのニュースポーツ交流会／都城東高等学校意見交換会／茶道体験／三股中学校バスケットボール部とスポーツ交流(一部団員)

8月 3日(木) 宮崎県(同上)
高千穂牧場見学／都城島津邸／伝承館／東郷織物見学／松崎刃物工場見学／ホストファミリー事前交流会／心武会空手スポーツ交流会／都城農業高校バスケットボール部スポーツ交流



鹿児島神宮六月灯(ホストファミリー)



バナナボート(住吉浜リゾートパーク)



歓迎会(旬食喜心 芳の芽)



城下町散策(杵築城)

8月 4日(金) 宮崎県(三股町:ホームステイ)

スポーツ交流会(弓道体験)／日本食調理体験・実食
／文化交流(書道体験・うちわ作り)／たみ工場見
学・ミニたみ作り

8月 5日(土) 大分県(杵築市:住吉浜リゾートパーク)

お別れ式／杵築市へ移動／Tリーグ観戦／海水浴／
SUP・バナナボート／歓迎会／トレーニングジム

8月 6日(日) 大分県(同上)

和服体験／城下町散策(大原邸・酢屋の坂・一松邸展
望台)／七島蘭 プレスレット作成／パークプレイス大
分ショッピング／温泉入浴

8月 7日(月) 東京都(ホテルマンデー)

トレーニングジム／温泉入浴／東京へ移動(※台風の
影響で2日早く帰京)

8月 8日(火) 東京都(ホテルマンデー)

都内自由散策

8月 9日(水) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

品川プリンスホテルへ



都城東高校 高校生との意見交換会



心武会空手との空手交流(西部地区体育館)



三股町三役表敬訪問 バナント交換



畳工場見学(中西たみ襦店)



弓道体験(三股町弓道場)



ニュースポーツ交流会



文化交流(WAJIMA)



お別れ式(三股町中央公民館)

7月28日(金) この日は、ドイツ団員との初めての対面で緊張していたが、ドイツ団の笑顔で緊張がほぐれました。鹿児島県に移動してからは、霧島市役所にて市長表敬訪問を行い、ドイツ団代表でスヴェア氏があいさつをし、他の団員も、日本語で自己紹介をしており、友好的な印象を受けました。その後の歓迎パーティでは、市長をはじめ、市スポーツ少年団本部長や市スポーツ少年団指導者協議会会長、ホストファミリーのご家族の方にも参加していただき、ホストファミリーとの初対面では、お互い緊張しているようであったが、時間が経つにつれ、笑い声が聞こえてきたり、笑顔がみられ、これからのホームステイを楽しみにしているような様子で安心しました。

(霧島市：渡辺 亜海)

7月29日(土) ドイツ団員については、朝から夕方まで、ホームステイ先のホストファミリープログラムで、後日、ホストファミリーから話を伺ったところ、習字体験や足湯、夏祭りなどに行き、楽しい時間が過ごせたようでした。言葉についても、ドイツ団が英語を話せたこともあり、特に苦慮している家庭はなく、たくさんコミュニケーションがとれているということで安心しました。また、グループリーダーと通訳もドイツの方だったため、県内の観光地案内をすることになり、リクエストのあった桜島を観光したあと、フェリーで鹿児島市まで渡り、昼食はそうめん流し、その後は、砂蒸し温泉に入り、リラックスできたようでした。何をするにも笑顔のグループリーダーと通訳を見ていると、不安に思っていた明日からのプログラムも、楽しみながら頑張れそうだと思います。(同上)

7月30日(日) 今日で、2日間のホームステイを無事終えることができ、一安心しました。ホストファミリーへは、終日さまざまなプログラムを考えていただき、感謝しています。ホストファミリーとドイツ団が別れを惜しんでいる様子を見て、ホームステイの期間を延ばせば良かったかなと後悔しています。この日の午前中、第一工科大学での意見交換会でした。ドイツ団が簡単なゲームを考えてきており、ゲームでお互いの緊張をほぐしてから活動に入り、予定時間が過ぎるほど、会話が弾んでいるようでした。午後は、霧島自然ふれあいセンターで、フライングディスクゴルフを行い、通訳から、ドイツで流行しているスポーツだと聞いて、安心しました。受入3日目で、蒸し暑い日が続く、疲れが見えるころかなと思いましたが、スポーツ後も、「近頃の滝を見に行きたい!」というほど、元気いっぱいドイツ団で、こちらも元気がもらえました。

(同上)

7月31日(月) この日は、午前中に錫皿作り体験を

し、皿の形を整えるのに苦労したりデザインを真剣に考えたり、個性あふれる錫皿ができていました。出来上がった錫皿については、お土産としてプレゼントしました。午後からの霧島神宮では、空模様が怪しくなり、できるか心配でしたが、無事に晴れて、程よい気候で安心しました。ドイツ団は自分で選んだ着物を着て、おみくじを引いたり、参拝方法を体験していました。初めて着物を着るドイツ団もいて、喜んでいましたが、時間が短かったようで、もっと時間をとればよかったと後悔しました。その後は、みやまコンセルでの、キリシマ祝祭管弦楽団のリハーサル見学をし、ドイツ団員の中には、「この音楽鑑賞が私の今日のハイライトだ!」と喜んでいる団員もいて、プログラムに組み込んでよかったと思いました。(同上)

8月1日(火) この日は、ホテル京セラのロビーでお別れセレモニーを行い、ドイツ団代表の、ティム氏より、日本語でのあいさつがありました。このあいさつを何度も練習したのだと思うと嬉しくなりました。セレモニー後は、宮崎県の迎えがくるまで、ホストファミリーとの別れを惜しんでいました。鹿児島県スポーツ少年団事務局をはじめ、地区スポーツ少年団指導者協議会会長、本市スポーツ少年団本部長の協力を得ながら、何事もなく、無事に5日間を終え、ドイツ団を宮崎県三股町の方々へ引き続けたことに安心しました。受入前は、長いと思っていた5日間でしたが、あっという間に終わり、自分にとって貴重な経験になりました。ドイツ団が鹿児島で過ごした時間が、素敵な思い出になってほしいと思っています。(同上)

本町では、今回の受け入れに当たり、本町教委のALT(外国語指導助手)ライト・デレックさん(アメリカ人)と、本町地域おこし協力隊員で、ドイツでの勤務経験があり、ドイツ語を話せる江森聡さんに同行してもらい、それぞれ、英語とドイツ語により、ドイツ団と積極的にコミュニケーションを図ったところ、ドイツ団の皆さんとすぐに打ち解けることができ、その後の研修の進展に大いに役立った。ドイツ団の皆さんは、時間を有効活用したいとの意欲が旺盛で、「空き時間となっている翌8月2日の16時半以降に、『茶道体験』をできないか」との相談があり、町内の茶道教授の方をお願いして、『茶道体験』を実施することとなった。また、団員ティムさんから、「三股町の皆さんと得意のバスケットボールを通じた交流がしたい」との相談があり、2日の「茶道体験」後に、ティムさんのみ、「三股中学校バスケットボール部」の練習に参加することとなった。(三股市：綿田 賢介)

8月2日(水) この日もドイツ団の皆さんから、「翌8月3日の18時以降の空き時間にスポーツ交流がしたい」

との相談を受けた。調整の結果、団員ティムさんは、都城農業高校バスケットボール部でバスケットボール交流を、残りの指導者・団員・通訳については、三股町スポーツ少年団の単位団「心武会空手」で空手交流を実施することとなった。「時間を無駄にせず、さまざまな体験をしたい」とのドイツ団の皆さんの旺盛な探求心に感銘を受けた。（同上）

8月3日(木) 三股町滞在3日目となり、ドイツ団の皆さんもかなりリラックスした状態で研修に取り組まれていると感じた。また、訪問する先々で大歓迎を受けた。特に、この日最後のスポーツ交流では、団員ハンナさん・ティムさん以外のメンバーはスポーツ少年団「心武会空手」と空手を通じた交流体験を行ったが、ドイツ団の身体能力の高さに、居合わせた生徒児童・指導者・母集団（保護者）の皆さんは感心しきりで、ドイツ団の一挙手一投足に歓声があがったほか、終了後には、会場各所で、ドイツ団とスポーツ少年団関係者が写真撮影や会話を楽しんだりするといった光景が見られ、今回の同時交流を実施して本当に良かったと実感した。また同時刻に都城農業高校でバスケ交流を行った団員ティムさんも熱烈な大歓迎を受けたとのこと。また、この日、蚊に刺された箇所が腫れた団員ハンナさんは、疲れもあり、17時からのプログラムには参加せず、宿舎で静養していたが、同日20時頃に確認したところ、「だいぶ回復したので翌日からは皆と一緒にプログラムに参加する」とのことで安心した。（同上）

8月4日(金) 前日夕方から静養していたハンナさんも、この日の朝から元気にプログラムに参加し、安心した。弓道体験では、団員ティムさんが、矢を放つ際、飛んでいく矢の「羽のついた部分（末端部分）」が弓を持つ左腕をかすめてミズ腫れになり、本人も痛がっていたが、アイシングを行ったことで症状が改善。その後のプログラムにも支障なく参加できて良かった。「日本食調理体験・実食」では、おにぎりを各自作ってもらうために、「ふりかけを混ぜたご飯」と「白ご飯」を準備し、好きな具を詰めてもらったところ、ドイツでは、「味のついていない白ご飯」を食べるのが一般的ではなく、一部団員から「白ご飯のおにぎりに抵抗感があった」との感想があったことは反省点である。ホームステイでは、事前交流の効果もあってか、かなり親密度が高まった状態で団員4名がホストファミリーに迎えられ安心した。（同上）

8月5日(土) ドイツ団の皆さんから「さまざまな交流ができて本当に良かった。また三股町に来たいです。皆さんもぜひドイツに来てください」との感想があり、今回

の受け入れ事業をやって本当に良かったと思った。お別れ式後に、ドイツ団との別れを悲しみ、涙をぬぐうホストファミリーの子どもさんがいて印象的だった。今回、ホストファミリー宅の負担軽減を考え、ホームステイは1泊2日で設定したが、一部ホストファミリーから「期間が短い」との批判があり、ホームステイは2泊3日が良かったのかと反省するところである。今回、ドイツ団の熱中症対策として、移動用車両中にクーラーボックスを置き、「緑茶、スポーツドリンク、ミネラルウォーターのペットボトル」を入れ、自由に飲んでくださいとしたところ、大好評だった。これは、次年度以降、受け入れを行う全市町村において同じように取り組んだほうが良いと思われる。（同上）

受入初日で最も印象に残ったイベントは、海水浴です。ドイツではあまり海になじみがなかったようで、目を輝かせて海水浴を楽しんでくれていました。SUPも初経験の人がほとんどでしたが、呑み込みが早く、すぐに乗りこなしていました。夕食もと天・おおいと和牛をととても気に入ってくれていました。皆さんお腹いっぱいになるまで食べて満足してくれていました。夜もアクティブに行動されていたので、職員が付いていく精一杯でした。

（杵築市：岩槻浩平）

8月6日(日) 朝早くから活発に活動されており、ホテル周辺を散歩して貝殻拾いと朝日を見に行ったようです。ドイツでは海があまりないので貝殻も珍しがっていました。また、セミの鳴き声や踏切の音・コンビニの入店音が日本を感じられる音だとおっしゃっていました。女性陣が和服選びに時間を要している様子を見て、男性から「まるでルイヴィトンを選んでいるようだ」という声が上がリ、言い得て妙だなと思いました。ショッピングは当初予定しておりませんでしたが「九州での買い物時間があまりなかった」という意見があったので、急遽スケジュールに組み込みました。帰りがけ温泉にも入れてあげたので、かなり満喫できるものになったのではないかなと思います。（同上）

8月7日(月) 2泊3日はあっという間でしたが、グループリーダーさんの「ドイツのことわざで、『一生の中で、人は2度会う』というものがある。またどこかでお会いしましょう。」とおっしゃってくださいましたので、いつか再会できればと思っています。都合上、お別れに立ち会えたのが県の福田さんと私の2名だけでしたので、寂しいお別れ会になってしまいました。急遽の宿泊期間短縮でしたが、許された時間内でできる限りの体験はしてもらえたかなと思っています。（同上）

全体プログラム（後半・東京）

8月9日(水) (東京都:品川プリンスホテル)

各グループ東京集結

※四国、九州Ⅰ、九州Ⅱグループは台風の影響で期間を短縮して帰京

JJSA-通訳評価会

ドイツ団ミーティング

8月10日(木) (同上)

都内自由研修

JJSA-団長団評価会

さよならパーティー

8月11日(金)

ドイツ団東京国際空港出発(LH717)



ドイツ団出し物(さよならパーティー)



ホストファミリーと再会(さよならパーティー)



集合写真(さよならパーティー)

ホームステイ受入家庭・リーダーの声

日独スポーツ少年団交流に係る感想

(北海道) 阿部

我が家は、根室在住時にロシアとの交流事業でショートステイを受入れたり、長女が英語に興味をもち、留学したりするなど、異文化コミュニケーションに興味関心が高い家庭だと思っている。

また、様々な方と接することにより、自身の感性が磨かれたり、世界の見方や考え方が変わり、人間としてより良く成長できると考えたりしていたことから、今回のドイツ柔道少年団の民泊の話をいただき、感謝している。

我が家に宿泊した2名の選手は、向学心が高く、フレンドリーで、爽やかな少年だった。中3と小5の長女・長男ともすぐに打ち解け、英語やジェスチャー、スマートフォンの翻訳機能等を駆使しながら2泊3日を楽しく過ごすことができた。

この民泊の経験から、長女は再び海外への興味を高め受験に臨んでいる。長男は柔道に興味をもったり、いただいたプレゼントのパズルにはまったり、ドイツに旅行に行きたいと言ったりと、影響を受けている。

言語や文化の壁があることは確かではあるが、互いに両国の文化や風習を理解し、リスペクトし、受入れることが大切であると感じている。壁はすぐに乗り越えることができ、その先には今よりも充実した人生が待っている。

このような素敵な機会を与えていただけたことに、感謝している。

日独同時交流を終えて (北海道) 倉澤 千尋

別海に来町する前に日本に滞在していたので、異文化に対する戸惑いや不安なく過ごしていた様子。また、スポーツとコミュニケーションを通して別海町になじむ様子が見受けられ、非常に楽しんでいました。

初めてのホームステイ受け入れでしたが、子供達、そして友人もドイツ団との交流を楽しむことが出来ました。特に、花火をしている時に、円陣を組み、お互いの国歌を斉唱したことは一番の思い出です。そして、どんな食事を提供したら良いか悩んでいる時も「どんな物でも食べてみたい」と気持ちを穏やかにしてくれたことにも感謝しています

日独同時交流を終えて 東北Ⅰ(秋田県) 佐々木

ホストファミリーを引き受けるなんて、夢にも思っていませんでした。引き受けるまでには、絶対にうちには無理～

と！うちには英語の得意な人は一人もいません、語学力ゼロの状態では不安だらけ。準備といったら翻訳のアプリをダウンロードすることしか出来ず、受入れ当日を迎えました。

同じ高校生には思えない、綺麗なイエナがうちにやって来ました。初めはお互い緊張し、家族みんな四苦八苦しながら、何を話したらいいのか戸惑いもありましたが、直ぐに打ち解け、片言・単語で会話が出来るようになりました。

お互いの家族の紹介をしたり、花火を見に行ったり、観光地に行ったり、イエナの食べたい日本食と一緒に作り食べたりと、日本に興味を持ってくれた、あつという間の5日間でした。

振り返ると、ホストファミリーとして引き受けて本当に良かったと思います。国際交流を経験する事が出来て、人との関わりを深め、文化や習慣が違うのに、直ぐ溶け込んでくれたイエナに巡り合わせてくれた事、素晴らしい出会いを体験させてもらった事に感謝しています。

ドイツ人学生を初めての受け入れ

東北Ⅰ(青森県) 田中 久子

この度、日独スポーツ少年団交流事業で、ドイツからの学生3人のホームステイを受け入れしました。

日中の体験から戻ってきたときには笑顔で話す姿が見られ、言葉の意味は分かりませんでしたが、活動を楽しんだのだなとうれしく感じました。

また、家では浴衣を着て写真を撮ったり花火をしたりと、楽しみながら日本文化に触れてもらう体験をしました。食事では、我が家で栽培した野菜を中心とした料理を作りました。

お別れのときには、ドイツのお菓子やおもちゃなどのお土産をいただいただけでなく、不慣れな日本語で一生懸命感謝のことばを伝えてくれたときには、今回の受け入れをしてよかったと感じました。

ホームステイには長い間携わってきておりますが、思い出に残るホームステイのひとつとなりました。ありがとうございました。

ホストファミリー初体験！

東北Ⅱ(山形県) 石栗 彩知

今年の夏、私は初めてホストファミリーになりました。ドイツから来たマックス君は17才なのに英語がペラペラで

すごいと思いました。私はまだ英語がよくわからないのであまり話したりできませんでしたが、一緒にトランプやUNOをして遊びました。マックス君の知っているドイツのルールと私たちが遊んでいる日本のルールが少し違っていたので、頑張って英語でなんとかしないと、と思っていましたが、弟と一緒にやってみせるとすぐわかってくれました。この時に使った英語は数字と“OK！”だけでした。少しの英語と身振りだけでわかってもらえた時はすごく嬉しかったです。こんな風にする伝わるとわかった後は、緊張がとれて少し楽な気持ちで遊ぶことができました。スポーツ交流と一緒にシャッフルボードをした時も英語で会話はできませんでしたが、勝って一緒に喜んだり、失敗して残念がったりして、少し緊張するけど、日本の友達というのと同じだと思いました。

マックス君は 17 才で、今年の春に高校を卒業したばかりだと言っていたのにいろんな事を知っていました。自分の街のこと、ドイツの国のこと、それから他のヨーロッパの国のことをたくさん話してくれました。それから、進んで夕食の片付けも手伝ったりしてくれました。私の家族は、「国の政治や税金についてもよく知っていて、日本の高校生よりもしっかりしているね。礼儀正しくて、行儀も良い。ドイツの人はすてきな人が多いのかな。ドイツに行ってみたくなったね。」と言っていました。

今回、私は英語がわからなくてあまり交流出来なかったのですが、もう少し英語がわかるようになったら、またホストファミリーになって外国の人と交流したいです。

日独同時交流を終えて

関東Ⅰ(群馬県) 高橋 里織

こちらの交流での受入は初めてでした。ホストファミリーとしては過去にも経験がありましたが毎回受入前は不安と期待があります。

今回我が家に来た子は娘と年齢が近かった事もあり、互いにとても楽しそうに過ごす事ができました。ドイツ語と日本語を教えあったりゲームをしたり、日本語はわからないはずなのに好きな映画を日本語版で観ていました。ベジタリアンでしたが魚は大丈夫だったので日本食にもチャレンジしてくれて、和菓子なども興味を持って食べていました。つたない英語力の私とも積極的にコミュニケーションを取ってくれて素敵な時間が過ごせました。要望としては、受入までに提示された情報量が少なかったのですが、本人と直接メール等で事前に連絡が取れたら確実な情報が届いて準備がスムーズにできると思いました。最後になりますが、このような機会を与えていただき、我が子の成長にも大きな影響を与える貴重な経験が出

来たことをとても嬉しく思います。ありがとうございました。

日独同時交流を終えて

関東Ⅱ(埼玉県) 関口 和美

日独スポーツ少年団交流事業ではホームステイ受け入れとして大変お世話になりました。受け入れにあたり生活習慣や言葉など心配なことは多々ありましたが、事前の会議等、県や町の職員の方々のご協力で安心して迎え入れることができました。

言葉については、英語は私たちより上手に会話できるので、ほとんど問題なく過ごせました。私たちは難しいことはポケトークを使い、ドイツ語と日本語でやり取りをしましたが次男は頑張って英語で会話していました。最初は慣れずに大変そうでしたが、日が経つにつれ上手にコミュニケーションを取れるようになりました。

1 日フリーの日は、次男が東京見学に連れて行き皇居、浅草、秋葉原などを観光して昼食はラーメンを食べたようです。夕食はお寿司にチャレンジしてみると言うので家族で食べに行き、中トロを食べてみましたがやはり生の魚は得意ではないようでした。(メインは鶏の唐揚げを食べていました！)

他にも色々チャレンジしましたがダメなものはダメ、とはっきり言ってくれる子だったのでこちらも助かりました。

家族参加のバス旅行では皆でワイワイと楽しい一日を過ごすことができました。昼食ビュッフェも好きなものを食べることができ、たくさん食べていました。ドイツ人はあまり野球に興味がないようでしたが、実際に球場で観戦してみたらとても楽しかったと喜んでいました。

最後の夜は家族でゆっくり、の予定でしたが次男がフットサルのグループに連れて行く予定をたてていたので忙しく夕食を食べ出かけていきました。地元のおじさん方と一緒に楽しんできたようです。汗びっしょりで帰ってきたので洗濯して翌日の帰り支度も忙しかったです。

終わってみればあっという間の 1 週間、確かに疲れましたがとても充実した時間を過ごすことができました。次男も「俺もドイツに行きたい！」と言っています。このような機会を与えてくださり感謝いたします。

最後に.....

1 週間使った部屋はベッドもきれいに整えてあり、ゴミもまとまっていました。

マータと過ごした夏 関東Ⅱ(茨城県) 藤本 弥緒

今回、私たち家族がホストファミリーとして海外の方を受け入れ、数日間共に過ごし、ふれあうのは初めての経験

でした。英語が好きで幼い頃から留学に行きたいという夢がある私にとっても、貴重で素晴らしい経験となりました。

今回、我が家に来てくれたマータは、とても笑顔が素敵で明るく気さくな子でした。マータが来日する以前からメールや SNS を通し連絡を取っていたので、初対面の日は緊張しましたが、会ってすぐに仲良くなれました。5日の日には家族みんなでさしまの祭りに行き、初めて金魚すくいを見た彼女は、すくった金魚を持ち帰ることにとても驚いていたので、「挑戦してみたい？」と聞くと、苦笑い「遠慮しておくね」と言っていました。

翌日のファミリーデーの日には、日光東照宮と華厳の滝に行きました。マータは日本の宗教や文化などにとっても興味があり、色々なことを質問してくれました。また、私たちから質問をすると、彼女の家族やドイツの文化などについて写真や動画を見せながら教えてくれました。日本に来る前に好きな日本食は何？と聞いた時に、餅が好き。と言っていたので、東照宮にある大福屋さんに行きました。最初は口に合うか心配でしたが、マータは抹茶の大福を食べて笑顔で美味しいと言ってくれました。8日の夜には彼女からメクレンブルクの紹介本、紅茶やお菓子、パスソルトなどのプレゼントを貰いました。改めてドイツという国の素晴らしさを知れたと共に、もっと深くドイツについて知りたいと強く感じました。9日の夜には私たち家族から彼女にプレゼントを渡しました。私と妹はマータに手紙とおそろいのブレスレットをあげました。ドイツに帰った後もそのブレスレットをつけてくれているのを SNS で見て、とても嬉しく思いました。

マータと私は、いつか二人でヨーロッパ旅行に行きたいという話をしました。その話を覚えてくれていた彼女は、お別れをする日に「私たちのヨーロッパ旅行は必ずいつか決行されるからまた会おうね」と言ってくれました。

6日間という短い期間ではありましたが、ドイツの「文化・伝統」「価値観・考え方」や「日本とドイツの相違点・共通点」の多くを発見し、異文化理解を深めることができました。

今回、貴重な体験をさせてくれた市の職員のみなさん、日本に来てくれたドイツ団のみなさん、受入れの環境を作ってくれた両親にとっても感謝しています。今回の経験を機に、これからもより国際交流に力を入れていきたいです。

スポーツ少年団ホームステイ感想

北信越(石川県) 神尾 政孝

マックスは、元々交流会の参加を希望していたが、コロ

ナ禍でストップしている間に参加できる年齢が過ぎていたが、団のほうで年齢を緩和すると連絡があり、その場で日本行きを決めたそうです。

我が家では妻が付き添いで上の子二人が全国大会参加のため不在であり、私と下の子2名でのおもてなしとなり心配していましたが、すぐに打ち解けました。

親が兼業でぶどう農園をしているので仕事の休みの日といっても、草刈りなどすることがたくさんあるので都会の人のように毎回休日にしたいことができるわけでない、親戚の子供が何人も近くにおりいつも遊びにくるので我が家の騒がしいのが落ち着く、など自作の写真集を見せながら話してくれました。

食べ物の好き嫌いを聞くと「東京でホテルの朝食バイキングで日本人がみんな持っていくカップに入った納豆だけはダメ、食べれなかった、チャレンジはしたんだけどね」と笑いながら言い「でもドイツは基本、酸っぱいかしょっぱいかしか無いんだよ」とも教えてくれました。

子供たちは言葉は通じていないはずなのに雰囲気でわかるのか、一緒に笑ったり「マックス行こう」と手をひいて歩いているのを見て驚きました。人見知りの次女が変わるきっかけをくれたのもマックスのようです。それだけ彼には惹きつけられる優しさがありました。

「輪島の朝市がみたい」とのことで行きました。家族用に日本酒と自分用に下駄を買い、千枚田では下まで降りて一時間以上楽しみました。子どもたちも楽しんだようです。田んぼも気になったようで、うちの田植え機などを見せると、納屋の匂いが「ドイツのうちのと一緒だ、落ち着く」と言ってくれて「ドイツと同じ匂いだった」とみんなであつたのもいい思い出になりました。

最終日の夜、我が家のために6人で遊べるボードゲームなどをお土産にいただきました。事前にホームステイ先の情報を聞いて想像してから購入したそうです。遊び方を教えてもらいながら夜遅くまで楽しみました。

翌朝、子供たちが「もう泊まらないの？」と私とマックスに聞き、マックスも表情でわかったのか悲しそうでした。その後のお別れ会もお互い時間が短じか過ぎて「足りないね」と話しました。別れ際、「またこんどね」と言う言葉をドイツ語でも英語でも日本語でも言いました。マックスは「さようなら」と言う言葉自体が永遠の別れに感じるの嫌いだそうで日本語の「さようなら」も「嫌だ使わない」と最後まで使いませんでした。

偶然マックスがホームステイで我が家に滞在して、たった3日でしたが、最高だったと言われた時にうれしい気持ちと寂しい気持ちを感じたのを思い出します。

言語や文化の違いはありますが、通じ合えるものなんだ

と子供と一緒に学べたことが受け入れをして本当によかったと思います。

スポーツ少年団ホームステイ感想

北信越(長野県) 長岡 香里

今回初めてドイツの学生さんを受け入れるにあたり、家族みんなで準備をしてきました。まず言語に関しては、夫が若いころドイツの工房で少し学んでいたこともあり、「ドイツは…」とよくドイツの話を聞いていましたので、娘もドイツに興味を持ち、ドイツ語を少し学んでいました。二人はサリナ先生、アンナさんとドイツ語を思い出しながら会話しようと頑張っていました。私は外国語は苦手です。話すことはできませんが、色々な方とコミュニケーションをとるのは好きで、今は Google 翻訳という素晴らしいものがあるので、何とかなる…と思っていました。おかげさまで Google 翻訳による翻訳ミスで小さな誤解もありましたが、そこはお互い表情豊かに分かり合おうとする時間も楽しかったです。

食事は、母とメニューをあれこれ考えました。できるだけ食べやすく旬の日本ばいものをと、最初は母の自慢の巻きずしと私はポテトコロッケを中心におかずを考えていました。受け入れる学生さんの情報が届き、ベジタリアン、魚は食べないと言うこと、ドイツの方は海藻類は苦手ということから、最終メニューは、いなり寿司、野菜の天ぷら、トマトバジルサラダ、冷たいジャガイモスープ、鶏のから揚げ、ポテトフライ、トウモロコシ、煮物に決定しました。煮物以外は本当によく食べてくれました。前日までの様子から女子は小食のようです、とのことでしたが、おふたりとも「おいしい、おいしい」と、1.5人分以上は食べてくれて、母と「よかったね」と喜び合いました。

今回の受け入れは私たち家族にとっても、すてきな夏の思い出になりました。こんな機会を与えてくださり、ありがとうございました。

はじめてのホストファミリー

東海(静岡県) 戸塚 志穂

自分が中学生の時にアメリカへホームステイをした経験があったので、息子にも中学生になったらホームステイを経験させたいと思っていました。スポ少からドイツの子たちの受け入れの話を聞き、息子の経験値をあげるチャンスだと思い息子へ相談しました。

息子はホームステイというのがどんなものか想像できなかったようで、ドイツ人が自分の家にくると想像ができず最初は拒否をしていましたがきっと家に来てくれたら最後は帰らないでほしいとなるから受け入れてみようと言

得しました(笑)。

ドキドキの初対面は、我が家に来てくれる 2 人が笑顔でテーブルで待っていてくれ、息子の大好きな ONE PIECE と呪術廻戦のネームプレートを首にかけてくれたのですぐにコミュニケーションがとれました。対面式のあと、息子と一緒にミニバスの練習にも参加してくれて、一気に距離が縮まりました。

初日は、お風呂の湯船の入り方など自分が常識だと思ったことが伝わらず、朝食の好き嫌いがあるようで苦労しました。

2 日目は、お迎え後に海へ行き、そこから掛川城へ向かい、掛川城から袋井の花火をみました。2 人とも海、城に感動してくれて家族に写真を送っている姿が微笑ましかったです。

ファミリーデーの日曜日には、菊川ミニバスの練習と BBQ に参加してもらいました。子供たちとのミニゲームでは、ダンクをしてくれ大人も子供も大興奮しました。練習後の BBQ では、水鉄砲合戦をやり 2 人とも子供達と大はしゃぎで楽しんでくれました。

お別れの見送りでは、息子が 2 人と離れたくなく大号泣で、大人までもらい泣きしてしまいました。あまりにも号泣で離れないので品川のきよならパーティーへ行けば最後に会えるからと納得させたほです(笑)

品川でも再会からうれし泣きをして、最後はやっぱり大号泣でしたが「いつかドイツへホームステイに行くから、2 人の家にホームステイをさせてね」と約束をして別れました。

5 日間でしたが、息子にとっては最高の夏休みのイベントになりました。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

初めてのホームステイ受け入れ

東海(三重県) 吉本 敬一

今年から息子と一緒に習い始めた明和柔道教室を通じて、スポーツ少年団でのドイツ交流があるのを知りました。

普段、妻が英会話を習っていることに加えて、私自身も海外との文化交流に興味を持ち続けていたので、迷いなくこの機会に立候補しました。

過去にも旅行などで訪れた様々な国の友人達を会食に我が家へ招いたことはありましたが、ホームステイ先としての経験は初めてだったので、当日までは宿泊してもらう部屋の準備に追われながらも、家族で経験できる国際交流を楽しみにしていました。

受け入れ初日からほとんどの日程を家族共に参加しま

したが、全体的な感想はとにかく旅程が過密で観光地から観光地へと移動に次ぐ移動が重なっていたので、ファミリーデー以外のホストファミリーとしての時間は、朝食と夕食のひとつが主に交流する時間だったように感じました。

あとは旅程の為にゆっくり休息をとってもらうことを念頭に家で時間を過ごしました。

見た目はとても大柄で一見すると目をひくドイツの少年達でしたが、旅行の様子を見ていると普通の17歳のスポーツ少年と何も変わらないことに気付きました。主にコミュニケーションの方法は私の拙い英語でしたが、我が家で受け入れたドイツ人少年は祖父がアメリカにルーツがあるらしく、わかりやすくも流暢な英語を話してくれて、家族共に英語を話す機会に恵まれ、とてもよい言語交換ができました。また英語だけではなく今回のドイツの少年たちが興じているスポーツを通じて交流できたことも得難い経験だったように感じました。

それから彼が晩ご飯の後に、生まれ育ったドイツのヘッセンの街のことや、バスケットチームのこと、仲の良い友人、家族のことを写真と共に話をしてくれました。遠く離れた国へ息子を旅させているドイツに住む彼のご両親の心境を想像して、たった数日間とはいえ彼にとっての日本の受け入れ家族になれたことに不思議な縁と小さな感動を覚えました。

受入家庭感想文

東海(岐阜県) 下野

記念すべき第50回日独スポーツ少年団同時交流にドイツ団の受入れ家庭として携わることができ、無事に全日程を終えた今、安堵感と満足感、充実感、そして喪失感、さまざまな感情が入り乱れていることを実感しています。

自身が同交流で渡独した第27回は和独辞典を持参し交流の全てが必死だったことを思うと、翻訳アプリの性能が向上したスマホを片手にコミュニケーションを深めやすくなったことで向き合うポイントが変化したこと、そして、準備をしているときのワクワク感や交流の楽しさ、別れる際の寂しさは、辞書が翻訳アプリになろうが、交流の場が日独を問わず、一緒に過ごした時間はいつの時代もかけがえのないものであり不変であることを実感できたことを嬉しく思います。

最後にモリスを笑顔で見送ることができた息子、英語を学びたいと言いつつ妻の様子からも、この交流が我が家にとって重要な事業であったことは間違いありません。

コロナ禍を乗り越え、交流を継続して下さった関係の

皆様には心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

ホームステイ受け入れで得たもの

中国(鳥取県) 稲田 優子

この度、ホームステイの受け入れを初めて体験しました。来られたのはノーベルトさんという69歳のドイツ人の男性でした。なるべくリラックスして過ごしていただきたいという思いから、お部屋はベッド、朝食は私たちがいつも食べているパン食を準備しました。

ところが、我が家に入るなり家の様子にまず驚かれました。典型的な日本的なものを期待されていたようなのですが、リビングルーム、キッチン、トイレ、ゲストルーム、すべてがヨーロッパ調だったからです。唯一、ノーベルトさんが気に入った日本風のものは、「引き戸」でした。これに感動されるとは全く想像していませんでしたので、わたしにとっても驚きの再発見でした。

初日の朝食のパン食を喜んで食べてくださいましたが、「明日はぜひ日本食の朝ごはんを」と少し遠慮がちにリクエストされました。ご要望にお応えして、次の朝は典型的な和食にしました。「ありがとう」と言ってお返しに上手に箸を使って食べられました。梅干しにも果敢に挑戦し、「おいしい」と満足そうでした。日本的なものになんでもトライしてみたい、というポジティブな精神に感動しました。

ホストファミリーデーには、鳥取らしいもの、日本らしいものと思い、雨滝、観音院で日本庭園を見ながらの抹茶、渡辺美術館で刀や鎧兜の見学、昼食はラーメンを楽しみました。「何か見たいものとかありますか」とお聞きしたら、「典型的な日本の小さい集落がみたい」と、おっしゃったので、岩美町の奥の田舎の集落を歩きました。「こういうところが見たかった!」と、とても喜んでおられました。

このホームステイを通して、鳥取のよいところ、日本の伝統的なもののよさを再発見できました。

一生の中で人は二度会う

中国(広島県) 岩見 千穂

「初めての日独同時交流受け入れは家族全員にとって必ず良い経験になる」と、思い切って受け入れを決めたわが家。しかし、「ドイツの子どもたちがわが家で快適にすごせてもらえるの?」、それに「人生初めての外国人との交流」。不安と楽しみが入り混じりながら受け入れの日を迎えた。広島駅でドキドキして待つ。対面の時が来た。やはり背丈はみんな大きい、たまたなく瞳が美しく、

愛らしい子たち。わが家にはサラとフィンヤの2人の女の子が来てくれた。初日の夕食後サラとフィンヤが故郷ドイツのこと、家族や潜水競技のことを教えてくれた。言葉を流ちょうにしゃべれなくても、お互いを理解し合う気持ちがあれば通じることを実感し、感動した。翌日からは過密なスケジュールにもかかわらず笑顔で受け答えしてくれ、プログラムを一生懸命こなす姿はとてもエネルギーで印象的だった。

今回の受け入れでは、ドイツの子の素直で純粋、律義で自分の意見をはっきり言えることを知り、「ドイツの国を知りたい」、「行ってみたい」と思うようになった。そして、お別れの日。広島駅では寂しくて涙なしではいられなかったけれど、彼女たちからドイツのことわざを教えてもらった。「Man sieht sich immer zweimal im leben」(一生の中で人は二度会う)を信じ、その時を楽しみにしておく。

このたびの日独同時交流は50周年。この記念すべき年にサラとフィンヤを迎えられ、一緒に過ごすことができた。家族にとって一生の思い出ができ、感謝している。これからも日独同時交流を通じて、たくさんの方々わが家のように、「またドイツの若者と出会いたい」と思う体験をして欲しいと心から思う。

最後にドイツスポーツユースのみなさんの今後のますますのご活躍とご多幸を！また会う日まで！

第50回日独スポーツ少年団同時交流ホストファミリーとしての感想文 九州I(佐賀県) 秀島 寛子

今回、初めてホストファミリーとして、日独スポーツ少年団同時交流に参加させて頂きました。

受け入れ当日までは、初めての事だらけで不安もあり、大変緊張しておりましたが、実際にドイツ団の面々と顔を合わせてからは、刺激的な毎日であつという間の5日間でした。

我が家に来てくれた20歳の男の子は、英語が堪能で頭もよく、話していてとても勉強になりました。彼のホストファミリーとして過ごした事で、今まで考えもしなかったような事を考え、知らなかったことをたくさん知ることができました。

「なぜ日本の人はあまり英語を話さないんだろう」「なぜ日本のパスポートは世界一強いのに、あまり外国に行こうとしないんだろう」彼から投げかけられる質問の一つ一つが大変興味深く、外国から見た日本が感じられました。それと同時に、我々の生活は果たして、外国から見た際に、胸を張って見せられるものだろうか、という事も考えるきっかけとなりました。

小学生の子ども2人は、翻訳ツールを使ってコミュニケーションを図り、別れ際には「さみしい」と言って号泣するほどには、彼との生活を楽しんだようでした。

国際感覚、SDGs、文化の違い、流行の相違点など、たくさんの事を考えるよい機会を与えて頂きました。ドイツ団の皆様にとっても、有意義な時間となっていれば幸甚でございます。また、初めて「リーダー会」という会の存在も教えて頂き、親としてはいつか我が子が海外へ飛び立つ日を夢見るばかりです。

「ベジタリアン」と「いただきます」

九州I(長崎県) 鐘ヶ江家一同

我が家にドイツ人がホームステイに来る。しかも、190cm超の男子高校生。しかも、ベジタリアン。どうおもてなししようかと家族で頭を抱えていました。

しかし、いざ迎えてみると彼は“I can't eat meat and Fish”「肉と魚は食べられない」と意思表示はしっかりしているが「何食べたい？」と聞くと「あなたたちが食べたいものを食べてみたい」とさっさとしてくれるようなどこか日本人のような謙虚さを持った素敵で日本文化に興味津々な男の子でした。

お互いの家族の話や好きなスポーツ、音楽の話しながら会話も弾み、子どもたちも優しい人柄に次第に打ち解けていきました。

3日目の夜、ずっと気になっていた質問をしました。「どうしてベジタリアンなの？」と聞くと、今までの経緯を話してくれました。

彼は11歳頃までベジタリアンではなく普通に肉・魚を食べていたそうです。学校の授業やメディアで食用に狭いゲージに入れられ飼育され消費されていく動物たちを見て、ベジタリアンになったとのことでした。少なからずベジタリアンは肉や魚にアレルギー等の身体的や宗教的な理由がありベジタリアンになるのだという先入観を持っていたため、彼の意味・考えてベジタリアンになったということに驚きました。同時に食べ盛りの彼が肉魚を断ち、命を尊重するベジタリアンとして生活することを選んできたことに感動しました。また、彼のベジタリアンになるという選択を家族が尊重し、別でベジタリアン食を準備しているというドイツでの環境にも感慨を受けました。

日本では、食事前に命をいただき感謝する意味で「いただきます」という言葉を使います。形は違えど、双方命を思いやる姿勢だと思います。現状子供たちにベジタリアンを進めることはできませんが、命を大切に「いただきます」という言葉の意味を深く一緒に考えていけると感じました。

今回のホームステイで親もたくさんの刺激を受けましたが、島原外港で号泣しながら彼らとの別れを惜しむわが子を見て、貴重な経験ができたのだと思いホームステイの話を受けて本当に良かったと感じました。我が家にとって忘れられない夏になりました。

またいつか世界のどこかで彼らと再会できることを楽しみにしたいと思います。

日独交流が終わって 九州Ⅰ（福岡県） 帖佐 亮利

僕は、中学2年生で初めてホストファミリーになりました。ホストファミリーはとても良い経験になっていろいろと考え方が変わりました。

ホストファミリーになって気付いた事の一つ目は、コミュニケーションの仕方です。日独交流の前は、「イッテQ」というテレビ番組の出川さんみたいに、知っている単語を言っただけで大丈夫と思っていました。だけど実際に話をしてみたら、早すぎて何を言っているのかわからな過ぎて、自分の事を笑ってしまうほどでした。それでも頑張って、自分から話そうとしたけど英語での会話はできなかったです。これから先は、日本でも英語を話せないと生きていけないと考えが変わりました。

二つ目は、ホストファミリーの意味についてです。日独交流の前は、「ホストファミリーなんて、ただ泊めるだけだろう！」と思っていたけど、日独交流が終わって感じたことは、ホストファミリーはドイツの団員をただ家に泊めるだけじゃないという事です。同じ家に住む人としてドイツの団員が安心して過ごすために、沢山会話をしてお互いを受け入れることがホストファミリーの役目だと思いました。たとえば言葉が通じなくてもお互いの表情やジェスチャーで分かり合える事もどんどん増えていきました。「恥ずかしがらず、恐れずにチャレンジすること。」それほど貴重な体験だとあらためてわかりました。

次に、日独交流の内容です。ドイツ団の人達と同じ宇美町のスポーツ少年団のみんなと和太鼓や弓道などを体験しました。いままで体験した事のない事ばかりで、忘れることができない思い出となりました。その中でも一番印象に残ったのは、和太鼓体験でした。暑い体育館の中でドイツのみんなと汗を流して、一つの音になるまで太鼓をたたいた時のあの音は一生忘れられません。そして宇美太鼓の方々の和太鼓の演奏は、心が躍るような感じで、とても不思議な気持ちになると同時に、空気が震えたのをこの身で感じ取りました。だからこそ、日本の文化である和太鼓等の体験は、ドイツ団にはとてもいい経験だったと僕は思いました。

そして、ついに空港での見送りです。最後は、とても悲

しい気持ちと感謝の気持ちでいっぱいでした。空港では、何とも言えない気持ちのままでしたが、悔いが残らないようにお別れをしようと思いました。しかし本当にサヨナラの時は、僕は手を振ることしか出来ませんでした。しかも側に行くことも出来ませんでした。せめて最後にお別れと再会の意味を込めて、ハグや握手をしたかったです。悔いが残らないようにと思いましたが、実際にはサヨナラの際は体が動きませんでした。だからこそ、またこのような機会があれば、悔いのないようにチャレンジしていきたいと思います。

日独同時交流を終えて 九州Ⅱ（鹿児島県） 徳永家

「ホストファミリーの募集があるけどどう？」と、友人からの情報があり、「いや、うちは1人しか英語しゃべれないから無理でしょ」という軽い会話が私たちのホームステイ受入へのきっかけでした。

私が小さい頃、ホームステイ受入を何回かしていたので楽しさも知ってはいたが「英語」というハードルがなかなか高く受入に踏み出せませんでした。英語を話せる長男に「ホストファミリーとしてドイツからの受入先の募集があるらしいよ」と伝えると、「いやいや、絶対受入でしょ、早く応募してよ！」と即答。長男以外は英語に不安があったが「なんとかなる」と即日応募しました。ホストファミリーの結果が届くまで待ち遠しく、いざ決定通知を受け取るとみんな大喜びでした。

短い日数の中で何ができるか、何を体験させてあげられるか、何にに応じてあげられるか家族で話し合い、マリーが我が家にくるのを楽しみに待ちました。

ホームステイ初日、お迎えには英語に不安 MAX の私と7歳の次男で行きました。翻訳アプリのお陰でなんとか会話を繋ぎ、頼みの綱の長男が帰宅するのを待ちました。長男が帰宅後はアプリも使わず長男を通してマリーとスムーズに会話ができ、ドイツの事、家族の事など色々教えてもらいました。ドイツでは、花火が珍しいとの事で、それならばと霧島の夏祭りに浴衣を着て参加しました。浴衣もお祭りも楽しみ、打上花火を間近で見れたことにとっても感動していたので私たちも嬉しくなりました。

家ではおにぎり作りや習字、手持ち花火、カードゲームなどをしたり、お誕生日が近いマリーの誕生日会をしたりしたのですが、なんでも笑顔で楽しんでくれたので私たちも本当に楽しかったです。

言葉も習慣も文化も違う場所でも、素直に明るく楽しんでくれたマリーと出会えたことはとても大きな経験になりました。お別れの時はとても寂しかったけど、今も長男・長女はマリーとメールで連絡を取り合っているようで

す。こういう素敵な繋がりを作ってくれた今回の事業に
ありがたい気持ちでいっぱいです。

日独同時交流を終えて

九州Ⅱ(宮崎県) 大坪 学嗣

今回、日独同時交流事業で三股町がドイツ派遣団受け入れると聞き、国際交流のいい機会だと、てを上げました。どのような子が来るのか楽しみである反面、言語の障害をどう乗り越えるかが一番の不安材料でした。事務局から頂いたドイツ語の冊子に目を通し、「おはよう」「こんにちは」等の挨拶程度は覚えましたが、ドイツ語は非常に難しいと感じました。日本に来てよかった、また来たい、と思ってもらえるにはどうしたらよいか家族で話し合いをしました。限られた時間の中で、できることは多くはありませんでしたが、少しでも日本の文化に触れてもらえるよう考えました。レセプションで受入れること顔を合わせ、ドイツ語と英語、翻訳アプリを使って挨拶をしました。名前はティム・シュタイナー君、とても好印象でした。レセプションの中でできる限りのコミュニケーションを図り終わるころには、とても仲良くなりいいスタートが切れたと感じました。三股町の通訳として同席した職員から、相性が良い、と言われティム君と2人でテンションが上がりました。

ホームステイ受入当日、最初に訪れたのは温泉でした。温泉内ではジェスチャーを使いルールを教えました。彼は電気風呂を見て、とても驚いていました。日本では見慣れた風景でしたが、彼にとって電気風呂は衝撃だったようです。実際に入って更に驚いていました。一緒に三股町に来ていたメンバーに電気風呂の話を興奮気味に話していました。夕食は、三股町の創作料理店で家族と共に食べました。初めて食べる料理や、日本食に舌鼓を打ち、「こんなに美味しいものは初めて食べた」と言っていました。彼の泊まる場所は、私の家で日本家屋だったので、彼は目を輝かせ、襖や障子、柱や天井など、たくさん写真を撮っていました。短い時間でしたが、とても楽しい時間を過ごすことができました。また、少しでも彼の今後の人生の糧になってもらえたら幸いです。

第Ⅲ章 日独スポーツ少年団同時交流 50周年記念事業 1974-2023



50 周年記念式典

【日本開催式典】

1974年に始まった日独同時交流は、2023年で50周年を迎えることができました。長年にわたり、本交流にお力添えいただいた皆様に心から感謝申し上げます。この交流は、両国の青少年およそ100名が互いの国を訪れ、約2週間にわたりスポーツ交流や文化体験、青少年同士のディスカッションを行うものです。50年にも及ぶこの交流には、これまで合計1万人以上が参加しました。ホストファミリーや各地のこどもたち、通訳の皆様、交流実施のために汗を流した様々な関係者の皆様を含めば、この交流への参加者は数十万人にも及ぶでしょう。

本交流の発展にご尽力いただきました皆様に感謝の意を表し、7月27日に国立オリンピック記念青少年総合センターにて記念式典を開催しました。式典には、駐日ドイツ連邦共和国大使のクレメンス・フォン・ゲッツェ様をはじめ、国内外からたくさんのゲストにお越しいただきました。式典では、ゲストの皆様へ過去の思い出や未来への展望をお聞かせいただいたほか、この交流を長年にわたりサポートいただいた高橋範子様と通訳の皆様へ、特別功労者表彰として感謝を伝えました。

また、日独同時交流50周年記念事業の一環として、ドイツスポーツユースリーグと記念誌を共同制作しました。記念誌はJSPOホームページで公開しています。是非ご覧ください。

日独スポーツ少年団同時交流 50 周年記念式典

次第

日時: 令和 5 年 7 月 27 日 (木) 15:00～17:00 (予定)

会場: 国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 大ホール

- オープニングアトラクション スポーツ少年団による和太鼓の演奏
協力: 鴻巣和太鼓会 (埼玉県鴻巣市)
万葉の里太鼓スポーツ少年団 (埼玉県児玉郡美里町)
- 開式の挨拶 日本スポーツ少年団本部長 益子 直美
- 主賓挨拶 駐日ドイツ連邦共和国大使 クレーメンズ・フォン・ゲッツェ 様
- 祝辞 ドイツ連邦議会スポーツ委員会 フランク・ウルリッヒ 様
- 祝辞 ドイツスポーツユースリーグ副本部長 ベニー・フォルクマン 様
- 祝辞 スポーツ庁参事官 (国際担当) 八木 和広 様
- 特別功労者表彰
- 日独スポーツ少年団国際交流協定書〔2024-2027〕調印式
- 閉式の挨拶 日本スポーツ協会専務理事 森岡 裕策

※本式典は、通訳を介し日本語・ドイツ語の両言語で進行します



鴻巣和太鼓会と万葉の里太鼓スポーツ少年団によるオープニングアトラクション



祝辞を述べるクレメンス・フォン・ゲッツェ駐日ドイツ連邦共和国大使



高橋範子氏（中央）への特別功労者表彰。右は益子直美日本スポーツ少年団本部長、左は萩原智子同副本部長。



通訳の皆様への特別功労者表彰



日独スポーツ少年団同時交流50周年記念誌

URL: <https://x.gd/P6nxy>



【ドイツ開催式典】

8月12日にフランクフルト・レーマー市庁舎の皇帝の間にて行われたドイツ側の式典には、日本とドイツの派遣団員が出席したほか、これまで本交流に携わったドイツ国内の多くの関係者が集まりました。

神聖ローマ帝国の歴代皇帝の肖像画が並び、ドイツナショナルチームの祝勝会なども行われる会場がピアノ三重奏による厳かな雰囲気にも包まれるなかで、式典は始まりました。フランクフルト市議会を代表してクラウス・メビウス様からの歓迎のお言葉、在フランクフルト日本国総領事館総領事の麻妻信一様からご祝辞をいただいた後に、両国のスポーツ少年団本部長からこれまでの交流に携わった全ての方々への感謝が述べられました。

また、日本での式典と同様に、50年にわたって本交流に尽力された高橋範子氏の功績が紹介されるとともに、青少年代表として日本団員が日頃のスポーツ少年団活動の成果として少林寺拳法の演武を披露するなど、本交流のこれまでとこれからが感じられる素晴らしい式典となりました。



式典会場となったレーマー市庁舎



祝辞をいただいた在フランクフルト日本国総領事館総領事
麻妻信一氏



少林寺拳法演武を披露した日本団員ら



日独両本部長によるペナント交換。
右はシュテファン・ライドドイツスポ
ーツユーゲント本部長、左は益子直
美日本スポーツ少年団本部長

第Ⅳ章 実施概要報告



(1) 実施要項

第50回日独スポーツ少年団同時交流実施要項

本交流は、日独両国のスポーツ少年団の青少年および指導者の相互交流により友好と親善を深め、国際的能力を高めると共に、両国の青少年スポーツの発展に寄与することを目的に、2021年に調印した「日独スポーツ少年団国際交流協定書」にもとづき、次のとおり実施するものである。

1. 主催

公益財団法人日本スポーツ協会 日本スポーツ少年団
道府県体育・スポーツ協会 道府県スポーツ少年団
ドイツスポーツユエント(dsj)

2. 後援

スポーツ庁(予定)

3. 期日・期間

〔派遣〕

2023年7月27日(木)～8月13日(日)/日本着 8月14日(月) 17泊19日

日本団事前研修会:5月20日(土)～21日(日)(オンライン/参加必須)

日本団集合・結団式:7月25日(火)～27日(木) 2泊3日〔都内〕 / 27日(木)日本出発

※日本団集合日は7月26日(水)に変更となる場合がある(調整中)

〔受入〕

2023年7月26日(水)～8月11日(金)

〔50周年式典〕

2023年7月27日(木) 日本開催:国立オリンピック記念青少年総合センター

2023年8月12日(土) ドイツ開催:レーマー(フランクフルト旧市庁舎)(予定)

4. 参加人数・グループ編成

〔派遣〕 日本団:90名〔10グループ 87名(団員77名、引率指導者10名)、団長団3名〕

グループ	① 北海道	② 東北	③ 関東Ⅰ	④ 関東Ⅱ	⑤ 北信越	⑥ 東海	⑦ 近畿	⑧ 中国	⑨ 四国	⑩ 九州	小計	団長団	合計
団員	5	8	7	9	9	7	9	7	8	8	77	3	90
引率指導者	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10		
合計	6	9	8	10	10	8	10	8	9	9	87	3	90

〔受入〕 ドイツ団:90名〔12グループ 87名(団員74名、引率指導者13名)、団長団3名〕

グループ	① 北海道	② 東北Ⅰ	③ 東北Ⅱ	④ 関東Ⅰ	⑤ 関東Ⅱ	⑥ 北信越	⑦ 東海	⑧ 近畿Ⅰ	⑨ 近畿Ⅱ	⑩ 中国	⑪ 四国	⑫ 九州Ⅰ	⑬ 九州Ⅱ	小計	団長団	合計
団員	5	5	5	6	7	8	7	4	4	6	8	5	4	74	3	90
引率指導者	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	13		
合計	6	6	6	7	8	9	8	5	5	7	9	6	5	87	3	90

5. 共通テーマ

「スポーツ×SDGs」～スポーツが拓く社会の持続可能性～

6. 日本団派遣

(1) 参加資格

〔団員〕 以下の条件を全て満たし、道府県スポーツ少年団本部長が推薦する者

- ① 令和4(2022)年度にスポーツ少年団に登録しており、令和5(2023)年度も引き続き登録する者
- ② 1999年4月2日～2008年4月1日生まれの者(派遣年度に16歳～24歳の誕生日を迎える者)
ただし、以下に該当する場合は、上記②を満たさなくても参加可とする

- 令和2(2020)年度の第47回交流申込者として、道府県スポーツ少年団から日本スポーツ少年団に推薦されていた者
- オンラインで開催した令和3(2021)年度の第48回交流および令和4(2022)年度の第49回交流参加者

③ 次のいずれかに該当する者

- 1) 日本スポーツ少年団シニア・リーダー資格保有者(令和4年度認定見込者含む)
- 2) 所定の活動単位取得者(計20単位以上)
- 3) 道府県スポーツ少年団本部長が特別に推薦する者(将来、所属道府県における日独スポーツ少年団同時交流受入をはじめとする国際交流に貢献する意欲があり、積極的に少年団活動に関わることが見込まれる者)

※ 過去に本交流に日本団団員として参加経験のある者も可とする

※ 各グループについて、当該グループ構成県から人数枠を上回る団員の推薦希望があった場合、または当該グループの推薦団員数がグループ成立条件(指導者1名、団員3名以上)を満たさない場合の対応については、各道府県からの推薦状況を踏まえ日本スポーツ少年団にて決定する。なお、全体の申込状況に鑑み、団員は本人が所属するグループとは別のグループから本交流に参加する場合がある。

- ④ インターネットによる通信環境および通信端末(パソコン・タブレット推奨)を有し、オンライン形式でのグループワーク、活動等に積極的に参加する意欲のある者。
- ⑤ 協調性があり、集団生活において規律を守ることができる者
- ⑥ 英語またはドイツ語等を使い、積極的に現地でのコミュニケーションを図る意欲のある者
- ⑦ 将来、スポーツ少年団指導者として活躍が期待できる者

〔引率指導者〕 以下の条件を全て満たし、道府県スポーツ少年団本部長が推薦する者

- ① 令和4(2022)年度にスポーツ少年団に登録しており、令和5(2023)年度も引き続き登録する者
- ② 令和5(2023)年度にスポーツ少年団に「指導者」として登録している者、または「役員」、「スタッフ」で登録しており、日本スポーツ協会公認スポーツ指導者資格(「JSPO 資格」)を保有する者(日本サッカー協会公認C級コーチライセンス以上、日本バスケットボール協会公認C級ライセンス以上の資格を保有する者、令和4年度JSPO資格養成講習会受講修了者を含む)
- ③ 日本を代表する立場の者としてふさわしい人格と行動力を有し、ドイツ滞在中の団員の心身両面のケアと成長をサポートできる者
- ④ インターネットによる通信環境および通信端末(パソコン・タブレット推奨)を有し、オンライン形式でのグループワーク、活動等に積極的に参加する意欲のある者
- ⑤ 英語またはドイツ語等を使い、積極的に現地でのコミュニケーションを図る意欲のある者
- ⑥ 原則として20歳以上、65歳以下の者(今後もスポーツ少年団で活躍できる若手が望ましい)

(2) 新型コロナウイルス感染症対策

以下の全ての項目にご理解、ご了承いただきました上で、お申込みくださいますようお願いいたします。

- ① 本交流は、政府の方針や日本スポーツ少年団策定の「日本スポーツ少年団各種事業等における新型コロナウイルス感染拡大防止に関する基本方針」(最新版)を基に、交流に必要な感染対策を十分に講じた上で開催する。
- ② 交流実施にあたり、今後の日独両国をはじめとする各国・地域における新型コロナウイルス感染状況、日本国政府の方針(新型コロナウイルス感染症に関する水際対策措置)やドイツ出入国にかかる制限等によっては、ワクチン接種回数等に応じて、参加者に別途追加対応を求める場合がある。

- ③ また、交流期間中に新型コロナウイルスに感染した場合の重症化予防や渡航時の出入国手続きの緩和等のため、本交流に参加する日本団(団員、引率指導者)には、日本政府が認めている新型コロナウイルスワクチンを3回以上接種していることを推奨する。
 - ④ 日本スポーツ少年団にて加入する海外旅行保険の適用外の内容あるいはドイツ滞在中に新型コロナウイルスに感染した場合(感染疑いの場合を含む)、現地での療養・隔離措置等による帰国の遅れや追加経費の負担が生じる可能性がある。
 - ⑤ 新型コロナウイルス感染症に関する対応(詳細)については別紙「ドイツ渡航にかかる検疫措置等について」(令和4年12月20日時点)をご参照ください。
- ※⑤について、今後内容に変更が生じた場合は参加者、推薦団体へ随時連絡する

(3) 経費

負担金 1人 25万円

- ① 海外旅行保険代、ドイツ滞在中の基本滞在費 宿泊費、食事代、施設入場料等を含む
- ② 次のものは参加負担金に含まれず、個人負担となる。
 - 1) 渡航手続き パスポート 取得等 に要する経費
 - 2) 居住地から日本団集合場所(都内)まで、成田空港から居住地までの交通費
 - 3) 現地における各グループ内共通経費及び個人的諸費用

(4) 事前研修会

- ① 日本団事前研修会(オンライン/参加必須)

〔期 日〕 2023年5月20日(土)～21日(日) 午前中～夕方頃を予定(調整中)

※特別な理由がある場合を除き、事前研修会不参加者の派遣は原則認めない
- ② グループ別事前研修会

日本団事前研修会終了後、共通テーマ・その他準備に関してさらに研修を積むため、各グループの引率指導者を中心にグループ別事前研修会を実施する。

(5) 日本団集合・結団式

〔期 日〕 2023年7月25日(火)～27日(木)2泊3日 / 27(木)日本出発
 〔集合場所〕 国立オリンピック記念青少年総合センター

(6) 推薦方法

別に定める推薦要領に基づき、道府県スポーツ少年団から日本スポーツ少年団に推薦する令和2(2020)年度推薦者(新型コロナウイルスの影響により開催中止)、令和3(2021)年度および令和4(2022)年度オンライン交流参加者を優先して推薦するよう配慮すること。

(7) 推薦期限

2023年3月13日(月)必着

(8) 海外旅行保険

日本スポーツ少年団は本交流期間中((前後の各移動日を含む)、日本団全員を被保険者とした海外旅行保険に加入する

〔補償内容(予定)〕

傷害死亡・後遺障害	20,000 千円(2000 万円)
傷害治療	3,000 千円(300 万円)
疾病治療	500 千円(50 万円)
賠償責任	5,000 千円(500 万円)

(9) 参加の流れ(日本団の参加決定から日本帰国までの流れ)

～3月13日 団員・引率指導者推薦(道府県スポーツ少年団→JJSA)
～4月上旬頃 決定通知送付(JJSA→推薦道府県スポーツ少年団、参加者)
5月20日～21日 日本団事前研修会(オンライン/参加必須)
6月～7月 グループ別事前研修会
7月25日 日本団集合[国立オリンピック記念青少年総合センター(オリセン)]
7月26日 全体・グループ別ミーティング、結団式(予定)
7月27日 結団式、日独同時交流50周年記念式典(オリセン)、日本出発(羽田空港)
～8月14日 全体プログラム(前半)、地方プログラム、全体プログラム(後半)
ドイツ出発(8月13日フランクフルト空港→日本着:8月14日羽田空港)

7. ドイツ団受入

(1) 受入日程

① 全体プログラム(前半)[担当:日本スポーツ少年団]

[期 間] 2023年7月26日(水)～7月28日(金)(※7月27日(木):50周年記念式典に出席)

[場 所] 東京都

② 地方プログラム[担当:受入道府県スポーツ少年団およびそのグループ内]

[期 間] 2023年7月28日(金)～8月9日(水)

③ 全体プログラム(後半)[担当:日本スポーツ少年団]

[期 間] 2023年8月9日(水)～8月11日(金)

[場 所] 東京都

(2) 地方プログラム[担当:受入道府県スポーツ少年団およびそのグループ内]

地方プログラムの実施にあたっては、各受入グループ幹事県を中心とした委員会を設け、その計画と実行にあたる。

(3) 経費

- ① 「全体プログラム(前半・後半)」期間中の受入経費については、日本スポーツ少年団が負担する。(各グループの離散・集合費含む)
- ② 「地方プログラム」期間中の受入経費については、受入道府県スポーツ少年団が負担する。なお、日本スポーツ少年団が手配する受入通訳の謝金については、各グループ幹事県より提出される通訳業務報告に基づき、日本スポーツ少年団が負担する。

8. 個人情報及び肖像権の取扱いについて

(1) 日本スポーツ協会は、本交流開催にあたり、以下の目的のために個人情報を取得する。

- ・ 交流の申込み手続き及び参加資格審査
- ・ 交流運営上必要なプログラム編成及び各種資料作成
- ・ 交流運営上必要な申込手続き
- ・ 報告書の作成
- ・ 交流運営に必要な連絡

(2) 日本スポーツ協会は、個人情報を以下のとおり共同利用する。

共同して利用される個人情報の項目	・参加申込書に記載されている情報 ・交流中に取得した情報（交流中に撮影した写真及び映像）
共同して利用する者の範囲	●主催・主管団体 ・公益財団法人日本スポーツ協会 日本スポーツ少年団 ・道府県体育・スポーツ協会 道府県スポーツ少年団 ・ドイツスポーツユエグント(dsj)、dsj 加盟団体 ●参加者が申込手続きを行う団体 ・当該道府県スポーツ少年団 ※当該参加者が申込手続きを行う道府県スポーツ少年団以外には提供されない ●参加者の滞在先 ・ドイツ滞在中のホームステイ先
共同して利用する者の利用目的	●主催・主管団体 ・上記(1)に記載の内容 ●参加者が申込手続きを行う団体 ・交流の申込手続き及び参加資格審査
個人情報の管理責任者	公益財団法人日本スポーツ協会 会長 伊藤 雅俊 東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 11 階

(3) 交流の様子は、参加申込書に記載されている情報（氏名、道府県、年齢）とともに主催者及び主管団体を通じた公開、交流関係機関・団体及び報道機関等による新聞・雑誌及び関連ホームページ等への掲載、次回交流プログラムへの掲載等で公表することがある。

(4) 交流関係機関・団体又はこれらに認められた報道機関等によって撮影された写真、映像が新聞・雑誌・報告書及び関連ホームページ、インターネット等によって掲載されることがある。

(5) 日本スポーツ協会は、本人またはその代理人から、保有する個人情報について、開示、訂正、追加、削除、利用停止、消去の請求があった場合、法令に則って、所定の手続に従い、誠意をもって対応する。また、本人から利用目的の通知を求められたときは、本人に対し、法令に則って、所定の手続に従い、遅滞なく通知する。これらの請求については、公益財団法人日本スポーツ協会ブランド戦略部(link@japan-sports.or.jp)まで連絡すること。

(6) 日本スポーツ協会の個人情報保護方針は以下 URL から確認すること。

<http://www.japan-sports.or.jp/privacypolicy/tabid/102/Default.aspx>

(2) 日本団派遣概要

① 事前研修会

2023年5月20日(土)および21日(日)に以下の日程(※表1)でZoomを用いたオンラインにより日本団事前研修会を実施した。

また、全体での事前研修会終了後、6月に各参加グループにおいてグループ別事前研修会を実施し、日本団集合日まで準備を行った。

② 日本団の行動

日本団全体、およびグループ別行動(訪問地等)は第I章に記載の通りであった。

③ 日本団の編成

日本団の編成は遠藤団長以下計58名で、団長団及び8グループとした。

グループ別編成および道府県別派遣者数は以下(※表2)の通りである。

※表1 日本団事前研修会日程

時刻	5月20日(土)		5月21日(日)		時刻
	団員	引率指導者	団員	引率指導者	
9:00					9:00
		集合・Zoom入室	集合・Zoom入室		
10:00		団長団・引率指導者MTG (45分) ※10:15～	研修プログラム(2h) ・グループでの役割分担 ・ドイツでの希望プログラム 他		10:00
	集合・Zoom入室				
11:00	開会式・オリエンテーション(30分)				11:00
	研修プログラム(30分) ・日独交流について、派遣スケジュールなど				
12:00	昼休憩(45分)		昼休憩(1h)		12:00
	レクチャー(1h) ・交流テーマ『「スポーツとSDGs」～スポーツ が拓く社会の持続性～』について (一社)SDGs in Sports 代表理事 井本直歩子 氏 休憩(15分)				
13:00	グループ別ミーティング(1h) ・交流テーマについて		研修プログラム(2h) ・グループ別事前研修会 ・グループ荷物、土産品 他		13:00
14:00					
15:00	共通確認事項説明(1h)		渡航手続き等説明(30分) (株)JTB		15:00
			事務連絡(30分)		
16:00	1日目終了	団長団・引率指導者MTG (30分)	グループリーダー・引率指導者MTG		16:00
		1日目終了			
17:00			2日目終了	団長団・引率指導者MTG (30分)	17:00
				2日目終了	

※表2 日本団編成表

グループ	構成県	引率指導者・団長団			団員(3名以上)			合計 (引指＋団員)	利用便	
		男	女	小計	男	女	小計			
北海道	01.北海道		1	1	1	3	4	5	第1便	
東北	02.青森県			2			6	8	第1便	
	03.岩手県									
	04.宮城県					1				
	05.秋田県					2				
	06.山形県					1				
	07.福島県	1				2				
	23.三重県	1								第2便
関東Ⅰ 近畿	10.群馬県			1		1	3	6	第1便	
	12.千葉県	1				1				1
	15.山梨県									
	25.滋賀県									2
	26.京都府					2				
	28.兵庫県									
	27.大阪府									
	29.奈良県									
	30.和歌山県									
関東Ⅱ 東海	08.茨城県			1		1	3	6	第2便	
	11.埼玉県	1				1				1
	21.静岡県					1				2
	22.愛知県									
	23.三重県									
	24.岐阜県						1			
北信越	16.長野県			1		1	7	8	第2便	
	17.新潟県					2				
	18.富山県									
	19.石川県		1							
	20.福井県									1
中国	31.鳥取県			1			7	8	第1便	
	32.島根県	1								
	33.岡山県					1				2
	34.広島県					1				2
	35.山口県					1				
四国	34.広島県			1		2	7	8	第2便	
	36.香川県	1				2				
	37.徳島県					1				2
	38.愛媛県									
	39.高知県									
九州	40.福岡県			1			5	6	第1便	
	41.佐賀県					1				
	42.長崎県									2
	43.熊本県									
	44.大分県	1				1				
	45.宮崎県									
	46.鹿児島県					1				
団長団	団長	1		1				1	第2便	
	総務		1	1				1	第2便	
	庶務(JJSA)	1		1				1	第1便	
計		9	3	12	19	27	46	58		

(3)ドイツ団受入概要

①ドイツ団の編成

No.	ドイツパートナー	日本パートナー	指導者・団長団		団員		合計		
			男	女	男	女	男	女	男女
1	柔道ユージェント	北海道	1	0	2	3	3	3	6
2	シュレスピツヒ=ホルシュタイン	東北Ⅰ	0	1	1	4	1	5	6
3	体操ユージェント1+フェンシングユージェント	東北Ⅱ	0	1	1	4	1	5	6
4	ヴュルテンベルク	関東Ⅰ	0	1	3	3	3	4	7
5	メクレンブルク=フォアポメルン	関東Ⅱ	1	0	4	3	5	3	8
6	バーデン	北信越	0	1	5	3	5	4	9
7	ヘッセン	東海	1 ※	0	4	3	5	3	8
8	体操ユージェント2	近畿Ⅰ	1	0	1	3	2	3	5
9	ベルリン	近畿Ⅱ	0	1	2	2	2	3	5
10	潜水ユージェント	中国	1	0	3	3	4	3	7
11	バーデン・ヴュルテンベルク	四国	0	1	5	3	5	4	9
12	ノルトライン=ヴェストファーレン	九州Ⅰ	1	0	3	2	4	2	6
13	ブランデンブルク	九州Ⅱ	0	1	1	3	1	4	5
14	団長団	JJSA	2 ※	1	0	0	2	1	3
			8 ※	8	35	39	43 ※	47	90 ※

※東海グループの指導者は体調不良により急遽来日することができなくなったため、団長団副団長として来日したMaurice Bessling氏が代行した。
したがって、実際に来日したドイツ団は合計89名であった。

②受入通訳一覧

No.	担当グループ	氏名
1	北海道	高坂 朋子
2	東北Ⅰ	村田 晃
3	東北Ⅱ	土屋 友紀恵
4	関東Ⅰ	秋山 大輔
5	関東Ⅱ	原田 公夫
6	北信越	岩間 智子
7	東海	岩間 敏之
8	近畿Ⅰ	上加 夏未
9	近畿Ⅱ	柴田 耕治
10	中国	竹之内 悦子
11	四国	竹内 優
12	九州Ⅰ	杉浦 智恵
13	九州Ⅱ	ラウラ・クルーク
14	団長団	阿部 利永子

(4) 日独スポーツ少年団国際交流協定書〔2022～2023 年〕

日独スポーツ少年団国際交流協定書〔2022～2023 年〕

日本スポーツ少年団（以下 JJSA）とドイツスポーツユース（以下 dsj）は、両組織間の国際交流を、2022 年から 2023 年までの 2 か年継続することに同意する。

この交流は 1967 年以來実施されてきており、一般青少年教育としての成果を上げてきたばかりではなく、日本とドイツ間の友好関係にも寄与してきた。

また、数多くの継続的な青少年交流のパートナーシップや姉妹都市関係がこの交流から派生している。2023 年までの両組織間の交流の実施にあたっては、1977 年より改定されてきた合意書・協定書およびそれぞれの附録の内容をふまえ、以下により協定書を締結する。

なお、2024 年以降の交流については、新たな形態での実施に向けて両組織間で協議のうえ、第 50 回目の節目を迎える 2023 年に新たな協定書を締結することとする。

1. 日独スポーツ少年団同時交流

1. 目的

交流の目的は、ドイツ連邦児童青少年計画の基準および日本スポーツ少年団の育成計画に基づいた一般青少年教育を促進することである。同時にこの交流に参加する若者たちが、両国の文化・社会・政治・経済を知ることにより、友好と親善を深め、グローバル化した世界における自分の現況と立場を認識する能力を身につけるようにすることである。

さらに、異文化適応能力の向上、青少年スポーツにおけるボランティア活動参加への動機付けを目的とする。

2. 主催

日本スポーツ少年団／ドイツスポーツユース
道府県スポーツ少年団／ドイツスポーツユース加盟団体

3. 共通テーマ

交流の目的達成と研修成果をより大きなものとするため、両組織間にて協議のうえ、「共通テーマ」を設定し、両国参加団員の研究課題とするとともに、少なくとも 2 か年継続する。

共通テーマは、様々な形態と方法によって実施することとする。

4. 事前研修

参加者は、交流の目的を達成するために、各自自己研鑽に努めなければならない。また、訪問国の理解とグループワークのため、JJSA および dsj がそれぞれ実施する事前研修会に参加する。そこでは少なくとも次の分野が扱われる。

- a) 交流の目的
- b) 共通テーマ
- c) 訪問国に関するインフォメーション（地理・歴史等）
- d) 訪問国の文化・慣習
- e) 訪問国のスポーツと青少年に関するインフォメーション
- f) 訪問地に関するインフォメーション

また、グループ指導者のために、交流の目的および指導者の役割をテーマとして研修会を別に行う。なお、受入プログラムの責任者や通訳も、交流の目的、内容、グループパートナーを理解するよう事前の打合せを行う。

5. 参加者と編成

派遣団の規模は最大 125 名とし、団長団、グループ指導者、団員にて構成される。

団長団は 3 名以内で構成し、全体を統括する。

参加団員の年齢は、15 歳から 24 歳までの範囲とする。

団長団を除く、グループ指導者、団員のグループ編成は、日本団は 12 グループ、ドイツ団は 13 グループに編成する。各グループの指導者は原則 1 名とする。

欠員が 10%に達する場合、両組織は事前に通告する。

なお、派遣団の構成は、両組織間において 6 月 1 日までに交換する。

6. 構成・パートナー

両国派遣団の構成およびパートナーの編成は、別に定める。

7. 時期・期間

交流の時期は両国参加団員の夏季休暇期間中（ドイツ団基本日程：7 月 23 日頃～8 月 9 日頃、日本団基本日程：8 月 1 日頃～8 月 18 日頃）とし、交流期間については移動日を含めて最大 18 日とする。

8. 交流プログラム

同時交流は一般青少年交流であり、「みんなのスポーツ」が重点的に扱われる。

異なる文化・言語を持つ双方の団員たちにとって、スポーツは「共通言語」といえることから、交流目的を達成するための手段としてスポーツを適切な形で積極的に取り入れる。

双方のプログラムを通じて、訪問国の青少年とスポーツの現状を体験することによって、団員がスポーツや青少年活動に興味を持ち、協力参加するよう動機づける。

また、スポーツ以外にも、訪問国の文化や社会に対する理解を深めるプログラムを取り入れる。

(1) 全体プログラム

交流プログラムには、交流の始めと終わりに JJSA および dsj が直轄する全体プログラムを設ける。

(2) 地方プログラム

交流プログラムには、各グループがそれぞれのパートナーを訪問する地方プログラムを設ける。地方プログラムの一部に可能な限り、グループが合同で宿泊出来るように配慮する。原則として、グループ活動ができなくなるような数か所へのグループ分割は避ける。

青少年に身近なテーマでディスカッションが実施されることが望ましい。

団員に関する情報（スポーツ種目・趣味・健康に関する事項・希望）を交流開始前の十分早い時期に、受入先に提供する。

9. 青少年中心の運営

青少年中心の運営という原則に従って、団員達は交流の準備・実施・アフターケアにおいて、自らアクティブに行動をしつつ、活動に参加するようにする。

「若者が若者のために計画運営する」という方向に向けて、受入側の青少年グループがプログラム作成および実施に参画できるよう努力する。

10. 民泊

訪問国の人・文化・生活を理解するうえで、民泊プログラムは非常に重要である。地方プログラムの作成にあたっては、民泊プログラムを取り入れる。数日間同一家庭に滞在し、ファミリーデイを設けることが望ましい。

地方プログラムの中での民泊は 2 回程度とする。

なお、参加団員の希望に応えるよう、訪問先家庭の家族構成を地方パートナー同士で交流開始前の十分早い時期に交換できるよう努力する。

11. 交流マーク

日独スポーツ少年団同時交流 25 周年にあたり JJSA によって作られたシンボルマークは、交流のシンボルとして双方で使用する。

なお、このマークは、地方の関係団体にも使用許可される。

12. 通訳・言語

交流の目的達成には、通訳の役割が非常に重要である。したがって、双方ともよい通訳を選任し、言葉の障壁を克服するよう努力する。

参加者は、日常会話程度の語学力（日・独・英語）の向上にも努める。

地方パートナー同士での直接的連携がはかられるよう、パートナー同士はこれまで以上に英語で情報交換ができるように努める。

13. 経費

国際交流の慣例により、派遣団の渡航に関する経費は派遣国、受入に関する経費は受入国が負担する。

14. 情報交換・伝達の仕方

交流に関する基本的事項は、現行のとおり JJSA と dsj 間で決定する。

双方は、情報の簡略化・情報網の整備を行い、事業の成功と事務処理作業の軽減に努める。

したがって、JJSA と dsj は、地方プログラムの効果的な情報交換のため、JJSA 地方パートナーと地方プログラムのパートナーとなる dsj 加盟団体との直接的連携を強化することに努める。

dsj の加盟団体は、2 年間の同時交流に関するあらゆる事項の窓口となる担当者を置く。

JJSA は地方パートナーの中に幹事県を置く。

dsj 加盟団体は、原則として JJSA を通じて日本の地方パートナー幹事県に情報を提供する。

同様に JJSA あるいは地方パートナー幹事県も原則として dsj を通じて、dsj の加盟団体担当者に情報を提供する。

このため、日本の地方パートナー幹事県と dsj 加盟団体担当者の名簿を交換する。

上記の方法により、少なくとも次の情報が交換される。

- プログラム希望事項
- 写真付き名簿
- アレルギー・持病・疾患に関する情報
- 地方プログラム
- 民泊家庭情報

これ以上の詳しい情報については JJSA と dsj を通じず、地方パートナー同士で直接交換を行う。

なお、情報の交換は、日本語、ドイツ語または英語で行うようにする。

情報交換にあたっては、事務処理軽減のためにも可能な限り、パソコン等に入力されたデータを提供するように努める。

II. 日独スポーツ少年団指導者交流

1. 目的

交流の目的は、JJSA および dsj の指導者が両国を相互に訪問し研修を実施することにより、それぞれの指導者の資質向上をはかるとともに、指導的任務への準備をし、日独スポーツ少年団同時交流の充実と、両国の青少年スポーツの発展に寄与することを目指すものである。

2. 参加者

派遣団の規模は、最大 10 名とする。10 名の中に組織を代表する団長を 1 名おく。

派遣団は、この事業が青少年スポーツの今後の発展と青少年交流の資質の向上に寄与すべく、また情報交換および意見調整の場として、その時々必要性に応じて編成される。

3. 時期・期間

交流は隔年で実施し、同一年度内に派遣・受入を行う。期間は最大 2 週間とし、時期は毎年両組織間の協議で決められる。

4. 研修内容

この交流は、両国のスポーツ組織とその運営および課題、スポーツにおける青少年活動の実情などを研修するものである。

また、スポーツ・青少年に関すること以外にも訪問国の文化・社会について理解を深め、研修の成果をより充実させる。

講義による理論的説明の他、さらに地方におけるスポーツや青少年活動の実態を研修するプログラムを取り入れる。

5. 共通テーマ

交流における研修成果をより大きなものとするため、両国にて協議のうえ「共通テーマ」を設定する。その際、参加者の希望もできるだけ考慮する。

また、両国指導者間における意見情報交換、フリーディスカッションの場を設けることが望ましい。

6. 通訳

交流の目的達成には、通訳の役割が非常に重要である。正確な内容伝達のため、双方とも専門知識のあるよい通訳を選任する。

7. 経費

国際交流の慣例に従い、派遣団の渡航に関する経費は派遣国、受入に関する経費は受入国が負担する。

III. その他

1. 両組織は、ドイツ連邦家庭・高齢者・婦人・青少年省（BMFSFJ）と文部科学省（MEXT）の二カ国間協定に基づいて実施される日独青少年指導者研修プログラムに参加することを確認する。

このプログラムのテーマは、両組織間の協議の上、新しい青少年問題学術研究や青少年問題の発展をふまえて設定される。

2. 両国間の今後の青少年交流の発展に、それぞれの国内において両組織とも積極的に協力する。
3. 両組織は、将来の青少年育成に関する提携関係を開発・発展することに努力する。
4. 両組織間での青少年育成に関する提携関係は、青少年活動のグローバル化、またヨーロッパおよびアジアにおける発展に適応される。
5. この同時交流と、その文化政策上の意義が両国で認められるよう、両国政府機関へのコンタクトを今後とも充実させる。
6. “Gender Mainstreaming(社会的性の平等)”と移民背景を持つ児童・青少年の統合は、ドイツの児童青少年計画の重点施策のひとつである。両組織は、提携関係のあらゆる分野においてこの原則を考慮する。
7. 本交流に参加する青少年が安全で、かつ安心して事業に参加できる環境を整備することを目的とした保護措置について別紙の通り定めることとする。
8. 本協定については両国の協議のもと、内容を変更することができる。

IV. 問題処理

本協定書について問題が生じた場合、または本協定書に定めのない事柄が生じた場合は、双方で協議し、互いに誠意をもって解決にあたるものとする。

日独スポーツ少年団同時交流パートナー編成表(2022～2023年度)

No.	グループ	日本側構成県	ドイツ側パートナー	人数
1	北海道	北海道	ベルリン、ブランデンブルク	7
2	東北Ⅰ	青森県、岩手県、秋田県	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン、体操	9
3	東北Ⅱ	宮城県、山形県、福島県	バイエルンⅠ	9
4	関東Ⅰ	群馬県、千葉県、山梨県	柔道	10
5	関東Ⅱ	茨城県、埼玉県	メクレンブルク＝フォアポンメルン、ヘッセン	12
6	北信越	長野県、新潟県、富山県、石川県、福井県	スキー、南バーデン	12
7	東海	静岡県、愛知県、三重県、岐阜県	ヴェルテンベルク	10
8	近畿Ⅰ	滋賀県、京都府、兵庫県	フェンシング、潜水連盟	14 (7,7)
	近畿Ⅱ	大阪府、奈良県、和歌山県	モータースポーツ、重量挙げ	
9	中国	鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県	ザクセン＝アンハルト、ザクセン	10
10	四国	香川県、徳島県、愛媛県、高知県	ラインラント＝プファルツ、ザールランド	11
11	九州Ⅰ	福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県	ノルトライン＝ヴェストファーレン、チェス	9
12	九州Ⅱ	大分県、宮崎県、鹿児島県	バイエルンⅡ	9
13	団長団	日本スポーツ少年団	ドイツスポーツユース	3
合計				125

2021年10月23日

日独スポーツ少年団同時交流における青少年保護措置

日本スポーツ少年団(JJSA)とドイツスポーツユース(JDSJ)は、日独スポーツ少年団同時交流を実施し、その成功にむけて協力する。

本事業の目的は両国青少年の人格形成、両団体のスポーツによる青少年の健全育成における協力と交流の促進である。その際に参加団員が安全で、かつ安心して事業に参加できる環境を整備することは重要な課題である。

そのために、両団体とも共通の青少年保護措置の重要性を認識するものである。

青少年保護措置は予防的措置並びに不測の事態が発生した場合の対応方法を網羅するとともに、日独スポーツ少年団同時交流の実情に則したものでなくてはならない。

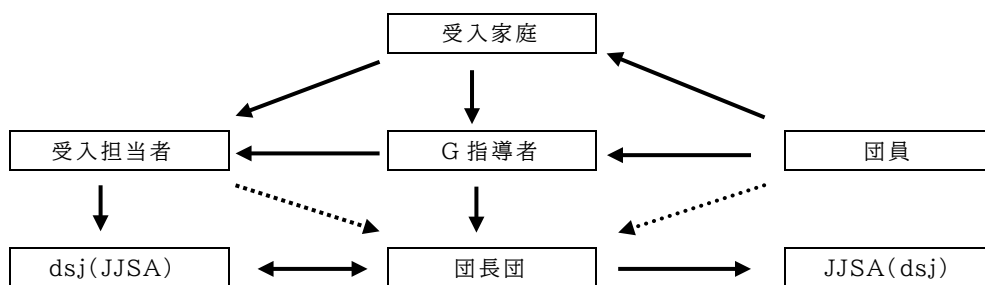
両団体はこの青少年保護措置を実施し、変更の必要性が生じた場合は、その都度両団体で協議の上、改善することとする。

1. 個人情報の取扱い

個人情報の取得は、利用目的を明確に定め、その目的の達成のために必要な限度においてのみ行うものとする。また、取得した個人情報については、利用又は第三者に提供してはならない。ただし、法令に基づく場合及び本人の同意があり、かつ業務遂行上必要な範囲においてはこの通りではない。

2. 緊急時の連絡方法と対応措置

緊急時において適切に対応するためには両団体での迅速な情報共有と対応策の検討が重要である。そのため、緊急時には以下の経路に則り連絡を取り、その都度適切な対応をする。



3. 参加団員のジェンダーに特有な関心(興味・欲求)への配慮

青少年の成長過程において、その性のあり方に基づく興味や経験は様々である。

そのため、本事業の実施に際しては、同性の指導者及び相談ができる立場となるための人選が求められる。

上記を踏まえ、そのような参加団員の年代の特徴に配慮し、両団体とも団長団、指導者及び班長の人選にあたり、男女混合の人選に配慮する。

4. 民泊家庭の選定と民泊家庭への事前研修に関する基準

民泊プログラムは同時交流を実施する上で、不可欠な要素である。

また同時に、適切な民泊家庭を選定することは容易ではないことも事実である。従って、民泊家庭の選定に際して、下記の事項について配慮する。

- ・ 民泊家庭を選定した団体は、その民泊家庭に対し、事前研修を必ず行い、本措置の内容について取り扱うこととする。
- ・ 参加団員は可能な限り、同性、同年代の青少年が最低 1 人いる家庭へ滞在する。
- ・ 未成年に関してはできる限り 1 家庭へ 2 名の滞在とする。

5. 暴力・ハラスメント・差別の防止及び対応措置

青少年に対しての、または青少年間での暴力、セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメント、差別を防止し、社会的、民族的、文化的背景、世界観、宗教、政治思想、性的性向、年齢、性別に関わらず、すべての人間の尊厳を尊重し、フェアで平等に扱う。不測の事態が発生した場合については、両団体とも上記「2. 緊急時の連絡方法と対応措置」の内容に基づき問題解決へ向け積極的に取り組む。

団長団、指導者、団員、民泊家庭、通訳への事前研修では、本保護措置の他、必要と思われる事項に関し研修を行う。

6. その他

- ・ 両団体は、青少年、特に未成年者の心身に影響を及ぼすとされる、酒・タバコなしの交流を目指す。

2021 年 10 月 23 日

●あとがき

この素晴らしい交流の本格的再開を心待ちにしていた団員や引率指導者をはじめとする日本団メンバー、ドイツスポーツユースと日本スポーツ少年団の両組織、私たちを迎えてくれたドイツの皆さんと共に、記念すべき 50 回目の日独スポーツ少年団同時交流を迎えられたことを本当に嬉しく思います。

新型コロナウイルス(COVID-19)の流行によって直接の交流が中断された約 4 年間のブランクは思いのほか影響が大きく、参加団員の応募が以前に比べて少なかったり、日本とドイツのどちらでも準備が過去ほどスムーズに進まなかったりすることもありました。

それでも、不安があるなかで勇気をもって日本を飛び出した私たちを、ドイツの皆さんは充実したプログラムと温かな気持ちで迎えてくれました。想定外の涼しい気候で体調を崩す団員も出るなど不測の事態が起きた際にも、万全の体制と臨機応変な対応で私たちをサポートしていただいた方々に改めて感謝いたします。

それぞれがたくさんの成果を得て、最終日には充実した様子で日本団 58 名全員が無事に帰国できたこと、つまり 50 本目のバトンを次へ繋ぐことができたことは日本団庶務として一番の喜びです。

長きにわたり繋がれてきた日本とドイツの絆の強さこそがこの交流のもっとも大きな力です。今回この交流に参加した皆さんには是非とも、その絆を次へと繋げ多くの人に広げていってほしいと思います。そしてそれが日独交流の更なる発展と両国の青少年のより良い未来に繋がっていくと確信しています。

佐藤 慎也(第 50 回日本団庶務)

今年は 2019 年以来4年ぶりに、日独お互いの国を訪れる本来の形で交流を実施することができました。COVID-19 の感染拡大は一旦の終息をうかがわせているとはいえ、地政学的リスクが益々高まる今日に、国際平和の尊さを実感するこの事業をサポートできたことに、心から感謝しています。

都道府県体育・スポーツ協会の皆様、受入市町村の皆様および通訳の皆様をはじめ、この事業にご協力いただいた全ての方々には御礼の言葉もありません。皆様に万全にサポートすべきところ、反対に、皆様にサポートいただいたことばかりであったように思います。皆様のご協力があったこそ、この事業が 50 周年を迎えることができたのだと改めて実感いたしました。

交流終了後、団長団をはじめ関係各所から様々なフィードバックをいただきましたが、最も重要であると感じたのは「人と人との交流機会が最大の財産である」ということです。ドイツ団の全員が全国各地で様々な素晴らしい体験を得ることができましたが、特に満足度が高く見えたグループは、ホストファミリーをはじめとする受入地の人々との交流機会が豊富であったグループであったように感じます。彼らは、ホストファミリーと一緒にスポーツ交流を楽しんだ子どもたちとの思い出を、心から楽しそうに語っていました。この様子は、ホストファミリーからお寄せいただいた感想文(p117)からもよく窥えます。ドイツ団はきっと、日本で得た新しい友人のことを家族や友人に誇らしく話していることでしょう。また、ドイツ団を受け入れた日本の皆様も、今回の経験を周囲の皆さんに楽しくお話しているのではないのでしょうか。このようにして、交流への参加者が自身の思いを周囲へ伝えていくことで、国際友好の輪は指数関数的に大きく広がっていくのだと思います。

今後、この事業をサポートいただける皆様には、是非、ホストファミリーや受入地の子供たちとの交流をはじめとする「人と人との交流機会」を最大限にプログラムに組み込んでいただくのがよいのではないかと思います。これこそが、国際交流成功のための最大のポイントであるように思います。

鷹栖 藍太朗(ドイツ団受入担当)

第 50 回日独スポーツ少年団同時交流報告書

■発行日 2024 年 3 月 19 日

■編集発行 公益財団法人日本スポーツ協会日本スポーツ少年団

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町 4-2 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 内

TEL03(6910)5814

次は私たちの時代 誓う、フェアプレー



森山真稔 (26 歳 フライングディスク)



三木萌子 (21 歳 サッカー)



池田春子 (22 歳 水泳)



小山滉平 (20 歳 ローラースケート)



山内康輔 (21 歳 バレーボール)



中島理沙 (21 歳 なぎなた)

「フェアプレー」って、空気のように当たり前のようで、改めて考えてみると、わかっていないものかも…

そんなフェアプレーを、JSPO (日本スポーツ協会) は考え続け、さまざまな取組を行っています。

日本の未来を担う若者がフェアプレーをとことん考える「フェアプレー会議」もそのひとつ。

フェアプレーを考えている JSPO も、スポーツを楽しむ皆さんにとっては

空気のような存在なのかもしれません。

それでも、JSPO はあなたのスポーツを確かにサポートしています。

あなたのフェアプレー宣言で、ともに望む未来へ。



WEB でフェアプレー宣言募集中

フェアプレー宣言

検索

2019.04 時点



公益財団法人日本スポーツ協会
日本スポーツ少年団

Japan Sport Association
Japan Junior Sport Clubs Association